

西暦	月	日	日誌
2023	10	1	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天ちよと時雨、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は20～24℃、南の風4m/s、陽射しは弱く、湿度は93%、夜明けに雨、雨傘をささず。ワイシャツのまま帰宅。コガモの群れ5羽、鳥屋野潟、ヨシガモ♂幼鳥、ヒドリガモ♂エクリプスとコガモ、を撮影した。ヨシガモは尾羽から♂であるが、羽がフワフワしていることから幼鳥と同定した、ネット検索の結果、似たような写真があった。ヒドリガモは「フィールド図鑑日本の野鳥」に『雌より頭部の赤みは強く、雨覆は白い。』と記載されていることから同定した。
2023	10	2	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は23～24℃、西北西の風4m/s、陽射しは弱く、湿度は49%、往路、復路で陽傘をさす。ワイシャツのまま帰宅。鳥屋野潟、クルマバタモドキ、カンムリカイツブリ夏羽横姿、鳥屋野潟、ヒドリガモ♂エクリプスと♀、ヨシガモ♂幼鳥、ヨシガモ♀とヒドリガモ♀、ハシビロガモ♀、マガモ♀、カンムリカイツブリ夏羽が羽を広げる(後姿)、ニホンミツバチの自然巣、キンクロハジロ♂幼鳥第1回冬羽に換羽中、鳥屋野潟、コガモ♂エクリプス、アオサギがグルーミング(後姿)、カワセミ♀見返り、4羽のオナガガモ、を撮影した。キンクロハジロはネット情報で、鉛色の上クチバシ上面が薄い黒色になっていることを着眼点として検索したら、スズガモやコスズガモではなくてキンクロハジロ♂幼鳥の第1回冬羽に換羽中の姿であることが判明した。「フィールド図鑑日本の野鳥」には、これらの情報や説明はなかった。
2023	10	3	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は22～24℃、西の風1m/s、陽射しは弱く、湿度は51%、往路、復路で陽傘をさす。ワイシャツのまま帰宅。チュウサギの後姿、鳥屋野潟、カンムリカイツブリ夏羽横姿、鳥屋野潟、ヒドリガモ♂エクリプス、アカミミガメとクサガメの甲羅干し、ハシビロガモ♂幼鳥とコガモ♀、カンムリカイツブリ夏羽がグルーミングで羽を銜える、鳥屋野潟、コガモ♂エクリプス横姿、チュウダイサギ若鳥がコウホネ群生地です餌を探す、深水中に佇み首を伸ばすチュウダイサギ若鳥横姿、チュウダイサギ若鳥の横顔、3羽のヨシガモ♂エクリプス、2羽のヨシガモ♂エクリプス、を撮影した。ヨシガモ♂エクリプスは「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『成鳥♂の黒いクチバシ上面付け根に白い班がある正面の顔』が描かれていること、写真を拡大すると羽模様の一部換羽し始めていることが判明したことから、♂エクリプスと同定した。やはり鮮明な写真でない、エクリプスの同定は困難である。
2023	10	4	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は19～24℃、南南東の風3m/s、陽射しは弱く、湿度は72%早朝に雨、往路、復路で陽傘をさす。ワイシャツのまま帰宅。鳥屋野潟、ハシビロガモの群れ5羽、カンムリカイツブリ夏羽横姿、ヒドリガモとヨシガモ、ヨシガモの群れ5羽、カンムリカイツブリ夏羽前姿、を撮影した。画像が鮮明でないため、種名の同定のみ。午前中にワクチン接種があるので、撮影時間15分程度で帰路に着く。
2023	10	8	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は18～21℃、南南東の風2m/s、陽射しは弱く、湿度は68%、往路、復路で陽傘をさす。ワイシャツのまま帰宅。チュウサギの前姿、鳥屋野潟、2羽のマガモ♂エクリプス、カイツブリ夏羽横姿、水の中を歩くチュウダイサギ若鳥横姿、巻層雲うす雲、ノシメトンボ♀横姿、アキアカネ♀横姿、コガモ♀横姿、ホシハジロ♀、ヒドリガモ♂エクリプス1羽と♀2羽、アカゲラ♀、を撮影した。ホシハジロ♀は「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『ユーラシア大陸北部から渡来する冬鳥。全国的に記録され、北海道では繁殖記録がある。河川、池、水田、湖沼、内湾、港などに生息し、休息場から夕方に飛び立ち、採食場へ移動して水生植物の茎や根、種子などの他、潜水して甲殻類などの動物質も食べる。雄は頭部が赤茶色で、虹彩は赤い。雌の頭部は暗褐色で白いアイリングがあり、その白線は後方へと伸びる。』と書いてある。また、♂の(エクリプスも)虹彩は赤色、♀は茶色であることから、♀と同定した。

西暦	月	日	日誌
2023	10	10	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。雨天→曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は18～21℃、南南東の風2m/s、陽射しは弱く、湿度は95%、往路は雨傘、復路は陽傘をさす。ワイシャツで帰宅。鳥屋野潟、ヨシガモ♀、5羽のオナガガモ、5羽のヒドリガモ、マガモ♂エクリプス、7羽のオナガガモファミリー、カワウ♀若齢の横顔、を撮影した。オナガガモ7羽は、しんがりに親鳥の♂と♀、その前方に体格がやや小さめの5羽の若鳥が家族の様に一緒に遊泳していたことから、ファミリーとした。時雨、日本海には暗雲、ロート状の雲もが垂れ下がっていた。天気が急変する恐れがある最悪の天気であった。
2023	10	12	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は17～20℃、南の風3m/s、爽やかな風、陽射しは弱く、湿度は59%、往路でジャンパーを脱ぎ、往路復路で陽傘をさす。ワイシャツで帰宅。2羽のカイツブリと2羽のコガモ、鳥屋野潟、ルリシジミ♂、マガモの♀と♂、ヨシガモ♀、鳥屋野潟、3羽のオナガガモと4羽のヒドリガモ、2羽のマガモ♂エクリプス、オイカワ、ニホンミツバチの自然巣ハニカム構造、2羽のコハクチョウ(4羽の群れ)、3羽のカンムリカイツブリ、鳥屋野潟、ダイサギの横顔、岸辺に佇むダイサギ、岸辺に佇むアオサギ横姿、を撮影した。ダイサギは「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『夏鳥、冬鳥、漂鳥としてほぼ全国で見られる。中国から渡来する。休息や繁殖、冬期の採食などでは群れをつくるが、採食場では1羽でなわばりをもって行動するのがふつう。魚類をよく捕り、カエルやザリガニなども食べる。雌雄同色。嘴は夏羽では黒く、冬羽や若鳥では黄色。冬羽の亜種ダイサギの月至節から附脈にかけては白かピンク色っぽく、亜種チュウダイサギは全体に黒っぽい。』と書いてある。また「にいがた野鳥日誌」では冬鳥であること、足が黄色っぽいことからダイサギと同定した。
2023	10	13	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は18～21℃、南の風3m/s、爽やかな風、陽射しは弱く、湿度は64%、往路でジャンパーを脱ぎ、往路復路で陽傘をさす。ワイシャツで帰宅。チュウサギ横姿、鳥屋野潟、オオカマキリ、4羽のマガモ♂エクリプス、マガモ♀横姿、オナガガモ♂エクリプス3羽と♀4羽とマガモ♂と♀、オナガガモ♂エクリプスと♀、コウホネ群生地に佇むアオサギ前姿、ヨシガモ♂エクリプス、ハクチョウV字型飛翔28羽、を撮影した。ハクチョウは、コハクチョウかオオハクチョウか不明である。ヨシガモはネット検索で同じ様子の写真があったこと、胸のあたりが一部成鳥♂の羽に換羽していることから、♂エクリプスと同定した。途中でバッテリー切れのため、撮影断念。
2023	10	14	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は17～22℃、南の風3m/s、爽やかな風、陽射しは弱く、湿度は66%、往路でジャンパーを脱ぎ、往路復路で陽傘をさす。ワイシャツで帰宅。岸辺に佇むチュウサギ2羽、鳥屋野潟、ヨシガモ♂エクリプスと♀、マガモ♂エクリプス横姿、マガモの♀と♂が並んで遊泳、鳥屋野潟、カンムリカイツブリ幼鳥第1回冬羽横姿、ヒドリガモ♂エクリプス、鳥屋野潟、カワセミ♀幼鳥前姿、同じく後姿、を撮影した。カワセミは「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『留鳥、または漂鳥。ほぼ全国。生息環境は海岸か、低山の河川、湖沼、池など。繁殖期はつがい、それ以外では1羽でなわばりを作って生活する。一定の休息場と採食場があり、ある程度決まった時間で行動する。高い場所に止まったり、停空飛行したりして水中に飛び込み、魚類や甲殻類などを捕る。♂雄ほぼ同色。雄のほうが光沢は強く嘴はほぼ黒い。雌の下嘴は赤っぽい。挿絵には、幼鳥は全体に光沢はなく、胸部は黒っぽい。』と書いてあることから、♀幼鳥とした。往路の弁天橋で、栗ノ木川の方へ一直線に飛翔するカワセミを見たが、同じ鳥かどうかは分からない。しかし、魚類を捕食することから縄張り、鳥屋野潟全域と思われる。

西暦	月	日	日誌
2023	10	16	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は21～22℃、西北西の風5m/s、爽やかな風、陽射しは弱く、湿度は57%、往路でジャンパーを脱ぎ、往路復路で陽傘をさす。ワイシャツで帰宅。鳥屋野潟、チュウサギがコウホネ群生地で餌を探す横姿、ハゼノキ紅葉、ユリカモメ冬羽、鳥屋野潟、ジョウビタキ♀横姿、ダイサギが水の中を歩いて獲物を探す、マガモ♂エクリプスと同じく♀と♂、鳥屋野潟、ウシガエル幼体、コウホネ群生地に佇むアオサギ前姿、を撮影した。ジョウビタキは「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『中国から渡来する冬鳥。生息環境は市街地から山地の林や農耕地、公園、河原など。越冬期は雌雄に関係なくなわばりをもって生活する。渡来直後は高い場所で、なわばりを王張するように鳴く。昆虫やミズズ類、クモ類などを食べ、本の実も食べる。雄の頭頂部は灰白色で、雌は頭からの上面は灰褐色。羽に白斑があるのが特徴。』と書いてあることから、ジョウビタキ♀とした。ユリカモメは『ユーラシア大陸から冬鳥として渡来。冬鳥の成鳥の嘴は赤黒い。第2回冬羽も嘴が赤く成鳥に似るが、嘴や足の色は成鳥ほど濃くない。3年目で成鳥になる。』と書いてある。画像は不鮮明だが、嘴が赤黒く見えるので成鳥とした。
2023	10	17	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は18～20℃、南西の風4m/s、涼しい風、陽射しは弱く、湿度は55%、往路でジャンパーを脱ぎ、往路復路で陽傘をさす。ワイシャツで帰宅。岸辺に佇むチュウサギ3羽、同じく前姿(横顔)、同じく餌を飲み込む、鳥屋野潟、コカマキリ、ホシハジロ♀3羽とヒドリガモ、ヨシガモ♂エクリプス、鳥屋野潟、カワセミ♀幼鳥後姿(横顔)、コハクチョウ幼鳥、3羽のコハクチョウ、コハクチョウ幼鳥1羽と成鳥2羽、鳥屋野潟、コハクチョウ群れ34羽、カワウ♂のマリンブルーアイズ、を撮影した。コハクチョウは「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『ツンドラ地帯から渡来する冬鳥。北海道北部に渡来し、その後、本州の越冬地へ移動。日本海側に多く、太平洋側は関東地方の一部まで。家族で行動し、他の家族と群れで生活する。水田などで落ち穂や青草の葉、根、種子などを食べる。雌雄同色。幼鳥は全体が灰褐色で、越冬中に徐々に白くなっていく。オオハクチョウは頸が長く、嘴の黄色い部分が黒い部分にとがって入る。』と書いてある。コハクチョウはクチバシがピンク色の幼鳥を見ることが多い。オオハクチョウの幼鳥はクチバシが白色の幼鳥を見ることが多い。鳥屋野潟で越冬するハクチョウは少ない。ほとんどが休憩して西の方へ飛び去って行く。田んぼの落ち穂が少ないのか？積雪が多いからか？たぶん、積雪の少ない、田んぼの落ち穂が食べやすい場所を移動しながら越冬しているのかも知れない。
2023	10	18	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は18～21℃、南の風3m/s、涼しい風、陽射しは弱く、湿度は66%、往路でジャンパーを脱ぎ、往路復路で陽傘をさす。ワイシャツで帰宅。チュウサギ後姿、鳥屋野潟、モンシロチョウ♀、コカマキリ♀、ユリカモメ冬羽、換羽中のカイツブリ(夏羽から冬羽)、コウホネ群生地に着地したアオサギ横姿、オナガガモ♂1羽と♂エクリプス1羽と♀2羽、鳥屋野潟の湖面にコハクチョウ400羽の群れ、コハクチョウ群れ400羽、3羽のコハクチョウ、湖水を飲むコハクチョウ、頭を羽の上にのせて眠る4羽のコハクチョウ、コゲラ横姿、同じく後姿見返り、カンムリカイツブリ浮上横姿(冬羽に換羽中)、を撮影した。コゲラの♂は頭部に赤い斑点がある、♀は無い。しかし、斑点が小さいので隠れて見えないことが多い。赤い斑点が確認できたものは♂とし、見えないものは性別が不明なので種名の「コゲラ」と命名することにした。

西暦	月	日	日誌
2023	10	19	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は19～24℃、南の風4m/s、涼しい風、陽射しは弱く、湿度は64%、往路でジャンパーを脱ぎ、往路復路で陽傘をさす。ワイシャツで帰宅。鳥屋野潟、イチモンジセセリ吸蜜、ニホンミツバチがセイタカアワダチソウの花の蜜を吸う、ルリシジミ、鳥屋野潟、ホシハジロ♀とオナガガモ♀エクリプス、ホシハジロの群れにオナガガモ♀エクリプスが混じる、オナガガモ♀エクリプス2羽、岸边に佇むアオサギ横姿、ニホンミツバチの自然巣ハニカム構造、アオダイショウ、群れから逸れた3羽のコハクチョウ、鳥屋野潟、オオハナアブ♀、マミチャジナイ♀前姿、を撮影した。マミチャジナイは「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『旅鳥、または少数が冬鳥。ほぼ全国に記録はある。生息環境は平地から山地の林など。渡り途中は群れで見られるが、数日間いるときには1羽から数羽で行動していることが多い。秋には木の実をよく食べ、春には地上でミズ類などを捕る。雄成鳥は頭部が濃い青灰色で、雌は褐色。雌雄とも眉斑と眼の下は白い。雌の喉は白っぽい。アカハラは眉斑がないか、あっても本種より不明瞭で眼の下は白くない。』と書いてある。また、姿絵が記載されており、♀と同定した。
2023	10	20	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は18～23℃、南の風4m/s、涼しい風、陽射しは弱く、湿度は62%、往路でジャンパーを脱ぎ、往路復路で陽傘をさす。ワイシャツで帰宅。鳥屋野潟、コハクチョウ6羽飛翔、鳥屋野潟、ダイサギが片足でコウホネ群生地に佇む横姿見返り、岸边の倒木で休む4羽のコガモ、群れから逸れた2羽のコハクチョウ、鳥屋野潟、片足で立つコガモ♀後姿、ウマノスズクサ、ヨメナの花(淡紫色)、群れから逸れた2羽のコハクチョウ、チュウサギ横姿、を撮影した。コハクチョウは昼間は田んぼへ出かけて、落穂拾いをしている。家族単位で行動するので、大きな群れからは逸れて、数羽だけが鳥屋野潟へ戻ってくることがあるのか？大きな群れが渡来した後は、かならず群れから逸れた様に見える(あちこち見渡して、不安そうにしている)コハクチョウを見かけることが多い。
2023	10	22	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は12～14℃、西南西の風3m/s、寒い風、陽射しは弱く、湿度は63%、往路でジャンパーを脱ぎ、往路復路で陽傘をさす。ワイシャツで帰宅。鳥屋野潟、オオバン見返り、チュウサギ前姿、鳥屋野潟、ホシハジロ♂が2羽と♀1羽、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中2羽威嚇ポーズ、ホシハジロ♀が2羽、キンクロハジロ♂、ダイサギが首を伸ばして水の中を歩く、鳥屋野潟、ミゾソバの花(淡紅色)、を撮影した。急に寒くなった。冬用のタイツをはいたので、全身が暖かかった。鳥屋野潟の湖面中央には、たぶん渡って来たばかりのホシハジロとキンクロハジロとマガモとヒドリガモが混在して休憩していた。
2023	10	23	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は14～19℃、南の風3m/s、涼しい風、陽射しは暖かい、湿度は79%、往路でジャンパーを脱ぎ、往路復路で陽傘をさす。ワイシャツで帰宅。チュウサギ横姿、鳥屋野潟、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中横姿、鳥屋野潟、ホシハジロ♀と♂、同じく♂羽ばたく、鳥屋野潟、イシミカワ果実、ダイサギが深水の中を歩いて首を伸ばして獲物を探す、を撮影した。冬型の気圧配置が崩れ、陽射しが暖かく、寒さが和らいだ。鳥屋野潟の湖面中央には、ホシハジロとマガモとヒドリガモが混在していたが、数は少ない。ヨシ原の岸边に隠れて、日向ぼっこをしながら、休んでいるのかも知れない。コハクチョウの鳴き声は聞こえなかった。沖の方からカンムリカイツブリのゲツゲツという興奮したような鳴き声が聞こえるだけであった。

西暦	月	日	日誌
2023	10	24	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は17～22℃、南の風4m/s、涼しい風、陽射しは暖かい、湿度は62%、往路でジャンパーを脱ぎ、往路復路で陽傘をさす。ワイシャツで帰宅。鳥屋野潟、コハクチョウ群れ24羽、鳥屋野潟、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中見返り、ハシビロガモ♀、ホオジロ♀、トモエガモ♀、鳥屋野潟、岸辺に佇むアオサギ横姿、キンクロハジロ♀と♂、ヨシガモ♀エクリプスと♀、ヒドリガモ♀エクリプスと♂、を撮影した。トモエガモは「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『ユーラシア大陸北部から渡来する冬鳥、本州の日本海側に多く、太平洋側では不定期に少数が記録されるだけ。南西諸島では迷鳥。生息環境は河川、池、湖沼など。日中は休息し、夕方から行動しはじめ、水中に潜って沈んでいるドングリや、地上ではイネ科植物の種子などを食べる。雄の顔にある巴模様は、雌にもうっすらとそれらしきものが見られる。雌はシマアジ雌に似るが、本種の眼の上下の白線は目立たない。』と書いてあり、雌の姿絵が描かれていることから、♀と同定した。本種は毎年、渡来しているが、沖合で休憩していることが多い。ホオジロは同じく『留鳥、または漂鳥。生息環境は平地から山地の疎林、農耕地、アシ原、河原など。類似種のカシラダカの胸には茶色の斑がある。』と書いてあり、姿絵が描かれているので♀と同定した。陽射しがあり南風の暖かい日は、小鳥をはじめ水鳥たちも活発に動き回る。
2023	10	25	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は19～21℃、南の風4m/s、涼しい風、陽射しは暖かい、湿度は65%、往路でジャンパーを脱ぎ、往路復路で陽傘をさす。ワイシャツで帰宅。鳥屋野潟、アマサギ冬羽もしくは幼鳥、コハクチョウ群れ20羽、鳥屋野潟、ヨシガモ♀、カンムリカイツブリ求愛行動～頭を左右に振る、マガモ群れ、カンムリカイツブリ夏羽横姿、鳥屋野潟、マガモと一緒に行動するハシビロガモ♀、コガモ♀エクリプス横姿、ダイサギが深水にたたずむ、コバネイナゴ、ダイサギが欄干に立つ、を撮影した。アマサギは「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『雌雄同色。成鳥夏羽の頭部から胸、背には橙黄色の飾り羽がある。冬羽と幼鳥はほぼ全体が白い。チュウサギの冬羽や幼鳥は、嘴や足が長いことで識別できる。』と書いてあり、姿絵が描かれているので冬羽もしくは幼鳥とした。ダイサギは、『冬羽の亜種ダイサギの脛節からふ蹠にかけては白かピンク色っぽく、亜種チュウダイサギは全体に黒っぽい。』とかいてあることから、同定した。ハシビロガモ♀がマガモの群れの中に入って一緒に行動しているのは、どうしてなのか？本には、『雌雄ともマガモに似るが、嘴は扁平なことで識別できる。』と書いてある。鳥の視力は人間の5倍といわれているので自分と同じ種を見間違えることは考えられない。ひょっとすると、コミュニケーションをとっているのかもしれない。なぜなら、両種とも故郷(ユーラシア大陸とアメリカ大陸)の場所がほぼ同じである。
2023	10	26	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は17～21℃、南の風3m/s、涼しい風、陽射しは暖かい、湿度は70%、往路でジャンパーを脱ぎ、往路復路で陽傘をさす。ワイシャツで帰宅。コウホネ群生地にたたずむコサギ横姿、鳥屋野潟、キンクロハジロ♀エクリプス、ヒドリガモ♀エクリプスと♀、鳥屋野潟、コハクチョウ群れ60羽、ホシハジロ群れにキンクロハジロ♂が混じる、鳥屋野潟、ダイサギが欄干に立つ、を撮影した。キンクロハジロは「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『ユーラシア大陸カムチャッカ半島のあたりからヨーロッパのスカンジナビア半島までの北部で生息し、日本には冬鳥として渡来する。全国に渡来し、北海道では少数が繁殖する。生息環境は湖沼、池、河川、内湾、港など。後頭部には冠羽があり、雄は長めで雌は短い。雌雄とも虹彩は黄色。スズガモ雌によく似ているが、本種の後頭部には冠羽があり、スズガモの頭部は丸みがあって冠羽はない。』と書いてあり、姿絵が描かれている。♀に似ているが、嘴基部が白っぽい褐色になっていないことから、♂エクリプスとした。ホシハジロの群れに混じってキンクロハジロ♂と一緒に行動しているのは、たぶん故郷がほぼ同じであり、途中から群れを作って一緒に渡来してきたからではないのか？……私の妄想である。

西暦	月	日	日誌
2023	10	30	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は15～16℃、南南西の風3m/s、涼しい風、陽射しは弱い、湿度は90%、往路でジャンパーを脱ぎ、往路復路で陽傘をさす。ワイシャツで帰宅。チュウサギ横姿、同じく採餌、鳥屋野潟、アカゲラ♀後姿、ハシビロガモ♂エクリプス、ヒドリガモとアメリカヒドリとの交雑個体♂、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中横姿、鳥屋野潟、欄干に上でコガモ♂エクリプスが羽を開く横姿、ダイサギが岸辺を歩く、を撮影した。ヒドリガモとアメリカヒドリの交雑個体は「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『マガモ×カルガモの雑種とともに、どこにでもいると言ってもよいほど多くの雑種が見られ、羽衣の相違も多くある。』と書いてあり、姿絵が描かれている。ヒドリガモがユーラシア大陸北部に生息し、アメリカヒドリが北アメリカ大陸北部に生息しているが、相互にベーリング海峡(約80km)を往来しているらしい。アメリカとロシアも、この鳥たちを見習って、お隣さん同士、世界平和のために交流して欲しいものである。
2023	11	1	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は18～21℃、南の風3m/s、涼しい風、陽射しは暖かく、湿度は66%、往路でジャンパーを脱ぎ、往路復路で陽傘をさす。ワイシャツで帰宅。鳥屋野潟、逸れた(迷子の)コハクチョウ幼鳥、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中横姿、ヨシガモ♂エクリプス、マガモとオナガガモとコガモの群れ、マガモ♂エクリプスと同じく♀、鳥屋野潟、ダイサギが深水の中を歩いて獲物を探す、岸辺に佇むアオサギ横姿、ニホンミツバチの自然巣ハニカム構造、を撮影した。午前9時を過ぎると、水鳥たちは昼寝をしている。たぶん、ヨシ原の岸辺で寝そべっているのだろう。沖合にいる群れは、渡来または移動途中の水鳥たちである。早朝に来ると、餌場に向かう水鳥たちを撮影できるのかも知れない。
2023	11	3	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は18～24℃、南の風4m/s、爽やか風、陽射しは暖かく、湿度は69%、往路でジャンパーを脱ぎ、往路復路で陽傘をさす。ワイシャツで帰宅。鳥屋野潟、アオジ♀横姿、鳥屋野潟、下弦の月、トモエガモ♂エクリプス、マガモ♂エクリプスとホシハジロ♂とオナガガモ♂、鳥屋野潟、アオダイショウ幼蛇の尾部、3羽のユリカモメ冬羽、カンムリカイツブリ冬羽横姿、を撮影した。トモエガモは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『ユーラシア大陸北部から渡来する冬鳥。本州の日本海側に多く、太平洋側では不定期に少数が記録されるだけ。南西諸島では迷鳥。生活環境は河川、池、湖沼など。日中は休息し、夕方から行動しはじめ、水中に潜って沈んでいるドングリや、地上ではイネ科植物の種子などを食べる。雄の顔にある巴模様は、雌にもうつすらとそれらしきものが見られる。』と書いてあり、姿図の挿絵には『エクリプス→生殖羽、脇羽に褐色の羽が残るものも多く、幼鳥から第1回生殖羽に移行するものはV字状になり、成鳥羽では丸みがある。』と書いてある。不鮮明な画像であるが、脇羽が褐色であること、V字状か丸みがあるのかは判断できないので♂エクリプスとした。毎年、沖合で見かける鳥である。岸辺に近づく事はない。2001年12月26日に、愛知県名古屋市の東山動植物園で撮影した画像が一番鮮明であるが、当時のコンパクトデジカメはFinePix2800Zで1145×853ピクセルの解像度である。
2023	11	5	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は18～20℃、東南東の風1m/s、ほぼ無風、陽射しは暖かく、湿度は79%、往路でジャンパーを脱ぎ、往路復路で陽傘をさす。ワイシャツで帰宅。チュウサギ横姿、鳥屋野潟、ハゼノキ紅葉、キタテハ♀、トモエガモ♂エクリプスとオナガガモとマガモの群れ、ヒドリガモとマガモ、コガモ、オナガガモの群れ、鳥屋野潟公園水路のソメイヨシノ紅葉、コハクチョウのファミリー、鳥屋野潟、ダイサギが深水にたたずむ、を撮影した。キタテハは、「日本のチョウ増補版」に、写真が掲載され夏型♀は色が淡く黒斑がオスよりも小さいことから、♀と同定した。なお、よく似ているシータテハの写真が隣に掲載され、羽の凸部が長いのがシータテハ、短く三角形なのがキタテハである。キタテハは11月下旬頃まで見られるようである。今までに私が撮影したのは44画像であるが、関川村の霧出地区で11月19日に撮影したものが最も遅い。

西暦	月	日	日誌
2023	11	6	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は22～26℃、南東の風5m/s、やや強い風、陽射しは弱く、湿度は61%、ワイシャツで出かけ、往路復路で陽傘をさす。鳥屋野潟、オンブバッタ、鳥屋野潟、カンムリカイツブリ冬羽前姿、ウマノスズクサ、コハクチョウ幼鳥と成鳥、鳥屋野潟、コカマキリ、ヨシガモ♂エクリプスとヒドリガモ♂エクリプス、コハクチョウ群れ14羽、を撮影した。オンブバッタは、「日本の昆虫生態図鑑」に、『出現期は6月～11月。北海道、本州、四国、九州、南西諸島に生息。緑色から褐色までいろいろな色調があり翅端部は赤い。顔の側面と前胸側縁の下端にイボ状突起が並ぶ。前翅は腹端を越えるが飛ぶことはできない。背の低い草地に多く、オスはメスの背に乗っていることが多い。』と書いてある。今までに43画像撮影したが、8月23日が最も早い撮影日で、11月6日が最も遅い撮影日である。
2023	11	8	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は15～15℃、北西の風2m/s、ほぼ無風、陽射しは弱く、湿度は62%、ワイシャツで出かけ、往路でジャンパーを脱ぎ、往路復路で陽傘をさす。鳥屋野潟、キクイモの花(黄色)、ハゼノキ紅葉、鳥屋野潟、コハクチョウ、カンムリカイツブリ冬羽見返り、鳥屋野潟、ダイサギが深水にたたずむ、ハジロカイツブリ第1回冬羽、を撮影した。ハゼノキは、「よくわかる樹木大図鑑」に、『落葉広葉小高木。樹高10m。分布は本州(関東南部以南)、四国、九州、沖縄。おもに沿岸地域の山野に自生している。紅葉がとても鮮やかな赤に染まる。樹液に触れるとかぶれる。開花期5～6月。結実9～11月。』と書いてある。今までに15画像撮影したが、全て湖桜第2公園の同じ木である。葉が赤く染まった時の画像で、早いものでは7月22日、遅いものは11月8日である。
2023	11	9	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、快晴、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は14～20℃、南南東の風4m/s、ほぼ無風、陽射しは弱く、湿度は69%、往路でジャンパーを脱ぎ、往路復路で陽傘をさす。鳥屋野潟、コハクチョウ群れ22羽、鳥屋野潟、ヒドリガモ♂エクリプス2羽と♀1羽、2羽のトモエガモ♂エクリプス、鳥屋野潟、ダイサギが首を伸ばして水の中を歩く後姿、同じく横姿、カンムリカイツブリ冬羽横姿、セグロカモメ横姿、ヒドリガモ♂エクリプス、カワラヒワ♂前姿、を撮影した。トモエガモ♂エクリプスは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、♂エクリプスと♀の姿図が載っている。『巴模様は、雌にもうっすらとそれらしきものが見られる。』と書いてある。しかし、筆者が撮影した茶色っぽい♂エクリプスは、明らかに顔模様が♀の姿図と違う。ネット検索による「カモ類の識別」には初期の♂エクリプスの画像があり、顔模様がよく似ている。しかし、幼鳥の可能性もある。筆者が撮影した画像が不鮮明で同定は困難であるが、とりあえず♂エクリプスと命名した。
2023	11	11	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は10～11℃、北西の風8m/s、寒風、陽射しは弱く、湿度は63%、ジャンパーは脱がず、陽傘も不要。鳥屋野潟、トモエガモ♂とオナガガモ♀とマガモ♂と♀、コハクチョウ、岸辺に佇むアオサギ前姿横顔、を撮影した。強風で湖面が波立つ。「新潟市 潟のデジタル博物館」の鳥屋野潟の鳥類で紹介されていない(希少種保護のため潟の名称は非公開となっている)トモエガモを沖合でよく見かける。オナガガモやマガモの群れの中にいることが多い。湖面が風浪であっても、高波を避けて岸辺や入り江、水路やため池等に避難しないようである。トモエガモは狩猟鳥獣ではないが、人に対して警戒心が強いようである。

西暦	月	日	日誌
2023	11	12	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は10～11℃、東の風3m/s、無風、陽射しは弱く、湿度は62%、ジャンパーは脱がず、陽傘も不要。カンムリカイツブリ冬羽見返り、鳥屋野潟が凧で鏡の様な水面、トモエガモ♂と♀エクリプス、トモエガモとオナガガモの群れ、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中横顔、群れから逸れた2羽のコハクチョウ、を撮影した。無風で鏡の様な湖面。沖合では、いつもの様に水鳥たちが羽でクチバシを隠すように寝ている。とても静かな鳥屋野潟で、2羽のコハクチョウの鳴き声だけが響く。
2023	11	13	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は10～11℃、西の風5m/s、湖面が風浪で波立つ、陽射しは弱く、湿度は62%、ジャンパーは脱がず、陽傘も不要。チュウダイサギが深水の中を歩く、同じく深水の中で見返り、風浪、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中横姿、風浪、マガモ♂波乗り、鳥屋野潟、コハクチョウ後姿、同じく幼鳥横姿、空っぽになったニホンミツバチの自然巣、を撮影した。チュウダイサギは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に『両亜種は似ているが、冬羽の亜種ダイサギの脛節から跗蹠にかけては白かピンク色っぽく、亜種チュウダイサギは全体に黒っぽい。』と書いてあることから、同定した。ニホンミツバチの自然巣から蜂がいなくなった。分蜂したのだろうか？。NHKのワイルドライフによると、寒波により気温が下がった時、働きバチは巣の奥でおしくらまんじゅうをする様に集まって、温めあうらしい。
2023	11	15	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は10～16℃、南南東の風3m/s、陽射しは弱く、湿度は70%、ジャンパーは帰路で脱ぐ、往路復路で陽傘をさす。鳥屋野潟、シジュウカラ横姿、鳥屋野潟、ハシビロガモ♀、トモエガモ♀2羽♂2羽、巻雲(高度5000～13000メートル)すじ雲、コハクチョウ幼鳥が羽ばたく、コハクチョウ幼鳥と成鳥、カワセミ♀前姿、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中横姿、を撮影した。ハシビロガモは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に『♂エクリプスは、虹彩は黄色く眼の周囲は黒色』と書いてある。♀は虹彩が茶褐色で目の周囲は黒色ではないことから♀と同定した。カワセミは、同じく『雌雄ほぼ同色。雄のほうが光沢は強く、嘴はほぼ黒い。雌の下嘴は赤っぽい。雌の下嘴は赤橙色だが多い少ないがある。幼鳥は全体に光沢はなく胸部は黒っぽい。』と書いてあることから♀と同定した。湖面一面にコハクチョウの群れがコウコウと騒がしく鳴いていた。まばらではあるが、かなり数で数えきれないほどであった。西の方へ移動する途中で、次々と飛び去って行った。
2023	11	16	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は12～17℃、南南東の風3m/s、陽射しは暖かく、湿度は63%、ジャンパーは帰路で脱ぐ、往路復路で陽傘をさす。鳥屋野潟、ニホンミツバチの自然巣ハニカム構造、ホシハジロ♂とマガモ♂とヒドリガモ♂とオナガガモ♂、3羽のコハクチョウ、トモエガモ♂とオナガガモ♂とコハクチョウ、鳥屋野潟の湖面に数えきれないほどのコハクチョウ、不明の蛾、を撮影した。湖面一面にコハクチョウの群れがコウコウと騒がしく鳴いていた。まばらではあるが、かなりの数で数えきれないほどであった。西の方へ移動する途中で、次々と飛び去って行った。北海道や東北北部で田んぼなどの餌場が冠雪し、南下してきたのかも知れない。鳥屋野潟が冠雪する頃になるとオオハクチョウが渡来してくる。オオハクチョウはコハクチョウよりひと回り大きく、首も長い。首を湖底に突っ込んで、ヨシなど抽水植物の根茎を食べるので、首が赤黒く染まることから、首の白いコハクチョウと判別しやすい。
2023	11	19	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は14～15℃、西北西の風7m/s、陽射しは弱く、湿度は62%、ジャンパーは帰路で脱ぐ、復路で陽傘をさす。鳥屋野潟、マガモ♀と♂、オナガガモ♂、鳥屋野潟、ダイサギが欄干に立つ、を撮影した。湖面は波が高く、沖合には渡り鳥がいなかった。閑散とした自然生態園のため池木橋の欄干の上で、ダイサギが悠々と羽繕いをしていた。

西暦	月	日	日誌
2023	11	21	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天から晴天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は10～14℃、南の風2m/s、陽射しは暖かく、湿度は71%、ジャンパーは帰路で脱ぐ、往路復路で陽傘をさす。カンムリカイツブリ冬羽に換羽中横姿、鳥屋野潟、コハクチョウ幼鳥と成鳥ダイサギが首を伸ばして水の中を歩く横姿、深水に佇むアオサギ横姿、チュウサギが木にとまる横姿、同じく木にとまって日光浴をして全身の羽毛を逆立てる横姿、を撮影した。チュウサギは、『フィールド図鑑日本の野鳥』によると、『夏鳥として、九州以北、本州中部地方以南に渡来し、南西諸島では冬鳥。雌雄同色。嘴は夏羽では黒く、冬羽や若鳥は黄色。幼鳥には飾り羽がない。10月頃から東南アジア方面へ南帰行する。』と書いてある。成鳥の冬羽か幼鳥なのかは、両者が飾り羽が無いことから、区別がつかない。過去に中央区で2018年以降11月に撮影したチュウサギは54画像あるが11月25日が最も遅い。
2023	11	22	長潟と下早通の田んぼで動植物との一期一会を楽しむ。雲ひとつない晴天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は10～17℃、南の風4m/s、陽射しは暖かく、湿度は77%、ジャンパーは往路で脱ぐ、往路復路で陽傘をさす。ヒツジ田(2番穂)、柿木と景観、小松堀排水路、オギの穂、ヒツジ田(2番穂)、コハクチョウの群れ60羽、ハクセキレイ♂冬羽に移行中、小松堀排水路、ヒツジ田(2番穂)、2羽のスズメ、鳥屋野潟、を撮影した。ハクセキレイは、『フィールド図鑑日本の野鳥』によると、『漂鳥、または留鳥。九州以北。繁殖期以外は1羽、または小群で行動する。雌雄ほぼ同色。雄夏羽の頭頂からの上面は黒い。雌の上面は灰色。雄冬羽の上面は灰色っぽい、黒みがある。』と書いてあることから、♂の冬羽に移行中と同定した。コハクチョウは、田んぼで落ち穂や2番穂を腹いっぱい食べ、日向ぼっこして、昼寝をしていた。
2023	11	26	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は7～11℃、東南東の風2m/s、陽射しは暖かく、湿度は68%、復路で陽傘をさす。鳥屋野潟、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中横姿、3羽のコハクチョウ、コハクチョウの群れ60羽、鳥屋野潟、オナガガモ♂エクリプスと♀と♀、ニホンミツバチの自然巣ハニカム構造、コウホネ群生地に佇むアオサギ横姿、を撮影した。コハクチョウ60羽の群れは、次々と飛び立っていった。しかし、3羽だけ、置いてけぼりを食ったのか？コウコウと不安そうに鳴いて湖面を行ったり来たりしていた。人間社会だけでなく、野生動物の世界でも「置き去りにされるものがいるのか？幸運に恵まれ命を授かったものは辛くても生きねばならない。」「生まれてきたものは、死ぬまで生きねばならぬ」のは、この世の理(ことわり)なのである。
2023	12	4	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ダウン、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は7～9℃、南の風4m/s、陽射しは暖かく、湿度は84%、往路復路で陽傘をさす。鳥屋野潟、群れから逸れたコハクチョウ、オナガガモ♂嘴を羽に隠して休む、4羽のトモエガモ♂、カンムリカイツブリ冬羽横姿とマガモ♂、ミコアイサ4羽、カワアイサ雄4羽がくちばしを羽に隠して休む、を撮影した。ミコアイサとカワアイサは不鮮明な画像であるが、体色と頭部の色から判断した。どちらも白い羽毛であるが、頭部が黒い方がカワアイサ♂、白い方がミコアイサ♂、♀はどちらも茶色である。沖合で休んでいた。しばらく休んで、さらに南下するのか？白っぽい羽毛は湖面によく映える。特にカワアイサ♂は頭部がダークグリーンなのでとても目立つ水鳥である。

西暦	月	日	日誌
2023	12	5	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は6～10℃、南の風4m/s、陽射しは暖かく、湿度は68%、往路復路で陽傘をさす。鳥屋野潟、トモエガモ♀と♂、コハクチョウ群れ(12羽)、鳥屋野潟、ハジロカイツブリ冬羽がスジエビを頬張る、ミコアイサ♀エクリプス横姿、カンムリカイツブリ冬羽横姿、を撮影した。岸辺近くで約10羽のミコアイサを確認した、頭部羽毛が茶色であったが、♂エクリプスは白い羽毛が生え始めていた。警戒心が強く、岸辺に少しでも近づくとう一斉に飛び去ってしまう。ハジロカイツブリが大きなスジエビを飲み込もうとして、頬張っていたが、結局飲み込めずに口から吐き出してしまった。スジエビは、「日本産淡水性・汽水性 エビ・カニ図鑑」に、『体長約63 mmに達する。河川の下流から上流、湖沼など幅広く生息する。抱卵期は3～10月、長径11～18 mmの卵を、100～800個産む。』と書いてある。撮影したハジロカイツブリは上嘴上面だけが黒いので第1回冬羽である。幼いのか、腹が減ってたのか、飲み込めない大きさの餌を頬張ったようだ。
2023	12	6	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は8～14℃、南の風2m/s、陽射しは暖かく、湿度は74%、帰路はジャンパーを脱ぐ。往路復路で陽傘をさす。鳥屋野潟、ミコアイサ♀横姿、鳥屋野潟、オナガガモ♀エクリプス、コハクチョウ群れ(34羽)、鳥屋野潟、岸辺に佇むダイサギ横姿、ダイサギが水の中を歩いて獲物を探す、アカゲラ♀後姿、を撮影した。ミコアイサ♀は「フィールド図鑑日本の野鳥」の姿図に似ていることから決めた。オナガガモ♀エクリプスも同様である。ダイサギが湿地で足をツイストしながら水の中を歩いていた。泥に隠れている小魚やエビ、水生昆虫を驚かせて、飛び出してきたところを捕獲する採餌行動である。雪が降り積もる前に、腹いっぱい食べておかないと、後でひどい思いをすることになる。
2023	12	8	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天→雨天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は9～10℃、南の風3m/s、陽射しは弱く、湿度は83%。鳥屋野潟、カンムリカイツブリ冬羽見返り、鳥屋野潟、尻まで水につかるアオサギ見返り、片足で休むチュウダイサギ横姿、ミコアイサ♀後姿、ミコアイサ♀エクリプス横姿、を撮影した。アオサギが尻まで水につかっている姿を見るのは初めてである。いったい、何をしているのだろうか？脚のふしよく黒っぽいチュウダイサギ、ダイサギよりは小柄に見える。餌を腹いっぱい食べ、羽繕いをして満足そうな表情？であった。遊歩道から10m位の灌木の上に止まっていた。人間慣れしているのか？こちらを見返してくる。
2023	12	9	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は8～16℃、南の風4m/s、陽射しは弱く、湿度は68%。往路帰路で日傘をさす。帰路でジャンパーを脱ぐ。鳥屋野潟、カワセミ♀横姿、鳥屋野潟、3羽のオオハクチョウ、ダイサギ横姿、コハクチョウ群れ(8羽)、鳥屋野潟、カンムリカイツブリ浮上横姿(冬羽)、を撮影した。カワセミ♀は私の前に突然現れた。素早くフォーカスしてシャッターを切ったが、2回目には姿が消えていた。まるで、忍者の様に姿をくらました。連写に設定しなかったことを悔やむ。オオハクチョウがやって来た。クチバシの先端の黒い模様がコハクチョウと違うことから見分けることができる。北海道や東北地方の湿地や田んぼが積雪で氷結して、抽水植物の地下茎を採餌できなくなったのか？オオハクチョウの渡来は、冬将軍がやって来る前触れであることが多い。

西暦	月	日	日誌
2023	12	14	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は6～10℃、南の風2m/s、陽射しは弱く、湿度は76%。帰路で日傘をさす。オオハクチョウ成鳥と2羽の幼鳥、鳥屋野潟、ミコアイサ♀横姿、鳥屋野潟、カワセミ♀横姿、コハクチョウ群れ(約100羽)、鳥屋野潟、岸辺で餌を探すアオサギ横姿、アオサギ横顔、トモエガモ♀2羽、♂2羽、を撮影した。ミコアイサは「フィールド図鑑日本の野鳥」に『冬鳥。全国に渡来する。北海道北部では数つがい繁殖する。多くは群れで行動し、活発に動きまわって、替水しては魚類、甲殻類、水生昆虫などを食べる。』と書いてある。しかし、鳥屋野潟では単独行動をしている様に見える。♂と♀が一緒に行動する姿はめったに見ない。繁殖行動をしないからか？確かに、幼鳥を見たことが無い。コハクチョウとオオハクチョウの見分け方は、頸が長く、嘴の黄色い部分が黒い部分にとがって入るのがオオハクチョウである。また、幼鳥のクチバシは白いのがオオハクチョウ。コハクチョウの幼鳥はクチバシがピンク色をしている。頭部と頸の長さの比率は、オオハクチョウは八頭身(頸?)で大柄な体格、コハクチョウは頸が短く小柄である。
2023	12	16	信濃川左岸やすらぎ提ウオーキングで水鳥と遭遇。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は16～16℃、西南西の風6m/s、陽射しは弱く、湿度は79%。生暖かい風。カンムリカイツブリ冬羽横姿、カワウ幼鳥横姿、カルガモ横姿、ヒドリガモ♂見返り、2羽のヒドリガモ♂エクリプス、信濃川左岸やすらぎ提、を撮影した。最近、鳥屋野潟沿岸でヒドリガモを観察できなかった。まさか、信濃川のやすらぎ提で休憩しているとは、まさに一期一会である。5羽いたのでファミリーかもしれない。「フィールド図鑑日本の野鳥」によると、『冬鳥で、越冬期は群れで生活し、他の淡水ガモ類よりよく陸に上がり、青草の葉や芽を食べる。』と書いてある。やすらぎ提の青草等を採餌していたのである。一方、カワウとカンムリカイツブリがいたのは、小魚が捕食できるからである。
2023	12	19	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ダウンジャケット、マフラー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は2～4℃、南南東の風2m/s、陽射しは弱く、湿度は98%。鳥屋野潟、排水樋門吐口、モズ♂横姿、ミコアイサ♀横姿、2羽のヨシガモ♀、カンムリカイツブリ冬羽横姿、カワセミ♂後姿、を撮影した。ヨシガモは「フィールド図鑑日本の野鳥」に『冬鳥。全国的に生息するが、北海道では少数が繁殖する。』と書いてある。そして、♀と♂エクリプスの姿図が載っているが、撮影画像が不鮮明なため、両者を判別できないので、両方を♀とした。エクリプスでない♂は、どこにいるのか？モズとカワセミは、筆者を待っていたかのように突然現れた！どちらも鮮やかな色彩で、思わずシャッターをきった。
2023	12	28	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、ジャンパー、マフラー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は2～7℃、南の風3m/s、陽射しは暖かく、湿度は79%。コガモ♂横姿、鳥屋野潟、アカゲラ♀採餌、鳥屋野潟、カワウ♂繁殖羽が遊泳、アカゲラ♀横姿、同じく後姿、ミコアイサ♀横姿、コハクチョウ群れ約100羽、鳥屋野潟、岸辺に佇むアオサギ横姿、シメ♀横姿、岸辺に佇み嘴を開いて鳴くダイサギ前姿、を撮影した。シメは「フィールド図鑑日本の野鳥」に『雄の次列風切外弁の羽先は黒っぽく雌では灰色。繁殖期は雌雄とも嘴は鉛色で、冬は肉色。雄の眼先は黒く、雌は淡色。』と書いてあることから、♀と同定した。アカゲラは後頭部が赤いのが♂、黒いのが♀である。アカゲラの♀が、湖畔林沿いの遊歩道で、筆者を追いかけるとやってきてポーズをとってくれた。いつ見ても急がしそうである。佇んでいる姿は見たことが無い。

西暦	月	日	日誌
2024	1	2	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ジャンパー、マフラー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は2～7℃、南の風3m/s、陽射しは暖かく、湿度は74%。鳥屋野潟、オオハクチョウとコハクチョウ、オオハクチョウ成鳥と幼鳥、2羽のコハクチョウ離水、鳥屋野潟、岸辺に佇むアオサギ横姿、アカゲラ♂後姿、ミコアイサ♀後姿横顔、鳥屋野潟、コハクチョウ群れ約200羽、を撮影した。コハクチョウの大群の中に、オオハクチョウのファミリーが混じっていた。クチバシの黒斑模様と首の長さ、幼鳥の白いクチバシを見ると、コハクチョウとの違いが分かる。オオハクチョウは、コハクチョウより大きな体格をして、スタイルもサラブレッドとポニーぐらいの違いがある(すこし大袈裟かもしれない)。「フィールド図鑑日本の野鳥」に鳴き声について『コハクチョウは飛びながらながら「クー」和鳴く』、『オオハクチョウは飛びながら甲高い声で「クー」などと鳴く』と書いてある。両種とも「クー」なので区別がつかない。水面にいる時も、挨拶(羽ばたいて鳴く)する時や、家族を探している時に「クー」と鳴いている。それぞれの場面で「クー」の鳴き声が微妙に違うのかもしれない。
2024	1	5	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、ジャンパー、マフラー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は4～11℃、南の風4m/s、陽射しは暖かく、湿度は76%。鳥屋野潟、片足で佇むダイサギ(横姿)、ダイサギ横顔、ミコアイサ♂嘴を羽に隠して休む横姿、コハクチョウ幼鳥2羽と成鳥、コハクチョウ幼鳥と成鳥が離水、鳥屋野潟、カンツバキの赤い花、アオサギが羽に顔を埋めて眠る(前姿)、ニホンミツバチの自然巣ハニカム構造、を撮影した。オオハクチョウを探したが見つからなかった。コハクチョウの幼鳥はクチバシがピンク色で、それが徐々に黄色になっていく。300～400羽ぐらい見かけた。5～10羽のファミリー単位で次々と西の空へ飛び立っていった。水面にいる時の鳴き声「クー」は低い声であるが、離水する時の「クー」は甲高い声で「よし行くぞ！」と皆で掛け声をかけている。そして、編隊を組んで飛翔し始めると、また低い声の「クー」に変わる。鳴き声を録音して、比較すると違いがはっきり分かるだろう。
2024	1	9	信濃川左岸やすらぎ提ウオーキングで水鳥と遭遇。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は0～3℃、南の風5m/s、陽射しは弱く、湿度は84%。凍えるような風、ダウンを着てくれば良かった。セグロカモメ横姿、オオセグロカモメが嘴を羽に隠して休む、オオバンが歩く(見返り)、信濃川左岸下流景観、雪だるまを撮影した。セグロカモメ2羽とオオセグロカモメ3羽が同じ場所で休んでいた。羽の色がセグロカモメは灰色、オオセグロカモメは黒っぽいことから、判別が容易である。鳥屋野潟にやって来るのはセグロカモメで、オオセグロカモメを近くで見たのは初めてである。
2024	1	11	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ダウン、マフラー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は-1～4℃、南東の風2m/s、陽射しは始め弱くその後暖かくなる。湿度は80%。鳥屋野潟が凧で鏡の様な水面に巻層雲(うす雲)が映る、凧で静かな鳥屋野潟、2羽のオオハクチョウ、3羽のコハクチョウ、ミコアイサ♂エク립ス横姿、岸辺に佇むアオサギ横姿、コハクチョウのファミリーが離水直前に鳴く、凧で静かな鳥屋野潟、ツグミ♂前姿、を撮影した。弁天橋の通りから150m位の距離のところにあるオニグルミの樹上にオオタカの幼鳥が後ろ向きに留まっていた。横姿を撮影しようと近づいてフォーカスしたところ、シャッターを押す直前に、ふわっと飛び立って、西の方へゆっくりと羽ばたいて行ってしまった。残念無念！、猛禽類は首が180度まわり、視力が人間の8倍以上良いことから、筆者が近づく(50m位の距離)のが分かったのかも知れない。

西暦	月	日	日誌
2024	1	14	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ダウン、マフラー、長袖ワイシャツ、スパイク付長靴で出かける。気温は1～4℃、南南西の風4m/s、陽射しは弱くその後暖くなる。湿度は83%。鳥屋野潟、コガモ♀と♂、灰褐色の羽色が残るコハクチョウ幼鳥横姿、鳥屋野潟、オナガガモ♂マガモ♂、鳥屋野潟、カイツブリとマガモ♀、を撮影した。カンムリカイツブリを見かけなくなった。小魚やスジエビ等の餌が捕れなくて、どこかへ移動したのか？。地上で青草の葉や芽を食べるヒドリガモ、水中でドングリ、地上でイネ科植物の種を食べるトモエガモも見かけなくなった。しかし、マガモの大群の中にオナガガモ♂2羽を見かけた。たぶん他の水鳥も、近隣の河川や排水路、ため池等に生息するマガモやコガモの群れの中にいるのかも知れない。
2024	1	17	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ダウン、マフラー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は4～7℃、南の風4m/s、陽射しは弱くその後暖かく、帰りは日傘をさす。湿度は80%。わた雲(高度—2000メートル)、セグロカモメが水面で羽ばたく(前姿)、ミコアイサ♂横姿、わた雲、カワウ♀繁殖羽横姿、ダイサギ横姿、ミコアイサ♂見返り、ヒドリガモ♀エクリプス見返り、わた雲、ニホンミツバチの自然巣ハニカム構造、を撮影した。ニホンミツバチは、「ワイルドライフ 日本の里山 ニホンミツバチ」によると、『美しい花々が咲き誇る里山の自然に欠かせないのが花の蜜を集めるニホンミツバチである。冬は、巣の奥で、蓄えたハチミツを栄養源として皆で集まって温め合い春を待つ。一万匹の群れを支えるのは女王ではなく働きバチで、仲間で団結して群れを運営したり、天敵を撃退したり、強い絆で群れを守る鉄壁の集団である。』と番組紹介されている。「強い絆」は、平和で豊かな日本の社会で(私の日常生活で)失われつつあり、この放送を観る度に複雑な思いが頭をよぎる。
2024	1	20	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天→晴天、ジャンパー、マフラー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は4～7℃、東南東の風2m/s、陽射しは弱くその後暖かく、帰りは日傘をさす。湿度は64%。鳥屋野潟の湖面にオオハクチョウ18羽の群れ、鳥屋野潟が凧で鏡の様な水面、鳥屋野潟、コハクチョウ群れ(約2000羽)、ミコアイサ♂横姿、鳥屋野潟、コハクチョウ2羽飛翔、ダイサギが岸辺を歩く、岸辺に佇むアオサギ横姿、ハシビロガモ♀エクリプス、18羽のオオハクチョウ、を撮影した。コハクチョウの大群に混じってオオハクチョウが移動していると思っていたが、コハクチョウは西側を目指し、オオハクチョウは東側を目指して遊泳しており、湖面ではコハクチョウとオオハクチョウの集団は別々に行動するようだ。「フィールド図鑑日本の野鳥」に、両種ともに『水田などで落ち穂や青草の葉、根、種子などを食べる』と書いてあるが、顔を泥だらけにして岸辺のヨシの地下茎を食べているオオハクチョウを観たことがある。コハクチョウは観たことが無い。さらに、オオハクチョウは岸辺で休んでいる事が多いことから、コハクチョウと餌の好みが違うように思う。ハシビロガモと久しぶりに遭遇した。「フィールド図鑑日本の野鳥」に♀エクリプスの姿絵があり、『虹彩は黄色く眼の周囲は黒色』と書いてある。羽毛も換羽中に観られる不自然な模様の箇所があることからエクリプスと同定した。
2024	1	22	信濃川左岸やすらぎ提ウオーキングで水鳥と遭遇。曇天で時雨、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は8～10℃、南の風4m/s、陽射しは弱く、湿度は80%。時々雨傘をさす。カワウ♀後姿横顔、カワウ♂繁殖羽後姿横顔、ホシハジロ♂とカルガモ、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中横姿、を撮影した。カンムリカイツブリとの遭遇は久しぶりである。「フィールド図鑑日本の野鳥」に『季節・分布:漂鳥、または冬鳥。本州以南に生息。環境:青森県と滋賀県や新潟県などの本州の湖沼などで繁殖し、本州以南の主に沿岸、内湾、湖沼、池、河川などで越冬する。』と書いてある。「にいがた野鳥日誌」によると、『全国的に数少ない冬鳥1985年1月に新潟東港に百羽余の群れが来て越冬、2005年には鳥屋野潟、2006年に福島潟で繁殖した。』と書いてある。筆者は、鳥屋野潟上流の小松堀排水路で2012年8月17日に幼鳥を撮影、鳥屋野潟では2018年以降毎年撮影している。

西暦	月	日	日誌
2024	1	27	信濃川右岸の朱鷺メッセから左岸の新潟市音楽文化会館経由のウォーキングで水鳥と遭遇。曇天で時雨、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は5～5℃、西の風6m/s、陽射しは弱く、湿度は62%。時々雨傘をさす。オオセグロカモメ横姿、信濃川右岸下流景観、カワウの繁殖羽が遊泳横姿、カンムリカイツブリ冬羽が魚を銜える(横姿)、を撮影した。オオセグロカモメは停泊中の漁船のアンテナの上に留まっていた。人が10m位離れたところを歩いても、まったく逃げる気配がない。堂々としたものだ。2羽のカンムリカイツブリ冬羽が(たぶんカップルか?)潜水を繰り返して魚を追いかけていた。ちょっと離れた水面に浮上したばかりのカワウの繁殖羽も競争するように魚を追いかけて潜水を繰り返していた。運よく、カンムリカイツブリが魚を銜えた瞬間を撮影することができた。
2024	1	29	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ジャンパー、マフラー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は4～6℃、南西の風4m/s、陽射しは弱い。湿度は70%。チュウダイサギ歩く(横姿)、鳥屋野潟、ミコアイサ♀と♂、鳥屋野潟、マガモ♀3羽と♂3羽、ダイサギが深水に佇む、岸辺に佇むアオサギ横姿、を撮影した。鳥屋野潟から、魚食性のカモ類がいなくなった。カワウだけが数羽、潜水を繰り返して魚を追いかけていた。コハクチョウの群れが、次々と、「コウ、コウ」と騒々しく飛び立っていった。あとに残ったのは優占種のマガモと、時々見かけるカイツブリである。水鳥の数が少ないのか?オオタカの止まり木姿も、こしばらく観ていない。
2024	1	30	鳥屋野潟の弁天橋周辺と鍔～笹口の遊歩道で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、ジャンパー、マフラー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は4～9℃、南の風3m/s、陽射しは弱い。湿度は72%。鳥屋野潟、鳥屋野潟湖面に数えきれないほどのコハクチョウ、鍔～笹口の遊歩道、モミの木の葉、カンツバキの赤い花、ウグイス眼差し(前姿)、を撮影した。ウグイスは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『留鳥、または漂鳥。ほぼ全国に分布。平地から山地の林、ササ類や灌本の多い高原、市街地の藪や植栽の多い公園、庭などを好んで生活する。繁殖期以外は1羽で生活する。春秋には小群で移動する。藪などを渡り歩いて昆虫類やクモ類などを食べる。』と書いてある。実はメジロを見かけたが、フォーカスしても素早く移動するので撮影できなかった。メジロは、昆虫類やクモ類の他に木の実などを食べる。遊歩道の垣根は常緑樹が多く使われている。非繁殖期なので営巣しないで、葉っぱの多いカンツバキの枝をねぐらにしているのだろう。
2024	1	31	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ジャンパー、マフラー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は4～11℃、南の風4m/s、陽射しは弱いが温い。湿度は69%。鳥屋野潟、トビ飛翔、鳥屋野潟、コハクチョウ群れ(約300羽)、コゲラ横姿、マガモとオナガガモの群れ、アカゲラ♂後姿、鳥屋野潟、モズ♀横姿、岸辺に佇むダイサギ横姿、岸辺に佇むアオサギ横姿、ミサゴ♂飛翔、を撮影した。冬日和、天気予報では3月下旬から4月上旬の暖からしい。シジュウカラの群れに混じってコゲラが元気よく枝を突き、モズも日当たりの枝にとまって餌を探していた。どちらも動物質を食べる。白梅の蕾が膨らみ始めた。ミサゴの♂(胸の帯が目立たない)が旋回しながら、魚を探していた。日が射し明るい日中の方が捕獲できる確立が高いのだろうか?釣りの場合は曇りの日が良く釣れると聞いたことがあるが??

西暦	月	日	日誌
2024	2	2	信濃川右岸の朱鷺メッセから水鳥等を撮影。曇天で時々ぼた雪、ダウン、長袖ワイシャツ、マフラー、シューズで出かける。気温は0～3℃、西南西の風1m/s、陽射しは弱く、湿度は70%。時々雨傘をさす。ツグミ♀横姿、ホシハジロ♀横姿、新日本海フェリーあざれあ、カンムリカイツブリ冬羽横姿、カワウ♂繁殖羽が遊泳横姿、を撮影した。ツグミは「フィールド図鑑日本の野鳥」によると『冬鳥。全国に記録される。平地から山地の林、農耕地、芝地、樹木の多い公園などに生息。ミズ類などを捕る。雄成鳥は全体に羽衣が濃く、雌や若鳥は淡色なことが多い。』、♂は黒っぽいことから♀と同定した。ミズが居そうな場所なら、どこでも出合う鳥である。ホシハジロの♀と♂の2羽が潜水して餌を探していた。水生植物の茎や根、種子などの他、潜水して甲殻類などの動物質も食べる。他にカンムリカイツブリ、カワウも潜水して餌を探していた。淡水と海水が合流する河口付近は汽水域なので、テナガエビやアユ、サケ、ハゼなど魚が豊富である。まさに、動物質を好む水鳥の餌場として最適な場所なのであろう。腹いっぱいになったのか？カンムリカイツブリが満足したような表情で羽繕いをしていた。
2024	2	3	鳥屋野潟の弁天橋周辺と鍔～笹口の遊歩道で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ジャンパー、マフラー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は5～6℃、西北西の風5m/s、陽射しは弱い。湿度は58%。鳥屋野潟、ミコアイサ♀横姿、ツグミ♀横姿、鳥屋野潟、(鍔～笹口の遊歩道で)メジロ横姿、を撮影した。メジロは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『留鳥、または漂鳥。ほぼ全国に分布。平地の庭から山地の林まで広く生息する。昆虫類やクモ類、木の実などを食べる。雌雄ほぼ同色。上面は黄緑色。喉は黄色くて腹部中央まで細く伸び、それがはっきりしているのが雄。』と書いてある。雌雄の同定は困難である。動きが素早いので根気強くフォーカスを続け、ようやく羽毛の1本1本が分かる明瞭な画像を撮影することができた。
2024	2	5	笹口の遊歩道と信濃川右岸の朱鷺メッセで動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ジャンパー、マフラー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は3～4℃、静穏0m/s、陽射しは弱い。湿度は64%。(鍔～笹口の遊歩道で)メジロ前姿、ヒヨドリ横姿、スズメ横姿、(朱鷺メッセのベランダから)フジドリームエアラインズJA06FJ、カンムリカイツブリ冬羽横姿、を撮影した。朱鷺メッセのベランダから、カワウ♂繁殖羽が潜水を繰り返して魚を追いかけている姿を撮影したが、ピンボケ画像であった。下流に佐渡汽船や新日本海フェリーが停泊していなかったことから、オオセグロカモメなどの海鳥を見かけなかった。今頃、沖合で客船を追いかけて餌を強請っているのかも知れない。朱鷺メッセのベランダは、幅が2.5m長さが390mもあるが、人っ子一人居なかった。岸壁の遊歩道に、数人が歩いているだけであった。
2024	2	7	信濃川右岸の朱鷺メッセで動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ジャンパー、マフラー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は2～4℃、南の風3m/s、陽射しは弱く、帰り道は時雨。湿度は74%。オオセグロカモメ横姿、同じく横顔、信濃川右岸下流景観、朱鷺メッセのバルコニー、2羽のカルガモ、カンムリカイツブリ冬羽が小魚を飲み込む瞬間(横姿)、柳都大橋上流景観、キンクロハジロ♂が嘴を羽に隠して休む、ホシハジロ♂が嘴を羽に隠して休む、を撮影した。オオセグロカモメは、1時間弱の間、同じ漁船のアンテナに留まっていた、よほど、お気に入りの休憩場所なのだろう。キンクロハジロ♂とホシハジロ♂が寄り添うように、停泊中の漁船の陰に隠れて休憩していた。♂同志のカップルか？とても親しい仲間のものであった。両種は、冬鳥で、ほぼ同じ故郷、ユーラシア大陸のタイガやツンドラ地帯のあたりである。鳥屋野潟でも、同じ群れの中で両種が混在していることが多い。

西暦	月	日	日誌
2024	2	8	信濃川右岸の朱鷺メッセで動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ジャンパー、マフラー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は4～4℃、南西の風3m/s、陽射しは弱く、出がけは時雨。湿度は80%。オオセグロカモメ羽繕い横姿、同じく後姿、セグロカモメ横姿、同じく幼鳥横姿、を撮影した。オオセグロカモメとセグロカモメは、『フィールド図鑑日本の野鳥』に『翼開長はオオセグロカモメ132～148cm、セグロカモメは135～150cm』と書いてあり、セグロカモメの方が若干大きい。見分け方は『セグロカモメは、背の色はオオセグロカモメより淡く、初列風切は黒いので色の差が顕著』、『成鳥冬羽の初列風切羽の比較の姿図が載っており、大雨覆羽がオオセグロカモメの方が黒っぽく、セグロカモメは灰色っぽく描かれている』。実際に撮影した画像を拡大してみると、確かに、オオセグロカモメの小雨覆羽は灰色っぽいが大雨覆羽は黒っぽくなっている。「にいがた野鳥日誌」では『オオセグロカモメは佐渡ヶ島と粟島に冬鳥として渡来し海上に生息している。本土側は少ない。』と書いてあるが、新潟港に、つがいで生息しているようだ。
2024	2	9	鳥屋野潟と弁天橋周辺と鍔～笹口の遊歩道で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ジャンパー、マフラー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は4～5℃、西南西の風2m/s、陽射しは弱い。湿度は70%。ミコアイサ♂背伸び、鳥屋野潟、マガモの♀と♂、(鍔～笹口の遊歩道で)、メジロ後姿、メジロとスズメ、を撮影した。鳥屋野潟遊歩道から観られるのは、カルガモ、カワウ、マガモ、沖にオナガガモで、ハクチョウは姿を消したようだ。暖冬で、冠雪しない田んぼが多いことから、そろそろ、北帰行を始めたのかも知れない。弁天橋付近に魚食性のミコアイサ♀と♂が2羽ずつ遊泳していた。♂と♀が背伸びして羽ばたいていたようだ。カルガモやマガモは交尾の後に、この動作をする。「フィールド図鑑日本の野鳥」では、ミコアイサは北海道北部で数つがい繁殖するらしい、つまり、それ以外の場所で繁殖行動は確認されていないようである。しかし、近年の気候変動が、生態系の緩衝力を超えたインパクトになり、野生動物の行動に異変を生じさせているのかもしれない。
2024	2	10	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、ジャンパー、マフラー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は3～7℃、南の風4m/s、陽射しは弱い。湿度は68%。鳥屋野潟、コガモ群れの合同コンパ、鳥屋野潟、ミコアイサ♂後姿、アオサギ飛翔後姿、赤い実をついばむヒヨドリ、倒木の上で片足で佇むダイサギ前姿、3羽のトモエガモ♂エクリプス、オナガガモ♀2羽と♂6羽、鳥屋野潟、を撮影した。トモエガモ♂は、『フィールド図鑑日本の野鳥』の姿図を見ると、成鳥♂には眼から涙が流れる様な黒斑があるが、撮影した3羽には無いことからエクリプスと同定した。トモエガモとオナガガモとの交雑種の姿図も載っていた。トモエガモは、オナガガモとマガモの群れの中で遊泳している姿を見かけることが多いので、交雑種の疑いがあるが、姿図には腹部と尾部に白斑模様が無いことから交雑種とは異なると判断した。
2024	2	11	信濃川河口付近の右岸と左岸から水鳥等を撮影。曇天、ジャンパー、マフラー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温6～6℃、北西の風6m/s、陽射しは弱い。湿度は54%。ana(全日空)、カンムリカイツブリ冬羽横姿、ハクセキレイ♂冬羽横姿、オオセグロカモメとセグロカモメの無数の群れ、ウミネコ冬羽横姿、セグロカモメが羽ばたく(後姿)、オオセグロカモメ第1回冬羽5羽、信濃川下流景観、同じく上流景観、を撮影した。オオセグロカモメ第1回冬羽は『フィールド図鑑日本の野鳥』の姿図で嘴は灰色っぽく先端に向かって徐々に黒くなる、セグロカモメ第1回冬羽は嘴がピンク色で先端が黒いことから判断した。ウミネコ冬羽は、体格がひと回り小さく、脚が黄色で、嘴は黄色で先端が赤と黒であることから、判断した。セグロカモメ成鳥が多く、オオセグロカモメ成鳥の姿は目立たなかった。

西暦	月	日	日誌
2024	2	12	信濃川河口付近の左岸から水鳥等を撮影。曇天から晴天、ジャンパー、マフラー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温3～7℃、南の風2m/s、陽射しは弱いが温い。湿度は70%。ウミネコとセグロカモメとカワウの群れ、スズガモ♂第1回冬羽と♀、ホシハジロ♂が嘴を羽に隠して休む(4羽)、キンクロハジロ♂が嘴を羽に隠して休む、ホシハジロ♂が2羽、コガモ♂とヒドリガモ♂横姿、船着き場、ヒドリガモ♀が水を飲む、信濃川左岸下流景観、同じく上流景観、みなとぴあ看板、新潟市歴史博物館、を撮影した。スズカモメ♂第1回冬羽は「フィールド図鑑日本の野鳥」の姿図で胸部と尾部の羽が茶色っぽくなっていることから判断した。落ち穂や青草、植物の種子などを食べるコガモや水草や昆虫類の幼虫などを食べるオオバン、陸に上がり青草の葉や芽を食べるヒドリガモが信濃川河口の汽水域の船着き場にいるのは不思議である。ひょっとすると上流から来て、岸壁の低いこの船着き場から上陸するつもりなのか？周辺には新潟市歴史博物館や芝生の遊歩道があるが、そこには1羽もいなかった。ヒドリガモが水を飲んでいたので、岸壁に生えている海藻でも食べていたのかな？
2024	2	13	信濃川河口付近の左岸から水鳥等を撮影。曇天から晴天、ジャンパー、マフラー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温4～12℃、南の風4m/s、陽射しは弱いが温い。湿度は71%。新日本海フェリーあざれあ、柳都大橋下流景観、カルガモトリオ採餌、巡視船ひだ、オオセグロカモメとセグロカモメの群れ、オオバン見返り、キンクロハジロ♂が嘴を羽に隠して休む、キンクロハジロ♂横姿、ホシハジロ♂水浴び、佐渡汽船ジェットフォイルつばさ低速航行、同じく高速航行、船着き場、キンクロハジロ♂が何かを嘴で銜える、フジドリームエアラインズ、を撮影した。スズガモが見当たらなかった。キンクロハジロとホシハジロは兄弟の様に仲が良さそうである。セグロカモメの群れが増えているようだ。北帰行の時節に近いのか？天気予報では、明日は4月上旬の陽気になるらしい。
2024	2	15	信濃川河口付近左岸から水鳥等を撮影。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温10～14℃、南南西の風4m/s、陽射しは弱いが温い。湿度は60%。ホシハジロ♂、佐渡汽船おけさ丸、水産庁の東光丸(漁業取締船)、海洋研究開発機構の白鳳丸(学術研究船)、カンムリカイツブリ夏羽に換羽中横姿、ホシハジロ♂、船着き場、ホシハジロ♀冬羽が嘴を羽に隠して休む、ウミネコとセグロカモメの群れ、を撮影した。カンムリカイツブリが夏羽に換羽し始めたのか？杭橋はピンク色のままであるが、襟状の飾り羽、耳のあたりが茶褐色の羽毛が生え始め、喉元のあたりから黒い羽毛が生え始めてきている。新潟の気候変化に敏感なのかもしれない。留鳥か？漂鳥か？は不明であるが、田植えが始まる頃から降雪を向かえる12月頃までは鳥屋野潟に生息し、1月～2月頃は、海洋生物の豊富な信濃川等の汽水域で生活していると思われる。
2024	2	16	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天から晴天、ジャンパー、マフラー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は4～5℃、北西の風8m/s、陽射しは弱い。湿度は54%。鳥屋野潟、鳥屋野潟の湖面が波立つ、白梅の花、ミコアイサ♀と♂、シジュウカラ♂採餌(前姿)、ヒガラ前姿、岸辺に佇むダイサギ、を撮影した。ヒガラは始めて撮影した。「フィールド図鑑日本の野鳥」によると『季節鶴分布:留鳥、または漂鳥。屋久島以北。環境:平地から山地の針葉樹林を好み、越冬期には広葉樹林にも入る 行動:繁殖期以外は小群で、他の鳥の群中に入って生活するものが多い。樹木の枝先での行動が多く、昆虫類、クモ類、針葉樹の種子などを食べる。形態:雌雄同色。』、なお、「にいがた野鳥日誌」には掲載されていない。

西暦	月	日	日誌
2024	2	17	信濃川河口付近左岸から水鳥等を撮影。晴天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、マフラー、シューズで出かける。気温3～7℃、東の風2m/s、陽射しは弱いが温い。湿度は60%。ヒドリガモ♀見返り、ホシハジロ♂、オオバン横姿、カンムリカイツブリ夏羽に換羽中横姿、ヒドリガモ♂横姿、柳都大橋上流景観、カワウ♀見返り、を撮影した。ヒドリガモをほぼ近距離から撮影することができた。「フィールド図鑑日本の野鳥」では『雄の頭部は赤茶色で頭頂部はクリーム色。雌は他の淡水ガモ類より全体に褐色みが強い。』と書いてあるが、羽の色は見る角度で変化する。撮影画像は、文章や姿図の色彩表現と微妙に違うことが多い。JIS規格の色は269色、RGB(デジタルで使う色表現)では1677万色もある。人は、見える環境が整っていれば750万色、日常の中でも187万5000色もの色を認識しているらしい。褐色といっても無数の色があり、正確な色彩表現にはRGBコードを使う必要がある。私たちが見ている色は、単色ではなく、無数の色の集合体を認識しているのである。
2024	2	24	信濃川河口付近左岸から水鳥等を撮影。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、マフラー、シューズで出かける。気温3～4℃、北北西の風4m/s、陽射しは弱く、湿度は56%。カワウ♀とヒドリガモとコガモ、ホシハジロ♂が嘴を羽に隠して休む、ホシハジロ♀と♂、セグロカモメ幼鳥第1回冬羽横姿、カンムリカイツブリ幼鳥第1回冬羽横姿、柳都大橋上流景観、を撮影した。第1回冬羽は、「フィールド図鑑日本の野鳥」に『幼羽から最初の換羽後の羽衣。多くの鳥(種)は部分的な換羽だが、スズメやムクドリのように完全換羽して、成鳥羽とほとんど変わらない種もいる。』、また幼鳥は『孵化して羽毛が生えそろってから、第1回冬羽に換羽するまでの鳥。』と説明している。換羽は『羽毛が抜け換わること。鳥たちは、汚れたり痛んだりした古い羽毛を定期的に新しい羽毛に換えている。多くの鳥(種)は、繁殖後に全身の羽毛を完全に新しくする「完全換羽」を行い、鳥(種)によっては、繁殖後に翼や尾羽を換羽し、繁殖前に体の羽衣を新しくする「部分換羽」を行うものがある。ツル類などのように大型の鳥(種)では、2年かけて換羽するものもある。』と、説明している。換羽は、鳥(種)によって、様々であると思われる。
2024	2	25	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天から晴天、ジャンパー、マフラー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は3～7℃、東南東の風1m/s、陽射しは弱い。湿度は62%。鳥屋野潟、シロハラ♂後姿、鳥屋野潟、嘴を羽に隠して休むマガモの♀と♂、ヒヨドリ前姿、カワウ♀横姿、を撮影した。シロハラは、「フィールド図鑑日本の野鳥」によると『ほぼ全国で冬鳥。渡来直後は群れだが、徐々に1羽で生活する個体が多くなる。跳ね歩きながら、落ち葉の下や土中からミズ類や昆虫の幼虫などを捕り、本の実なども食べる。雄成鳥は頭部が青みのある灰褐色で、雌は褐色。雌雄とも外側尾羽2～3枚の羽先には白斑がある。』と書いてある。まず、『外側尾羽2～3枚の羽先に白斑』は、飛翔時に尾羽を広げている時でないと見れない。『雄成鳥は頭部が青みのある灰褐色で、雌は褐色』であるが、撮影画像は灰褐色に見える。また、姿図に『喉は、♂が黒っぽく、♀が白っぽい』と書いてあり、撮影画像は白っぽくない。この2点から♂と同定した。沖合にはオナガガモやミコアイサ等が遊泳していた。水鳥がまばらにしかいない鳥屋野潟湖面は静寂に包まれていた。
2024	2	26	信濃川河口付近右岸の日航ホテル展望室から景観を撮影。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、マフラー、シューズで出かける。気温5～7℃、北北西の風6m/s、陽射しは弱いが温い。湿度は70%。信濃川下流景観、船着き場、信濃川上流景観、next21、突堤、シティタワー新潟を撮影した。朱鷺メッセ31階地上約125mに位置する展望室。日本海側随一の高さを誇り、新潟市街地はもちろん、日本海、佐渡島、五頭連峰などの360度のパノラマを楽しめるスポットです。
2024	2	28	信濃川河口付近左岸から水鳥等を撮影。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、マフラー、シューズで出かける。気温6～6℃、北北西の風5m/s、陽射しは弱く、湿度は62%。佐渡汽船こがね丸、セグロカモメ幼鳥第4回冬羽前姿、カワウ幼鳥前姿、カワウ幼鳥羽乾かす、カワウ♀遊泳、カンムリカイツブリ冬羽横姿、セグロカモメとウミネコの群れ、を撮影した。セグロカモメ幼鳥の第4回冬羽は、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『セグロカモメは、4～5年で成鳥になる。第4回冬羽の嘴には黒斑がある。』と書いてあることから、同定した。

西暦	月	日	日誌
2024	2	29	新潟県スポーツ公園と鍔～笹口の遊歩道で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ジャンパー、マフラー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は4～8℃、南の風2m/s、陽射しは弱い。湿度は72%。メジロ横姿、鳥屋野潟、紅梅の花、オナガガモの群れ、ツルニチニチソウの青い花、を撮影した。ツルニチニチソウは、「環境省自然環境局の生態系被害防止外来種リスト」に載っている。『南ヨーロッパ原産。アフリカ南部、南アメリカ、大西洋諸島に分布。オーストラリア、ニュージーランド、合衆国西部で侵略的。明治時代に渡来、北海道、本州九州、四国、琉球に分布。観賞用に栽培されたものがしばしば逸出し、人家付近から杉林の林床まで、様々な場所に生育する。積雪地帯での生育も旺盛で、半日蔭でも良く育つ。園芸植物として渡来。様々な園芸品種が観賞用に利用される。全国的なカバープランツとしての利用度も高い。』と書いてある。明日から3月であるが、周囲に咲いている花は無い。近くの木陰でスイセンの花が咲くはずであるが、気づかなかった。スイセンの開花期間は11月～4月頃と言われている。
2024	3	5	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ジャンパー、マフラー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は4～5℃、南南東の風2m/s、陽射しは弱い。湿度は58%。ダイサギ歩く横姿、鳥屋野潟、スイセンの花(白)、鳥屋野潟、シメ♀後姿、片足でグルーミングをするダイサギ、岸辺に佇むアオサギ前姿、を撮影した。シメ♀は、「フィールド図鑑日本の野鳥」によると『漂鳥、または冬鳥。繁殖期は雌雄とも嘴は鉛色で、冬は肉色。雄の眼先は黒く、雌は淡色。』と書いてある。姿図には『雄の次列風切の羽先は黒っぽく、雌では灰色。』と書いてある。撮影画像を見ると、嘴はピンク色(肉色)で、次列風切の羽先が灰色っぽいことから、♀と同定した。鳥屋野潟湖面には、数が少なくなったマガモの集団が遊泳していた。水鳥がまばらにしかいない鳥屋野潟湖面は静寂に包まれていた。
2024	3	8	信濃川河口付近左岸から水鳥等を撮影。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、マフラー、シューズで出かける。気温4～6℃、南東の風1m/s、陽射しは弱く、湿度は66%。オオバン横姿、信濃川左岸下流景観、ホシハジロ♂、キンクロハジロ♂が嘴を羽に隠して休む、船着き場、カンムリカイツブリ冬羽横姿、を撮影した。オオバンはカモの様な水かきが無いのに、懸命に上流に向かって遊泳していた。「フィールド図鑑日本の野鳥」によると、『積雪の多いところでは夏鳥。それ以外では留鳥、ほぼ全国に見られる。近年増加し、警戒心が弱まった。泳いでいることが多く、泳ぎながら水草や昆虫類の幼虫などを食べる。雌雄同色。成鳥の嘴と額板は白い。若鳥は全体に淡色で、額板が発達していない。』、姿図には『足指にはヒレがある。』と書いてある。しかし、カモ類ではないので、指と指の間に膜の様な水かきが無い。
2024	3	11	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、ジャンパー、マフラー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は5～10℃、南の風6m/s、陽射しは暖かいが風が冷たい。湿度は65%。コガモ♂横姿、鳥屋野潟、マガモ♂横姿、カワウ♂繁殖羽横姿、アメリカフウロの葉？、アカゲラ♀横姿、ヒヨドリ前姿、モズ♂横姿、鳥屋野潟、ミコアイサ♀後姿、を撮影した。アメリカフウロの葉は、「植調-雑草大鑑」によると『越冬期。地際に葉を広げ、全体に赤紫色を帯びる。葉身は5深裂し、さらに細裂する。葉柄の基部に托葉がある。葉柄は長く、紅紫色。』と書いてある。アメリカフウロの花は今までに撮影したことがあることから、種名を選定したが、自信が無いので“？”を付けた。
2024	3	12	信濃川河口付近左岸から水鳥等を撮影。曇天から雨天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、マフラー、シューズで出かける。気温6～6℃、南南西の風3m/s、陽射しは弱く、湿度は60%。ホシハジロ♂が嘴を羽に隠して休む、オオバン横姿、セグロカモメとウミネコ幼鳥第2回冬羽、ana、を撮影した。ウミネコ幼鳥は「フィールド図鑑日本の野鳥」によると、『4年で成鳥になる。』、姿図では2Wが撮影画像と最も似ていることから、幼鳥第2回冬羽とした。『セグロカモメは4～5年で成鳥になる。アホウドリのように完全な成鳥羽になるまでに10年近くかかる鳥(種)もいる。』と書いてある。幼鳥は第1回冬羽まで、第1回冬羽から成鳥羽になるまでは若鳥と書いてあるが、若鳥について明確な規定がないことから、筆者は成鳥羽になるまでを幼鳥と呼んでいる。

西暦	月	日	日誌
2024	3	14	信濃川河口付近左岸から水鳥等を撮影。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、マフラー、シューズで出かける。気温7～11℃、南の風6m/s、陽射しは弱く、湿度は65%。ウミネコ横姿、佐渡汽船ときわ丸、ウミネコが手摺の上にとまる(横姿)、キンクロハジロみ横姿、ヒドリガモ♀とみ、ヒドリガモ♀横姿、を撮影した。ヒドリガモは「フィールド図鑑日本の野鳥」によると、『冬鳥で、4月頃から北帰行を始めるようだ。越冬期は群れで生活し、他の淡水ガモ類よりよく陸に上がり、青草の葉や芽を食べる。』と書いてあるが、写真のヒドリガモは水面に浮かんでいる地下茎や細い流木などを突いていた。
2024	3	15	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は12～14℃、南西の風8m/s、陽射しは暖かく春の嵐の様な強風。湿度は66%。風が鳥屋野潟湖面を走る、ツルニチニチソウの青い花、鳥屋野潟湖面が波立つ、深水に佇む6羽のアオサギ、鳥屋野潟湖面が波立つ、ダイサギが水の中を歩く(横姿)、ダイサギの横顔、ミサゴみ飛翔、を撮影した。ミサゴは、「フィールド図鑑日本の野鳥」によると『海岸、河口、湖沼、河川などに生息し、多くは1～2羽で生活する。水面上を停空飛行して主に魚を獲る魚食性。近年、増加傾向にある。雌雄ほぼ同色。雄の胸は褐色みが少なく、雌は多い。幼鳥の翼上面の各羽縁は白っぽい。』と書いてあることから、♂と同定した。クチボソガラス数羽が鳴いて制空権に入ってきたミサゴを遠巻きに威嚇していた。ミサゴは魚を探していたが、見つからないのか栗木川方面へ去った。
2024	3	16	信濃川河口付近左岸から水鳥等を撮影。晴天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温10～11℃、北西の風5m/s、陽射しは暖かく、湿度は52%。ユリカモメ冬羽、ホシハジロみルビーアイズ、を撮影した。ユリカモメは「フィールド図鑑日本の野鳥」によると、『冬鳥で、4月頃から北帰行を始めるようだ。て小魚やゴカイ、昆虫類などを食べる。雌雄同色。全国で見られる小型カモメの多くは本種。』と書いてある。久しぶりに出合った。羽が茶色っぽい水鳥が近くにいたが、水中を覗き込んでいて、顔が写っていない画像なのでユリカモメの幼鳥と断定できなかった。
2024	3	17	信濃川河口付近左岸から水鳥等を撮影。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温9～13℃、南の風5m/s、陽射しは暖かく、湿度は59%。カンムリカイツブリ冬羽横姿、カンムリカイツブリ夏羽に換羽中横姿、を撮影した。カンムリカイツブリは「フィールド図鑑日本の野鳥」によると、『漂鳥、または冬鳥で、本州以南に生息。青森県と滋賀県や新潟県などの本州の湖沼などで繁殖し、主に沿岸、内湾、湖沼、池、河川などで越冬する。』と書いてある。夏羽に換羽中と冬羽の2羽を撮影した。前者は川の中央の流れの早い場所で繰り返し潜水していた。後者の方は、右岸の流れが淀んでいる岸壁近くで羽繕いをしていた。雌雄同色で、撮影距離も違うので、体格の比較はできないが、前者の方が元気な成鳥で、後者は第1回冬羽の幼鳥の様に見えた。
2024		19	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、ジャンパー、マフラー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は7～8℃、西南西の風3m/s、陽射しは暖かい。湿度は48%。鳥屋野潟、ダイサギ横姿、鳥屋野潟、アオサギ婚姻色(赤い嘴)、ハシビロガモみ、ジョウビタキみ横姿、ヒメオドリコソウの花(淡紅色)、自然巣に出入りするニホンミツバチ、を撮影した。ハシビロガモみは、「フィールド図鑑日本の野鳥」によると『冬鳥で全国的に生息。北海道では稀に繁殖。河川、池、湖沼、海岸、内湾などに生息。1～数羽で、円を描くように水面をまわり、その渦の中心で集めたプランクトンなどを食べるが、扁平な嘴にある歯ブラシ状のものでろ過した水を吐き出すという独特な方法。雄の成鳥羽になるまでや若鳥は換羽が複雑で、個体によって様々な羽衣がある。』と書いてある。カルガモやコガモやマガモの群れに混じって1羽だけいた。クチバンが異常に大きく、グリーン、ホワイト、オレンジ、ブルーの羽色がとても目立つ。鳥屋野潟では頻りに遭遇しない鳥である。

西暦	月	日	日誌
2024	3	24	燈～笹口の遊歩道でウォーキングの途中で撮影。晴天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は9～13℃、南西の風1m/s、陽射しは暖かい。湿度は90%。ヤブツバキの赤い花、ウグイス眼差し(横姿)、を撮影した。ウグイスは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『留鳥、または漂鳥。ほぼ全国に分布。平地から山地の林、ササ類や灌本の多い高原、市街地の藪や植栽の多い公園、庭などを好んで生活する。繁殖期以外は1羽で生活する。春秋には小群で移動する。藪などを渡り歩いて昆虫類やクモ類などを食べる。』と書いてある。姿図があるが、羽の色は茶色で、撮影した画像の様に『暗緑茶色』に描かれていない。「日本の野鳥(山と溪谷社)」はウグイスの写真を載せているが、羽の色については記述が無い。そもそも『暗緑茶色』をネット検索しても納得する色彩画像が見つからない。ネットの「日本の鳥百科(監修 日本鳥類保護連盟)」では、ウグイスの羽色が『暗緑茶色』と表現しているが、この色は無数にあることから、とても曖昧な色彩表現の言葉で
2024	3	25	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は8～11℃、南の風1m/s、陽射しは暖かい。湿度は86%。カンムリカイツブリ夏羽に換羽中オレンジ色の羽前姿、鳥屋野潟、コゲラ後姿、メジロ前姿、鳥屋野潟、カンムリカイツブリ夏羽に換羽中横姿、マガモの♀と♂、ヒドリガモ♂横姿、ヒドリガモ♀横姿、鳥屋野潟、オオイヌノフグリ、ヒメオドリコソウの花(淡紅色)、アカミミガメ甲羅干し、ツクシ、ジョウビタキ♀後姿、を撮影した。アカミミガメが1匹だけ、石の上で甲羅干しをしていた。「野外観察のための日本産爬虫類図鑑第3版」には、『国内では北海道、本州、四国、九州、ほとんどの有人島に定着している。原産地は北アメリカの五大湖南岸からメキシコ湾岸で、東アジアや東南アジア各地にも移入。川の中・下流、池沼、神社の池等に多くみられる。汚れた水でもすむことができるため分布を拡大している。1950年代から「ミドリガメ」の名前で大量に輸入されたが、大型化による飼育放棄・や個体の逃亡等により野外で確認されるようになった。特に飼育放棄が目立ったのは、この亀に起因したサルモネラ菌騒動が起こった後である。雑食性で、主にアメリカザリガニや死んだ魚、水生昆虫等を食べる。成長すると水生植物をよく食べるようになり、ハス、レンコンに被害が出ている。5～8月に2～25個程度の卵を産む。』と書いてある。鳥屋野潟公園のカメは、ほとんどがアカミミガメである。まれにクサガメを見かけることがある。イシガメは交雑個体らしきものがあるが定かではない。
2024	3	27	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は9～9℃、北西の風4m/s、風は冷たく手が凍える、陽射しは弱い。湿度は55%。鳥屋野潟、メジロ横姿、メジロ後姿、メジロ成鳥(前姿)と第1回冬羽(横姿)、タネツケバナ、鳥屋野潟、ヒドリガモ♀と♂が嘴を羽に隠して眠る、マガモ♀眼差し(見返り)、鳥屋野潟、オオイヌノフグリの青い花、ハシビロガモ♂嘴を羽に隠して休む、ニホンミツバチの自然巣ハニカム構造、ジョウビタキ♂第1回冬羽後姿、を撮影した。メジロ第1回冬羽は、「環境省自然環境局野生生物課鳥獣保護業務室のメジロ識別マニュアル」に、『メジロは、幼羽から第1回冬羽への換羽は翼と尾を含む完全換羽である。各亜種とも雌雄は、羽色とサイズが類似し、識別は難しい。』と書いてある。亜種リュウキュウメジロの第1回冬羽の写真が掲載されており、参考とした。ジョウビタキ♂第1回冬羽は、「フィールド図鑑日本の野鳥」に第1回冬羽の姿図があり、参考とした。『明確な規定はないが、第1回冬羽から成鳥羽になるまでの羽衣の鳥を若鳥と呼ぶ』と書いてあるが、種によって成長過程が大きく異なること、“若鳥”と“成鳥”の区別が困難なことから、メジロとジョウビタキは単に“第1回冬羽”と命名した。なお、タネツケバナは仲間が11種もあり、同定の自信が無い。

西暦	月	日	日誌
2024	3	28	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は9～15℃、東南東の風3m/s、風は暖かく、陽射しは弱い。湿度は52%。鳥屋野潟、ベニマシコ♀第1回冬羽横姿、ノボロギクの黄色い花、マガモ♀横姿、ジョウビタキ♂第1回冬羽横姿、鳥屋野潟、ビオトープため池、ニホンミツバチがオオイヌノフグリの花の蜜を吸う、カンムリカイツブリカップル求愛行動～頭を左右に降る、鳥屋野潟、を撮影した。ベニマシコは、「フィールド図鑑日本の野鳥」の姿図♂第1回冬羽とネット検索の♀第1回冬羽の写真を見比べて、筆者の撮影画像は羽毛が幼鳥の様にフワフワしていることに気づいたことから♀第1回冬羽と命名した。また今年も、カンムリカイツブリカップルの恋の季節がやって来た。ほぼ夏羽に換羽したように見えた。
2024	3	30	信濃川河口付近左岸から水鳥等を撮影。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かけるが、往きの柳都大橋でジャンパーを脱ぐ。気温12～13℃、西南西の風5m/s、陽射しは弱く、湿度は64%。柳都大橋下流景観、ヒドリガモ♂が鳴く、キンクロハジロ♂が嘴を羽に隠して休む、ホシハジロ♂前姿、ホシハジロ♀横姿、ジョウビタキ♂第1回冬羽見返り、ジョウビタキ♀第1回冬羽後姿、を撮影した。ジョウビタキ♂は「フィールド図鑑日本の野鳥」によると、『冬鳥。ほぼ全国。岐阜県や長野県、北海道などで繁殖が増加。市街地から山地の林や農耕地、公園、河原などに生息。越冬期は雌雄に関係なくなわばりをもって生活する。渡来直後は高い場所で、なわばりを主張するように鳴く。昆虫やミミズ類、クモ類などを食べ、本の実も食べる。』と書いてある。♂第1回冬羽の姿図に、『風切羽は褐色、背にも褐色部がある。』と書いてあることから、♂第1回冬羽と同定した。4月中旬ごろからユーラシア大陸への北帰行を始めるようだ。
2024	3	31	弁天橋周辺と鍔～笹口の遊歩道でウオーキングの途中に撮影。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は11～11℃、北西の風3m/s、雲が厚く陽射しは弱い。湿度は66%。鳥屋野潟、チュウダイサギ(婚姻色に移行中)が餌を探して歩く(横姿)、鳥屋野潟、ヒヨドリの横顔(地鳴き)、シジュウカラ♂前姿(横顔)、を撮影した。チュウダイサギは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『夏鳥として中部地方以南に、亜種チュウダイサギが渡来し、繁殖する。それより一回り大きい亜種ダイサギが、冬鳥としてほぼ全国に渡来する。両亜種は似ているが、冬羽の亜種ダイサギの月至節から附脈にかけては白かピンク色っぽく、亜種チュウダイサギは全体に黒っぽい。』と書いてある。チュウダイサギの姿図は、嘴が黒く、目元が黄緑色に描かれているが、これは婚姻色である。
2024	4	1	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は11～13℃、北北西の風1m/s、陽射しは弱い。湿度は57%。鳥屋野潟、チュウダイサギ(婚姻色に移行中)が餌を探して歩く(横姿)、チュウダイサギ横顔(婚姻色に移行中)、カンムリカイツブリ幼鳥第1回冬羽見返り、カンムリカイツブリカップル求愛行動～頭を左右に振る、オカヨシガモ♂、鳥屋野潟、ハシビロガモ♀横姿、ハシビロガモ♂横姿、を撮影した。オカヨシガモは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『冬鳥。ほぼ全国的に生息し、北海道の一部では夏鳥。本州での繁殖記録もある。河川、池、水田、湖沼、干潟などに生息。越冬期は大きな群れになることは少ない。水面に嘴をつけて浮遊する植物の種子をピチャピチャと食べたり、逆立ちして水底にたまった種子なども食べる。』と書いてある。姿図には『雌雄とも次列風切の白が特徴的』と書いてある。4月に北帰行するようだ。

西暦	月	日	日誌
2024	4	2	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は11～12℃、西南西の風3m/s、陽射しは暖かい。湿度は48%。鳥屋野潟、アオサギ婚姻色に移行中横姿、アオサギ横顔(婚姻色に移行中)、地面に落ちたヤブツバキの赤い花、ハシビロガモ♀見返り、ニホンミツバチの自然巣ハニカム構造、メジロ横姿、メジロ前姿、エドヒガン(江戸彼岸)の開花直前、を撮影した。アオサギの婚姻色について、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『サギ類は繁殖期が近づくと虹彩の色や眼先が派手な色になる。また、足も赤みを帯びたりもする。その期間はあまり長くないので、春先から初夏の一時期に注意深く観察したい。』と書いてある。写真は、足が赤くなっていること、嘴が赤く(濃い橙色)になっていることから、「婚姻色に移行中」と表示した。メジロは、十数羽の群れで飛んできて、アオキの藪に姿を隠した。写真は、群れのボスで、仲間が隠れるのを見守っていた瞬間を撮影したものである。
2024	4	3	鍔～笹口の遊歩道でウオーキングの途中に撮影。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は12～13℃、南東の風1m/s、陽射しは弱い。湿度は60%。スズメ横姿、ムクドリ♀横姿、を撮影した。ムクドリは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『留鳥、または漂鳥。ほぼ全国で、南西諸島では冬鳥。平地から山地の市街地や農耕地、芝地、河原、果樹園などに生息。1年を通して群れで行動し、草丈の低い場所を歩きながら、昆虫類やミズ、節足動物などの他、木の実もよく食べる。雌雄ほぼ同色。雌雄とも嘴基部に青みがある。雄は頭部から頸の黒みが強く、雌は淡色。若鳥は全体に淡色。』と書いてある。姿図があるが、雌は『雄の黒い部分が雌では淡色』と書いてある。市街地の空き地や野原が減少したことにより、見かけることが少なくなった。
2024	4	4	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は13～13℃、西北西の風4m/s、陽射しは弱い。湿度は75%。鳥屋野潟、ジョウビタキ♀横姿、ソメイヨシノ開花、ツグミ♂横姿、エドヒガン(江戸彼岸)の開花、鳥屋野潟、カンムリカイツブリ(夏羽)浮上横姿、ジョウビタキ♀前姿、ジョウビタキ♀後姿、カンムリカイツブリ(夏羽)浮上前姿、カンムリカイツブリ夏羽横姿、鳥屋野潟、ハシビロガモ♀と♂、セイウタンポポの黄色い花、を撮影した。ツグミについて、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『冬鳥。全国に記録される。平地から山地の林、農耕地、芝地、樹木の多い公園などで生息。群れで渡来し、徐々に1羽での生活になる個体が多く、春には再び群れになって渡去する。地上を跳ね歩いて、立ち止まっては胸を張る。この動作をくり返ししながらミズ類などを捕る。雄成鳥は全体に羽衣が濃く、雌や若鳥は淡色なことが多い。』と書いてある。5月頃にユーラシア大陸北部へ渡去する。
2024	4	5	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。往きの弁天橋でジャンパーを脱ぐ。GパンのW73cmはチョットキツイ。気温は11～13℃、東の風1m/s、陽射しは暖かい。湿度は60%。鳥屋野潟が凧で鏡の様な水面に綿雲が写る、エドヒガン(江戸彼岸)の花びら5枚、鳥屋野潟、ジョウビタキ♀横姿、カンムリカイツブリ夏羽横姿、ニホンミツバチの自然巣、ジョウビタキ♂第1回冬羽横姿、カンムリカイツブリ冬羽見返り、鳥屋野潟、ツグミ♂横姿、ハシビロガモ♀と♂、コゲラ幼鳥が木を突く(前姿)、を撮影した。コゲラ幼鳥について、「フィールド図鑑日本の野鳥」には記述が無かった。ネット検索の「 https://tori3.sakura.ne.jp/birdworld_menu/kitutuki/kogera/kogera-j-ma.html 」に♂幼鳥の写真が掲示されていた。筆者が撮影した画像も、頭部の羽毛がフワフワしていること、幼鳥のような眼と嘴で、かつ表情であることから幼鳥と同定した。

西暦	月	日	日誌
2024	4	6	長潟の田んぼと新潟県スポーツ公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。往きの弁天橋でジャンパーを脱ぐ。気温は13～15℃、静穏0m/s、陽射しは暖かい。湿度は59%。カンムリカイツブリ夏羽後姿、鳥屋野潟、コサギ見返り、支線排水路、モズ♀横姿、ムクドリ♂横姿、ヒツジ田、モンシロチョウ♀、ハクモクレンの白い花、ジョウビタキ♀前姿、青空と鳥屋野潟の湖面が一体になる、エドヒガン(江戸彼岸)の花びら5枚、を撮影した。モンシロチョウについて、「日本のチョウ増補版」に、夏型と春型のみと♀の写真が掲載されていて、春型の♀と同定した。生態については、『【食草】キャベツ、ブロッコリー、アブラナ、ショカツサイ、イヌガラシ、タネツケバナなど(アブラナ科)。【生息環境】農地・公園・人家・河川平地～山地に見られるが、主に平地～丘陵地の農地やその周辺の荒地などで発生。【行動】日中、キャベツ畑など農地周辺を活発に飛翔し、タンポポ類、ネギ、ヒメジョオンなど各種の花を訪れる。♀は移動性が大きい、♂♀で集団になり移動することもある。【生息状況。保全】キャベツなどの害虫であり、都市部でも個体数は多い。』と書いてある。成虫は3月中旬から11月下旬まで発生する。
2024	4	7	信濃川河口付近左岸から水鳥等を撮影。晴天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温17～19℃、南南西の風1m/s、陽射しは暖かく、湿度は60%。佐渡汽船おけさ丸、カンムリカイツブリ(夏羽)浮上前姿、アザマラジャーニー(クルーズ船)、カンムリカイツブリ幼鳥第1回冬羽(前姿)、ヒドリガモ♀横姿、ユリカモメ第1回冬羽、を撮影した。カンムリカイツブリ幼鳥第1回冬羽は、成鳥の夏羽と比べると、嘴がピンク色で、眼が濁ったオレンジ色で、明らかに成鳥と異なることから、『幼鳥』の第1回冬羽と同定した。
2024	4	8	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は18～22℃、南東の風1m/s、陽射しは暖かい。湿度は59%。鳥屋野潟、スズメ横姿、ソメイヨシノ開花、エドヒガン(江戸彼岸)満開、鳥屋野潟、カンムリカイツブリ夏羽横姿、カンムリカイツブリ夏羽の威嚇ポーズ横姿、カンムリカイツブリ夏羽浮上後姿、カンムリカイツブリ夏羽横姿、鳥屋野潟、ツグミ♂横姿、コブシの白い花(花びら6枚)、ウシガエルの日光浴、オイカワ稚魚、を撮影した。オイカワ稚魚は、毎年この水路でオイカワを撮影していることから、稚魚と推定した。アカミミガメよりも2週間くらい遅れて、ウシガエルが冬眠から醒めて、日光浴を始めた。周辺にはコガモやアカミミガメが居たが、キングオブ外来種の如く、胸を張って日光浴をしていた(ちょっと大袈裟か?)。
2024	4	10	長潟の田んぼと新潟県スポーツ公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、ジャンパー、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。往きの弁天橋でジャンパーを脱ぐ。気温は9～11℃、南南東の風1m/s、陽射しは暖かいが風は冷たい。湿度は52%。鳥屋野潟、小排水路、支線排水路、ツグミ横姿、ヒツジ田(2番穂)、モンシロチョウ♀、畔塗り、ツグミ横姿、ハシボソカラス群れ、ツグミ見返り、オオシマザクラ花満開、ソメイヨシノ花満開、エドヒガン(江戸彼岸)の花びら5枚、鳥屋野潟、を撮影した。ソメイヨシノについて、「よくわかる樹木大図鑑」に、『エドヒガンとオオシマザクラの雑種で、江戸時代末に染井村から吉野桜として売り出されました。』と書いてある。ソメイヨシノは自家不和合性の性質をもち、自家受粉しても花粉が発芽しないので種ができないことで有名である。ソメイヨシノは「接ぎ木」という手法で全国に広がっていったと言われている。
2024	4	11	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は14～17℃、南南東の風3m/s、陽射しは暖かい。湿度は50%。鳥屋野潟、オオバンのルビーアイズ(見返り)、ニホンミツバチの自然巣、カンムリカイツブリカップル求愛行動～頭を左右に振る、鳥屋野潟、ソメイヨシノ開花、エドヒガン(江戸彼岸)満開、を撮影した。カンムリカイツブリカップルの求愛行動は、『フィールド図鑑日本の野鳥』には、『繁殖期に入ると雌雄ともに飾り羽を立ててディスプレイを行う』としか書いていない。筆者が目撃した行動は『頭を左右に振りクチバシを重ねる』、『♂が羽を広げて水面を駆ける』、『水草を銜えて頸を左右に振り、営巣を促す』、『頸を上下に振り、浮巣に水草を交互に置きあう』である。

西暦	月	日	日誌
2024	4	14	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は18～19℃、南の風1m/s、陽射しは暖かい。湿度は59%。カンムリカイツブリ夏羽に換羽中横姿、鳥屋野潟、ソメイヨシノ花満開、鳥屋野潟、カムルチー、ヤマブキの黄色い花、ヤエヤマブキの黄色い花、アメンボ、コイ、ヤマシロオニグモがガガンボを捕獲、カンムリカイツブリ夏羽横姿、を撮影した。ヤマシロオニグモは、「日本のクモ」には、『出現期:7～9月。分布:北海道,本州,四国,九州,南西諸島。里山～山地に生息。腹部の色彩,斑紋には変異が多く,セジロ型,アトグロ型など様々な個体が見られる。』と書いてあることから、ヤマシロオニグモではないかもしれない。オニグモは種類が多く、1枚の写真だけでは同定は難しい。
2024	4	15	信濃川河口付近左岸から水鳥等を撮影。晴天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温21～24℃、西北西の風1m/s、陽射しは強く日傘をさす、湿度は52%。信濃川左岸下流景観、ヒドリガモ♂横姿、ヒドリガモ♀前姿、ヒドリガモ♀横姿、ハクセキレイ♂横姿、を撮影した。ハクセキレイは「フィールド図鑑日本の野鳥」によると、『漂鳥、または留鳥。九州以北。海岸、河川、農耕地などに生息。繁殖期以外は1羽、または小群で行動する。尾羽を上下に振りながら、主に水辺や農耕地を歩き、昆虫やクモ類などを食べる。雌雄ほぼ同色。雄夏羽の頭頂からの上面は黒い。雌の上面は灰色。雄冬羽の上面は灰色っぽい、黒みがある。亜種ハクセキレイ以外に6亜種がいる。』と書いてあることから、♂と同定した。灰色っぽい残っており、夏羽に換羽中のような様子。
2024	4	16	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は20～16℃、南東の風4m/s、陽射しは弱い。湿度は46%。鳥屋野潟、オウバイ(黄梅)の黄色い花、ソメイヨシノ花の後に葉が出る、鳥屋野潟、ソメイヨシノの花びらが散った道、カンムリカイツブリ夏羽浮上横姿、鳥屋野潟、ソメイヨシノの花びらが散った道、を撮影した。桜が開花する時期の水鳥は、カンムリカイツブリ、カルガモ、わずかなコガモで、湖面はとても静かである。時折、繁殖期をむかえたカンムリカイツブリの鳴き声「ガガ……」が聞こえる。一方、湖畔林の藪の中にいるウグイスの「ホーホケキョ、ホーホケキョ」とさえずる声が辺りに響き渡る。
2024	4	17	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は16～18℃、南西の風5m/s、陽射しは弱い。湿度は84%。鳥屋野潟、岸辺に佇むアオサギ横姿、ソメイヨシノの花びら、カンムリカイツブリ夏羽浮上見返り、カンムリカイツブリ夏羽浮上横姿、鳥屋野潟、クロツグミ♂、ハナミズキの芽吹き、ツツジの花赤紫色、カンムリカイツブリ夏羽が羽を広げる横姿、カンムリカイツブリカップル求愛行動～頭を左右に振る、を撮影した。クロツグミは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『九州以北で夏鳥。南西諸島では旅鳥。平地から山地の、比較的明るい林。日本海側では防砂林のマツ林やニセアカシアの林などに生息。林内から出ることは少なく、地上でミズ類を好んで捕らえる。雄成鳥は頭から胸が黒く、背なども黒っぽい個体と、背からの上面が灰色みの強い個体がいる。「ツィー」「キョキョ」などと鳴き、「ピーチョチョチョキョキョロン」などと複雑にさえずる。』と書いてある。3月中旬から4月下旬にかけて渡来し、10月初旬から11月下旬にかけて中国南部やフィリピン北部に南帰行する。

西暦	月	日	日誌
2024	4	18	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は15～17℃、北北西iの風1m/s、陽射しは弱い。湿度は74%。鳥屋野潟、カンムリカイツブリ夏羽浮上横姿、カンムリカイツブリ夏羽浮上見返り、アオジの夏羽横姿、アトリ♀横姿、アトリ♂夏羽横姿、鳥屋野潟、ベニマシコの冬羽横姿、カワラヒワ♀見返り、ウグイスの横姿、ウグイスの前姿、ウグイスの後姿見返り、カンムリカイツブリ夏羽浮上横姿、カンムリカイツブリ夏羽浮上後姿、を撮影した。アトリは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『冬鳥。ほぼ全国で記録されている。平地から山地の、林や農耕地、河原、草地などに生息。多くは群れで行動し、大きなねぐらでは数万羽になることもある。樹上や地上で草木の種子を食べ、春には昆虫類の幼虫なども捕る。雄夏羽の頭部は黒色で、冬羽は黒色がまばら。雌の頭部は淡い灰色で、黒い頭側線がある。「キョッキョッキョ」などと鳴く。』と書いてある。5月初旬から下旬にかけてユーラシア大陸北部に北帰行する。ウグイスは雌雄同色であるが、「ホーホケキョ、ホーホケキョ」とさえずるのは♂だけである。
2024	4	20	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は13～15℃、北iの風1m/s、陽射しは暖かい。湿度は67%。鳥屋野潟、カンムリカイツブリカップル求愛行動～頭を左右に振る、ニホンミツバチの自然巣、鳥屋野潟、コムクドリ♂前姿、コムクドリ♂横姿、カンムリカイツブリカップル、を撮影した。コムクドリは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『夏鳥。中部地方以北で、それより南では旅鳥。平地から山地の林や果樹園などで生息。繁殖期以外は群れで生活。ムクドリより樹上生活が多い。枝移りして昆虫類や木の実などを、地上でも昆虫類の幼虫などを食べる。雄の頬には赤茶色の斑があり、雌にはない。「ギュル」「キュル」などと鳴き、繁殖期には「キュキュビュルキュルルキュルル」などをつぶやくように鳴く。』と書いてある。4月初旬から5月下旬にかけて台湾、フィリピンなどから渡来し、9月から10月にかけて南帰行する。カンムリカイツブリカップルの求愛行動―[水草を銜えて頸を左右に振り、営巣を促す]―姿を撮影した。しかし、遠距離で不鮮明な画像だったので掲載しなかった。
2024	4	21	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は14～14℃、北東iの風4m/s、陽射しは暖かい。湿度は61%。鳥屋野潟、カンムリカイツブリカップル、ツグミ見返り、キジバトグルーミング、を撮影した。長潟の田んぼを見てきたが、耕耘作業まで進んでいた。もうすぐ、代掻き作業が始まる。田んぼに水を張る頃になると、婚姻色のチュウサギ(夏鳥)が渡来する。
2024	4	22	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は15～17℃、北iの風3m/s、陽射しは暖かい。湿度は75%。鳥屋野潟、ヒヨドリがソメイヨシノの蜜線を吸蜜、ニホンミツバチの自然巣、コムクドリ♂横姿、カンムリカイツブリカップル、鳥屋野潟、小松堀排水路、ビオトープため池、コガモ♂横姿、コガモ♂が体をブルブルと震わせる(横姿)、を撮影した。コガモは「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『冬鳥。全国的に渡来し、北海道では多くが旅鳥。本州と北海道で繁殖記録がある。4月初旬から下旬にかけてユーラシア大陸北部に北帰行するが、一部は帰らない。』と書いてある。それにしても、体をブルブルと震わせる(回す)早さは、犬や猫よりも早そうである。
2024	4	23	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は14～17℃、北iの風2m/s、陽射しは弱い。湿度は84%。鳥屋野潟、ツルニチニチソウの莖色の花、セイウタンポポの果実と冠毛、カンムリカイツブリ夏羽横姿、鳥屋野潟、ウグイス♂がさえずる(後姿)、を撮影した。

西暦	月	日	日誌
2024	4	25	新潟県スポーツ公園と長潟住宅地周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は15～16℃、南南西iの風4m/s、陽射しは弱い。湿度は87%。鳥屋野潟、ハナミズキ緑の蕾と白い総苞片、ハナミズキ緑の蕾と赤い総苞片、アオジ♂夏羽横姿、を撮影した。ハナミズキは、「よくわかる樹木大図鑑」に、『別名はアメリカヤマボウシ。花の様に見えるものはガクが変化したもので、本来の花は中心部にまとまってついています。秋には、楕円形の実が集まってつきます。食用にはなりません、赤色に熟したものは、ヒヨドリなどの野鳥の大好物です。開花期は4～5月。花色は白、赤、桃、黄。結実期9～10月で実の色は赤。』と書いてある。花言葉は、ネット検索では「返礼」、「永続性」、「私の想いを受けとめて」である。筆者の撮影画像は、開花前の緑の蕾と総苞片(ガク)の写真である。
2024	4	26	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は19～23℃、南南東iの風1m/s、陽射しは強い。湿度は61%。鳥屋野潟、カンムリカイツブリ夏羽浮上横姿、鳥屋野潟、カンムリカイツブリ夏羽浮上後姿、コムクドリ幼鳥、コムクドリ♂前姿、ヨコズナサシガメ幼虫、を撮影した。コムクドリ幼鳥は、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『幼鳥の姿図に嘴は黒く基部は肉色。』と書いてあることから同定した。ヨコズナサシガメは「日本の昆虫生態図鑑」に、『体は黒色で光沢があり各脚の基節と腹端2節は鮮紅色。腹部結合板が葉状に広がり、白色で各節に大きい黒斑を持つ。人里的な環境のサクラ・エノキ・ケヤキなどの樹幹で見られ、肉食性で小昆虫を捕えて体液を吸う。』と書いてある。
2024	4	27	長潟の田んぼで動植物との一期一会を楽しむ。曇天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は20℃、南南東の風1m/s、陽射しは暖かい。日傘をさす。湿度は66%。鳥屋野潟、支線排水路、ツグミ横姿、耕起-水張り、2羽のカルガモ、を撮影した。田んぼの耕起作業が終わり、水を張り始めていた。代掻き作業は5月に入ってからか？婚姻色のチュウサギが現れるのは、畦畔の雑草が芽吹く頃か？
2024	4	28	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は21～22℃、南南西iの風3m/s、陽射しは強い。湿度は51%。鳥屋野潟、カンムリカイツブリ夏羽浮上横姿、ヨシガモ♂、ヨシガモ♀と♂、アトリ♀後姿、アトリ♀横姿、鳥屋野潟、コイの頭部、アオジ♂横姿、を撮影した。ヨシガモは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『冬鳥。全国的に生息するが、北海道では少数が繁殖する。群れは10羽ほどになることが多く、他の淡水ガモ類と同じものを食べる。雄の頭部はナポレオンの帽子のような形。また、長い三列風切は房状になっていて、尾羽に覆いかぶさる。雌の後頭部の羽はわずかに長い。4月頃にユーラシア大陸北部に北帰行するが、一部は日本に残って繁殖する。』と書いてある。♂と♀が2羽づつ沖合で休んでいた。北海道で繁殖する居残り組か？
2024	4	29	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は17～19℃、北北東iの風3m/s、陽射しは強い。湿度は79%。鳥屋野潟、ニフトコの花(淡黄白色)、ルリタテハ、鳥屋野潟、ハルジオンの白い花びら、カンムリカイツブリ夏羽浮上横姿、コガモ♂横姿、鳥屋野潟、を撮影した。ルリタテハは、「日本の昆虫生態図鑑」に、『分布は、北海道、本州、四国、九州、南西諸島、出芽期6, 7, 8月。色彩斑紋はオスメスほぼ同じだが季節的変異がある。全国各地に分布するが寒冷地では稀になる。暖地では年3回、北海道などの寒冷地では年1回の発生。成虫で越冬する。雑木林の周辺などに多く見られ、極めて敏速に飛び枝先や樹幹、地上に翅を開いてとまる。夏はクヌギ、コナラなどの樹液に集まり翅を開けて下向きにとまる。』と書いてある。

西暦	月	日	日誌
2024	4	30	長潟の田んぼで動植物との一期一会を楽しむ。曇天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は20～18℃、西の風 2m/s、陽射しは弱い。湿度は71%。コチドリ♀横姿、支線排水路、小排水路、ツグミ後姿、代掻き一水張り、4羽のカルガモ、チュウサギ婚姻色(赤い虹彩)の横顔、チュウサギ婚姻色(赤い虹彩)横姿、支線排水路、を撮影した。コチドリは「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『九州以北で夏鳥。西日本の暖地で少数が越冬する。河川、埋立地、造成地、水田などに生息。繁殖地への渡来は早く、3月頃には姿を現す。浅い水辺などを小走りで小型の昆虫類などを捕らえたり、片足を振るわせて水生昆虫を追い出して食べたりもする。雌雄ほぼ同色。成鳥雄は前頭部と胸が黒いが、雌はその部分に褐色みがある。「ピー」「ピョピョ……」などと鳴く。』と書いてある。コチドリは警戒心が強く、「ピーピーピー」と大きく響き渡る様に鳴くので、姿が見えなくても近くに居るのが分かる。逃げる時も大きな声で鳴くので、どの方向へ飛び去ったかよくわかる。チュウサギは、『夏鳥として、九州以北、本州中部地方以南に渡来し、南西諸島では冬鳥。草地、水田、湿地、河川、池などで生息。他のサギ類と混じって、コロニーをつくって繁殖する。採食場は草地や農耕地などが多く、カエルやトカゲ、バッタなどをよく捕る。雌雄同色。嘴は夏羽では黒く、冬羽や若鳥は黄色。幼鳥には飾り羽がない。』、なお、婚姻色の横顔が描かれている。50mくらい近づいたら、逃げられてしまった。警戒心がとても強いようだ。
2024	5	2	鳥屋野潟と長潟の田んぼで動植物との一期一会を楽しむ。曇天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は14～16℃、静穏0m/s、陽射しは暖かい。湿度は69%。鳥屋野潟、ヨシガモ♀と♂、ハナミズキ黄緑色の花と白い総苞片、チュウダイサギ婚姻色が歩く横姿、溝畔に佇むアオサギ幼鳥後姿、支線排水路、溝畔に佇むアオサギ幼鳥横姿、小排水路、を撮影した。アオサギ幼鳥は「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『雌雄同色。1年中、成鳥の体上面は青みのある灰色で、若鳥には褐色みがある。幼鳥の姿図では、胸部に飾り羽が無く、頭部が灰色で冠毛が短く描かれている。』と書いてあることから幼鳥と同定した。撮影画像は、陽炎の中で佇むアオサギ横姿である。チュウダイサギは、婚姻色の横顔が描かれているが、黒いクチバシの根本が緑色である。またネット検索によると、足が赤っぽくなるらしい。撮影画像で、これらを確認することができる。
2024	5	3	2016年の昆虫類バッタ等を更新訂正。生きもの等リスト一覧は変更なし。
2024	5	4	長潟の田んぼで動植物との一期一会を楽しむ。晴天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は19～22℃、南の風 1m/s、陽射しは強い。撮影以外は日傘をさす。湿度は56%。チュウサギ夏羽横姿、チュウダイサギ夏羽横姿、チュウダイサギ夏羽が歩く(横姿)、ムクドリ♀と♂、支線排水路、代掻き作業の水田で佇むアオサギ(横姿)、を撮影した。チュウサギとチュウダイサギは「フィールド図鑑日本の野鳥」に、婚姻色の横顔の絵図があり、両種とも眼(虹彩)が赤い。一方、撮影画像は赤くないことから婚姻色ではなく夏羽とした。ムクドリの雌雄判別は、『雌雄ほぼ同色。雌雄とも嘴基部に青みがある。雄は頭部から頸の黒みが強く、雌は淡色。若鳥は全体に淡色。』と書いてある。雌と若鳥の判別は難しいが、姿図には『♂の黒い部分が♀では淡色』と書いてあることから、♀と同定した。
2024	5	5	長潟の田んぼで動植物との一期一会を楽しむ。晴天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は24～24℃、南の風 2m/s、陽射しは強い。撮影以外は日傘をさす。湿度は47%。支線排水路、カルガモ横姿、田植え、チュウダイサギが小魚をクチバシに挟む、チュウダイサギ夏羽が首を伸ばして歩く(横姿)、チュウダイサギ夏羽横顔、を撮影した。チュウダイサギが首を伸ばして歩く姿は、とても機能的で格好いい。胴体よりも首の方が長く見える。なぜなら、クチバシが頭の大きさに比べて、とんでもなく長い。このアンバランスな姿態に、なぜか心を奪われる。

西暦	月	日	日誌
2024	5	6	長潟の田んぼで動植物との一期一会を楽しむ。曇天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は23～25℃、南の風3m/s、陽射しは弱い。湿度は48%。弁天橋で、カンムリカイツブリ♂夏羽横姿、カンムリカイツブリ♀夏羽横姿、コチドリ後姿、チュウサギ夏羽横姿、チュウサギ夏羽とチュウダイサギ夏羽が歩く(横姿)、農道、を撮影した。チュウサギとチュウダイサギがほぼ並んで歩く姿を撮影することができた(不鮮明な画像ではあるが)。体格の違いが良く分かる。「フィールド図鑑日本の野鳥」では『チュウサギは体長65cm～72cm、チュウダイサギは80cm～104cm』と書いてある。新潟では、チュウサギは夏鳥、チュウダイサギは留鳥である。撮影画像に写る様子は、「ついて来い！(チュウダイサギ)」、「ちょっと、待って！(チュウサギ)」と、まるで知人の様に会話をしながら歩いているように見える。
2024	5	10	長潟の田んぼで動植物との一期一会を楽しむ。晴天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は16～20℃、南の風3m/s、陽射しは強い。撮影以外は日傘をさす。湿度は56%。田植えの終わった田んぼで、チュウダイサギ夏羽が歩く横姿、チュウダイサギ夏羽が小魚をクチバシに挟む(ドジョウ?)、水の中を凝視するチュウダイサギ夏羽横姿、を撮影した。チュウダイサギが首を伸ばして歩く姿は、とても機能的で格好いい。このアンバランスな姿態に、なぜか心を奪われる。
2024	5	11	長潟の田んぼで動植物との一期一会を楽しむ。晴天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は21～26℃、南の風3m/s、陽射しは強い。撮影以外は日傘をさす。湿度は51%。田植えの終わった田んぼで、チュウサギ♀夏羽が湛水田を歩く横姿、チュウサギ♀夏羽が首を伸ばして湛水田を歩く横姿、チュウサギ♂婚姻色(赤い虹彩)が湛水田を歩く横姿、チュウサギ♀夏羽が湛水田を歩く前姿、チュウサギ♂婚姻色(赤い虹彩)が湛水田を歩く横姿、を撮影した。「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『夏羽(繁殖羽)は、つがいを形成する時期や繁殖期間の、繁殖にかかわる羽衣のこと。一般的に冬羽に比べて鮮やかで、雄のほうが雌より派手なことが多い。』と書いてある。撮影した2羽のチュウサギは背と胸に飾り羽があるので成鳥である。よって、婚姻色(赤い虹彩)が♂で、眼が赤くないのが♀と考えた。たぶん、つがいなのだろう。
2024	5	12	長潟の田んぼで動植物との一期一会を楽しむ。曇天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は22～25℃、南南東の風3m/s、陽射しは弱い。太陽フレアの紫外線が怖いので、撮影以外は日傘をさす。湿度は50%。田植えの終わった田んぼで、チュウサギ♀夏羽が湛水田を歩く横姿、チュウサギ♀夏羽が溝畔を歩く横姿、チュウサギ♀夏羽の横顔、を撮影した。恐らく、昨日撮影したチュウサギ♀だと思う。食欲旺盛で、一心不乱に、田んぼや溝畔で小魚やバッタ等を採餌していた。繁殖期なので、交尾をしたのかも知れない。なお、婚姻色(赤い虹彩)の♂は、見かけなかった。
2024	5	13	2016年の昆虫類、クモを更新中。
2024	5	14	長潟の田んぼで動植物との一期一会を楽しむ。晴天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は16～19℃、東の風1m/s、陽射しは強い。太陽フレアの紫外線が怖いので、撮影以外は日傘をさす。湿度は70%。長潟の田んぼで、アオサギ婚姻色(赤い嘴)が水田を歩く横姿、チュウサギ夏羽が溝畔に佇む(後姿)、チュウダイサギ夏羽が水田で佇む(後姿)、アオサギが代掻き作業の水田を歩く(横姿)、アオサギ若鳥が代掻き作業の水田を歩く(横姿)、アオサギ若鳥が代掻き作業の水田に佇む(後姿)、チュウダイサギ夏羽が水田で首を伸ばして獲物を狙う(横姿)、チュウダイサギ夏羽が水田で小魚をクチバシに挟む(後姿)、チュウダイサギ夏羽が水田で首を伸ばして歩く(横姿)、を撮影した。アオサギ若鳥について、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『雌雄同色。1年中、成鳥の体上面は青みのある灰色で、若鳥には褐色みがある。』、若鳥の定義は、『明確な規定はないが、第1回冬羽から成鳥羽になるまでの羽衣の鳥。』と書いてある。アオサギ若鳥の後姿の撮影画像を見ると、冠羽は成鳥に比べて短く目立たないこと、羽は褐色みがあることが分かる。

西暦	月	日	日誌
2024	5	15	弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は21～24℃、南南西の風2m/s、陽射しは強い。湿度は59%。カンムリカイツブリ夏羽羽ばたく、カンムリカイツブリ夏羽横姿、カンムリカイツブリ夏羽浮上横姿、を撮影した。カンムリカイツブリは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『雌雄が頸を伸ばして向き合う求愛のディスプレイは繁殖前から行う。カイツブリ類の巣は、浮巣と呼ばれている。完全に水に浮いているわけではない。アシやガマ、水に垂れ下がっている木の枝などに、枯れ木や草などを絡めて土台にしたり、コウホネなどの水草を土台にしたりして、その上に小枝や水草、落ち葉などを積み上げて作る「水に浮いているように見える巣」である。』と書いてある。2羽の行動を見ると、まだ、交尾の最中か？、しかし、巣作りを始めた様子はなさそうである。営巣して抱卵が始まると、雌雄交代で、採餌をしたり、巣の補強の小枝や水草を運んだりして忙しくなる。
2024	5	16	長潟の田んぼで動植物との一期一会を楽しむ。晴天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は23～25℃、南東の風7m/s、陽射しは強い。南風が強いが太陽フレアの紫外線が怖いので、撮影以外は日傘をさす。湿度は63%。長潟の田んぼで、チュウダイサギ夏羽が水田で胸を張って歩く(横姿)、チュウダイサギ夏羽が水田の畦畔で佇む(後姿横顔)、チュウサギ夏羽が水田で佇む(後姿横顔)、チュウサギ夏羽が首を伸ばして湛水田を歩く(横姿)、チュウダイサギ夏羽が水田で首を伸ばして歩く(横姿)、を撮影した。チュウダイサギのクチバシの根本(眼の付近)は緑色であるが、一部黄色い箇所が残っている。「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『雌雄同色。嘴は夏羽では黒く、冬羽や若鳥では黄色。』と書いてある。飾り羽があることから、若鳥ではなさそうである。成鳥の嘴が冬から夏バージョンに移行中なのだろう。
2024	5	18	長潟の田んぼで動植物との一期一会を楽しむ。晴天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は21～26℃、南の風3m/s、陽射しは強い。南風が強いが太陽フレアの紫外線が怖いので、撮影以外は日傘をさす。湿度は57%。長潟の田んぼで、チュウダイサギ夏羽が水田で首を伸ばして歩く(横姿)、チュウダイサギ夏羽が水田で佇む(横姿)、チュウダイサギ夏羽が溝畔で胸を張って歩く(横姿)、を撮影した。チュウダイサギとチュウサギの体長は、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『L=80～104cm』と『L=65～72cm』と書いてある。最小で15cm、最大で32cmの差がある。ところが、遠くから、首をすぼめた後姿を見ると、どちらの種か？、分からないことがある。首を伸ばした姿勢であれば、首の長さとお体の長さの比率が明瞭になることから、遠くからでもチュウダイサギとチュウサギの判別がつく。もちろん、『チュウダイサギは口角は眼より後ろまで、チュウサギでは眼の下まで。』で、同定する方法が確かである。
2024	5	19	長潟の田んぼで動植物との一期一会を楽しむ。曇天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は23～24℃、南南東の風2m/s、陽射しは強い。太陽フレアの紫外線が怖いので、撮影以外は日傘をさす。湿度は52%。長潟の田んぼで、チュウダイサギ夏羽が水田を歩く(横姿)、チュウダイサギ夏羽横顔、コサギ婚姻色(深紅の眼先)がグルーミング、同じく足で首を搔く、同じく横顔、同じく溝畔で佇む(前姿)、を撮影した。コサギの婚姻色を初めて撮影した。「フィールド図鑑日本の野鳥」に、婚姻色の横顔が描かれている。眼先が梅干しの様な色なので、【深紅の眼先】と表現した。また、足の色は非繁殖期は黄色であるが、婚姻色の足は赤っぽい色である。冠羽があり、飾り羽があることから、成鳥の♂と思われる。
2024	5	21	長潟の田んぼで動植物との一期一会を楽しむ。曇天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は15～15℃、北北西の風5m/s、陽射しは弱い、太陽フレアの紫外線が怖いので、撮影以外は日傘をさす。湿度は82%。長潟の田んぼで、チュウサギ夏羽が湛水田を歩く(横姿)、チュウサギ夏羽が胸を張って湛水田を歩く、チュウサギ夏羽の横顔、チュウダイサギ夏羽が水田を歩く横姿、チュウダイサギ夏羽が水田で首を伸ばして歩く横姿、チュウダイサギ夏羽が小魚をクチバシに挟む、チュウサギ夏羽が水田で小魚をクチバシに挟む、チュウサギとチュウダイサギ、を撮影した。チュウサギとチュウダイサギと一緒に写った画像を見ると、体格が数字以上に大きく違って見える。「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『チュウダイサギは全長80～104cm、チュウサギは全長65～72cm、全長とは、クチバシの先から尾羽の先端までの長さで、足の長さは全長に含めない。』と書いてある。筆者の眼では、体格が倍以上に違うように見える。

西暦	月	日	日誌
2024	5	23	下早通の田んぼで動植物との一期一会を楽しむ。晴天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は24～27℃、南の風2m/s、陽射しは強く、太陽フレアの紫外線が怖いので、撮影以外は日傘をさす。湿度は55%。下早通の田んぼで、チュウダイサギ夏羽が水田で長い首を立てて歩く横姿、チュウダイサギ夏羽の横顔、チュウダイサギ夏羽が水田で長い首を立てて歩く横姿、同じく後姿、を撮影した。チュウダイサギの眼元が緑青色に光っていた。虹彩が婚姻色のルビー色ほどではないが、なんとなく赤っぽく見える。長いクチバシの割には頭部が小さい。首は細く、とても長い。歩くと、「ろくろ首」の様に左右にゆらゆらと揺れている。
2024	5	24	長潟の田んぼで動植物との一期一会を楽しむ。曇天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は25～20℃、南西の風5m/s、陽射しは弱い、太陽フレアの紫外線が怖いので、撮影以外は日傘をさす。湿度は60%。長潟の田んぼで、チュウサギ夏羽の横顔、チュウサギ夏羽が湛水田を歩く(横姿)、田植えをした田んぼ、チュウサギ夏羽が湛水田を歩く前姿、チュウダイサギ夏羽が水田で胸を張って歩く横姿、チュウダイサギ夏羽横顔、チュウダイサギ夏羽が水田で首を伸ばして歩く前姿、チュウダイサギ夏羽が獲物を狙う横顔、を撮影した。チュウサギの夏羽は、「フィールド図鑑日本の野鳥」では、『雌雄同色。嘴は夏羽では黒く、冬羽や若鳥は黄色。幼鳥には飾り羽がない。』と書いてあり、婚姻色の姿図は、眼元が黄色で虹彩が赤い横顔が描かれている。撮影したチュウサギ夏羽横顔は、クチバシの根本は黄色いが眼の周りが「黄緑色」で、チュウダイサギ夏羽の眼元の緑青色と似ている。色彩を姿図だけで表現するのは難しいようである。
2024	5	25	長潟の田んぼで動植物との一期一会を楽しむ。曇天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は16～16℃、北北西の風4m/s、陽射しは弱い、太陽フレアの紫外線が怖いので、撮影以外は日傘をさす。湿度は70%。長潟の田んぼで、チュウサギ婚姻色(赤い虹彩)が湛水田を歩く横姿、チュウサギ婚姻色(赤い虹彩)が溝畔に佇む(前姿)、チュウサギ婚姻色(赤い虹彩)の横顔、チュウサギ婚姻色(赤い虹彩)が溝畔に佇む(横姿)、チュウサギ婚姻色(赤い虹彩)の横顔、チュウサギ婚姻色(赤い虹彩)が湛水田に佇む、を撮影した。チュウサギの赤い虹彩は、「フィールド図鑑日本の野鳥」の婚姻色の姿図に、眼元が黄色で虹彩が赤い横顔が描かれている。撮影したチュウサギは2羽である。クチバシ根元の外鼻孔付近が泥土で覆われているかどうかで識別できる。光線の具合や撮影角度で、虹彩の赤色の度合いが変わるようである。カンムリカイツブリやオオパンの虹彩はルビーの様な真っ赤な色であるが、チュウサギ婚姻色の虹彩は、白目が充血したような赤色である。
2024	5	27	長潟の田んぼで動植物との一期一会を楽しむ。曇天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は21～25℃、南南東の風3m/s、陽射しは弱い、太陽フレアの紫外線が怖いので、撮影以外は日傘をさす。湿度は72%。長潟の田んぼで、チュウダイサギ婚姻色(赤い虹彩)が水田で風に煽られる(前姿)、チュウダイサギ婚姻色(赤い虹彩)が水田で長い首を立てて歩く(後姿)、同じく横姿、チュウダイサギ婚姻色(赤い虹彩)の横顔、チュウダイサギ婚姻色(赤い虹彩)が水田で長い首を伸ばして歩く(横姿)、弁天橋で、カンムリカイツブリ夏羽浮上横姿、を撮影した。チュウサギ婚姻色の虹彩は、白目が充血したような赤色である。チュウダイサギの虹彩も同じく、白目が充血したような赤色である。眼先の緑青色(銅の表面に付着する「サビ」の色)は遠くからでも良く分かる、鮮やかな色である。

西暦	月	日	日誌
2024	5	29	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は17～16℃、北西の風4m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は78%。鳥屋野潟、スイカズラの花、ニホンミツバチの自然巣ハニカム構造、ウマノスズクサ、ウシガエルの死体仰向け、鳥屋野潟、シオカラトンボの未成熟虫、カキツバタ青紫色の花、タニウツギの花、キアシナガバチ巣作りのために木屑を採取、アメンボ幼虫と成虫、カルガモ幼鳥ブルーミング、を撮影した。シオカラトンボは、『日本のトンボ改訂版』に、『成虫の複眼は深い水色。♀は緑色。♀や未成熟の♂は黄褐色だが、成熟♂は白粉を吹き、紫外線を反射する。老熟♀も薄く白粉をおびる。成熟♀で時に♂のように全身に白粉を吹く個体もいる。』と書いてある。シオカラトンボの未成熟虫の撮影画像で、複眼が茶色の♂は未成熟虫である。しかし、複眼が鮮やかな緑色で白粉が中途半端の個体は、腹部が見えないことから♂未成熟虫と命名したが、ひょっとすると白粉を吹いた成熟♀かもしれない。
2024	5	30	長潟の田んぼで動植物との一期一会を楽しむ。曇天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は19～22℃、南南東の風1m/s、陽射しは弱い、太陽フレアの紫外線が怖いので、撮影以外は日傘をさす。湿度は64%。長潟の田んぼで、アオサギが口を開けて舌を出して体温調節、チュウダイサギ飛翔後姿、を撮影した。チュウダイサギは、『フィールド図鑑日本の野鳥』の姿図に、『足は全体に黒い』、『尾羽に飾羽がある』こと、最近、撮影したチュウダイサギの尾羽の飾羽が茶色っぽいことから、チュウダイサギとした。アオサギはクチバシが婚姻色になっていないこと、冠羽が短いことから若鳥である。5月下旬で気温は20℃くらいだが蒸し暑い、しばらくの間、口を大きく開けて舌を出して、深呼吸している様子なので、“体温調節”をしていると考えた。ネット検索では、【アオサギのクチバシから見える長い舌は“舌骨”と呼ばれています。舌骨は、鳥の他にも魚など食べ物を丸飲みにする種族にも存在します。形は違いますが、アオサギだけでなく、カシラダカやカワラヒワ、ヒヨドリなどの小型の鳥にも舌骨があるそうです。木の実や昆虫を丸飲みする際にも、舌骨が役立っているのですね。アオサギはかなり大きな魚でも丸飲みにしてしまいますが、途中で戻すことなく飲み込めるのは、舌にこんな秘密があるからなんですね。舌骨の突起があることで、餌を落とさないように引っかけることができるのかもしれません。舌骨は、アオサギの生態に適応した素晴らしい進化の一部なのでしょう。また、アオサギは体温調節のために口から放熱することもあるようです。このような野鳥の身体の仕組みは、観察することでさらに興味深く感じられますね。】と書いてある。
2024	6	1	長潟の田んぼで動植物との一期一会を楽しむ。曇天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は19～21℃、南西の風4m/s、陽射しは強くないが、太陽フレアの紫外線が怖いので、撮影以外は日傘をさす。湿度は78%。長潟の田んぼで、2羽のカルガモ採餌（後姿）、ゴイサギ婚姻色（黄色い眼先）横顔、ゴイサギ婚姻色（黄色い眼先）横姿、を撮影した。ゴイサギは、『フィールド図鑑日本の野鳥』の姿図に、『ほぼ全国に生息し、積雪の多い地方では夏鳥で、宮古島では冬鳥、その他では留鳥。湖沼、池、河川、海岸、屋敷林などに生息。夕暮れに活動をはじめ、ねぐらや繁殖場から飛び立って採食場へ行き、魚類やカエル、ザリガニなどを捕る。雌雄同色。成鳥の頭部には白い2本の飾り羽がある。幼鳥は全体に褐色で自っぽい斑が密にあり、成鳥羽になるまでは4年かかる。夜間に飛びながら「ゴァ」と鳴く。』と書いてある。姿図から虹彩は赤色である。また、婚姻色の姿図があるが、どこが婚姻色なのかよく分からない。“ゴイサギ婚姻色”でネット検索すると、眼先が黄色くなるらしい。上記の婚姻色の姿図や、撮影画像の横顔を見ると、なんとなく眼先が黄色っぽいので、“ゴイサギ婚姻色（黄色い眼先）”と表示した。2023年1月30日に幼鳥（第1回冬羽）を撮影して以来の一期一会である。

西暦	月	日	日誌
2024	6	3	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は20～21℃、西南西の風1m/s、陽射しは強いので、日傘をさす。湿度は69%。鳥屋野潟、ヤブキリ♀幼虫、ニホンミツバチがナヨクサフジの花の蜜を吸う、セスジイトトンボ♀未成熟虫、アジアイトトンボ♀未成熟虫、セグロアシナガバチ、ウマノスズクサ、ヤマシロオニグモ、鳥屋野潟、シオカラトンボ♀、ニホンカナヘビの横姿、クロイトトンボカップル、コシアキトンボ♂羽化直後、を撮影した。ヤブキリは、『田んぼの生きもの図鑑』に、『体長は45～58mm。出現期は7～9月。本州・四国に分布。体は全体に緑色で、頭から前胸の背面、はねの合わせ目にそって細長い褐色部がある。幼虫は緑色で、背中側の中央線にそって褐色の縦帯がある。メスの産卵器はまっすぐ。幼虫は草はらの花の上で見つかり、成虫は木の上でセミなどを捕らえて食べる。シュリリリ…と鳴く。』と書いてある。撮影画像は、花の上ではなく、葉っぱの上に居た♀の幼虫である。
2024	6	4	ウオーキングの途中で、撮影。曇天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は20～21℃、北西の風2m/s、陽射しは強いので、日傘をさす。湿度は73%。メナダ、メナダの顔、を撮影した。メナダは、『日本魚類館』に、『頭部は縦扁し、舌顎骨部が膨出。濁った内湾や潟湖、河川、汽水域に生息。有明海での産卵期は3月下旬～5月上旬。ボラ科としては分布が北に偏り、北海道では普通種。北海道全域、青森県～山口県の日本海沿岸、岩手県～三重県の太平洋沿岸、瀬戸内海、有明海、千島列島南部太平洋沿岸、サハリン、アムール川、朝鮮半島全沿岸、遼寧省～トンキン湾の中国に分布。』と書いてある。撮影画像は、信濃川左岸上流側の八千代橋歩道から撮ったものである。階段状のコンクリート護岸を行ったり来たりしていた。見たのは1尾だけで、群れてはいなかった。
2024	6	6	長潟の田んぼで動植物との一期一会を楽しむ。晴天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は20～22℃、北の風3m/s、陽射しは強く、太陽フレアの紫外線が怖いので、撮影以外は日傘をさす。湿度は70%。長潟の田んぼで、溝畔に佇むアオサギ(横姿)、ナマズの頭部、を撮影した。ナマズは、『日本魚類館』に、『仔魚には3対のひげがあるが、成長とともに消失して2対になる。左右の鋤骨歯帯はつながる。成長は非常に早く、1歳で10cm以上になる。夜行性の動物食性で、魚類や甲殻類などを貪欲に捕食する。産卵は4～7月の増水期に水に浸かる一時的水域で行われ、水路や水田にまで入り込む。雄が雌に巻き付き、雌は卵を水底にばら撒く。本来は東海地方以西の本州と四国、九州に分布していた。人為的に分布が拡大し、現在では日本全土に分布する。』と書いてある。“魚類や甲殻類などを貪欲に捕食する動物食性”のナマズが溯上していることから、長潟の排水路の水環境は、ナマズの産卵場所として少しは良くなってきたのかもしれない。
2024	6	7	ウオーキングの途中で、撮影。曇天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は19～22℃、北北西の風1m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は82%。信濃川左岸下流で、ササゴイ、信濃川左岸下流景観を撮影した。ササゴイは、『フィールド図鑑 日本の野鳥』に、『夏鳥として九州以北から北海道南部にまで生息。温暖な地方では越冬する。生息環境は湖沼、池、河川、海岸など。ねぐらや繁殖場から採食場へ飛び、川岸や浅瀬などで体をかがめた不動体勢でねらいを定め、魚類やカエルなどを捕る。雌雄同色。成鳥は青みのある黒色で、後頭に伸びるばさばさの冠羽がある。幼鳥は全体に褐色で自づぱい羽縁が密にある。』と書いてある。2023年5月17日に成鳥を、同年8月6日に幼鳥を撮影したが、それ以来の一期一会である。

西暦	月	日	日誌
2024	6	8	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は25～27℃、南東の風1m/s、陽射しが強いので、日傘をさす。湿度は58%。ホソヘリカメムシ、ウマノスズクサ、鳥屋野潟、カンムリカイツブリ(夏羽)浮上横姿、アジアイトトンボ♂、スイレンの花(ピンク色)、モンシロチョウ♂吸蜜、鳥屋野潟公園ビオトープため池、コシアキトンボ♂、クロイトトンボ♂、を撮影した。ホソヘリカメムシは、『日本の昆虫生態図鑑』に、『体長は14～17mm。分布は北海道、本州、四国、九州、南西諸島。出現期は4月～10月。暗褐色で光沢があり背面は褐色の微毛でおおわれ、半翅鞘は顕著な点刻を散布する。前胸背側角は鋭く後方へ突き出る。後腿節はこん棒状で太く内側に鋭い刺列がある。ダイズ。エンドウ・インゲンなどを加害する。』と書いてある。『半翅鞘』は、ネット検索で、『カメムシ亜目の前翅は細長く、基部の半分が革質化(キチン化)して硬くなり、先半分は膜質になっている(半翅鞘)』と書いてある。カメムシ亜目がもつ前翅で、先半分の膜質の翅を“半翅鞘”と言うようだ。
2024	6	9	長潟の田んぼで動植物との一期一会を楽しむ。曇天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は24～25℃、南南東の風3m/s、陽射しは弱い、太陽フレアの紫外線が怖いので、撮影以外は日傘をさす。湿度は59%。長潟の田んぼで、チュウサギ夏羽が水田を歩く横姿、同じく横顔、同じく胸を張って水田を歩く横姿、チュウダイサギ夏羽が水田で首を伸ばして獲物を狙う横姿、同じく横顔、同じく水田で長い首を伸ばして歩く横姿、を撮影した。チュウサギとチュウダイサギの違いが撮影画像から良く分かる。横顔を見ると、口角の位置の違いが分かる。首やクチバシの長さが違うので、歩く姿勢が違う。この2羽は、同じ田んぼで採餌をしているが、縄張り争いはしていないようだ。お互いに関心が無いような素振りで一心不乱に餌を捕っていた。先にチュウサギが筆者の姿に驚いて飛び去った。しかし、チュウダイサギは悠々と、しばらくの間、チュウサギが居た場所で採餌を続けた。留鳥なので、日本人に慣れているようだ。ちなみに、チュウサギは夏鳥で南方の国から渡来してまだ数か月である。
2024	6	11	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は24～26℃、西南西の風2m/s、陽射しは強くないが、日傘をさす。湿度は74%。シマアシブトハナアブ、ルリシジミ♂、ツバメ♀、鳥屋野潟、アカミガメ幼体甲羅干し、シオカラトンボ♂未成熟虫、ハナショウブ(紫色の花)、コシアキトンボ♂、オオヨシキリ♂さえずり、を撮影した。オオヨシキリは、『フィールド図鑑日本の野鳥』に、『夏鳥。九州以北。南西諸島では旅鳥。生息環境は、平地から山地のアシのある河原、草原、湿地、湖沼など。繁殖期はつがい、または一夫多妻で生活し、昆虫類やクモ類などを食べる。雌雄同色。頭からの上面は灰褐色。胸には細かい黒褐色の縦斑がある。『ジュツ』などと鳴き、繁殖期には『ギョギョギョギョシギョギョシケツケツケツ』と鳴く。オオヨシキリの口の中は赤く、コヨシキリは黄色い。』と書いてある。ヨシハラの同じ小灌木で、1時間以上、『ギョギョギョギョシギョギョシケツケツケツ』とさえずっていた。
2024	6	13	長潟の田んぼで動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は28～30℃、南南西の風2m/s、陽射しは強く、太陽フレアの紫外線が怖いので、撮影以外は日傘をさす。湿度は62%。長潟の田んぼで、チュウサギ夏羽がコンクリート畦畔に佇む横姿、チュウサギ夏羽が畦畔に佇む横姿、を撮影した。2羽いたが、どちらも婚姻色ではなかった。25mくらい接近したら、グルーミングを止め、撮影中の筆者の様子を伺っていたが、撮影を止めて、顔を上げた途端に、2羽とも同時に飛び立った。西方へ飛翔して旋回し、高速道路に近い排水路溝畔へ舞い降りた。並んで、こちらを向いていることから、2羽は、つがいかも知れない。筆者の様子を遠巻きに、伺っているように見えた。

西暦	月	日	日誌
2024	6	15	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は30～30℃、南の風2m/s、陽射しは強く、日傘をさす。湿度は55%。鳥屋野潟、カワウ♀遊泳見返り、オオヨシキリ♂さえずり、鳥屋野潟、ウマノスズクサ、ヒメギス♂幼虫、を撮影した。オオヨシキリは、ヨシハラの同じ小灌木で、1時間以上、「ギョギョギョギョシギョギョシケツケツケツ」とさえずっていた。鳥屋野潟岸辺で、オオヤマトンボの飛翔を、自然生態園の湿地で、アオヤンマの飛翔を確認した。ビオトープ池付近で、グライダーの様に直線を描いて飛ぶウチワヤンマも確認した。残念ながら筆者は、どこかにとまってくれないと撮影できない、未熟者である。
2024	6	17	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は25～27℃、西南西の風7m/s、陽射しは強く、風も強いが、日傘をさす。湿度は69%。飛行機雲、オオヨシキリ♂さえずり、ウマノスズクサ、鳥屋野潟、カンムリカイツブリ夏羽横姿、清五郎排水路、ドクゼリの花、コシアキトンボ♂未成熟虫、を撮影した。オオヨシキリは今日も、同じ場所の小灌木で、暑い中、「ギョギョギョギョシギョギョシケツケツケツ」とさえずっていた。コシアキトンボが大量発生している。「日本の昆虫生態図鑑」に、『出現期は6月～9月。本州、四国、九州、南西諸島の平地から丘陵地の池沼などに生息する。』と書いてある。
2024	6	19	信濃川左岸河口付近と日本海浜辺で動植物と景観の一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は24～26℃、西南西の風6m/s、陽射しは強く、日傘をさす。湿度は69%。カワウ♂がカマス(魚)を捕食、カマスを飲み込んだカワウ♂、日本海、突堤、太公望、を撮影した。カマスは「日本魚類館」に、『アカカマスは、沿岸性が強く、日本で最も普通にみられるカマス類。カマス科の中で北方まで分布し、日本海にも多い。産卵期は夏、相模湾・紀伊水道・周防灘で6～7月。雌は1歳で尾叉長27.4cm、2歳で29.6cm、3歳で31.0cmになる。周年漁獲されるが、夏季は沿岸浅所に多く、冬季はやや沖合の深所に移動する。北海道～九州南岸の日本海。東シナ海・太平洋沿岸……』と書いてある。また、姿図が載っており、尾鰭付近の形態と色彩から、カワウ♂が捕食したのは、カマスと考えた。カワウ♂が浮上した時は、クチバシと直角にカマスの腹を銜えていたが、頭を振った瞬間、カマス頭部を飲み込んで、尾鰭付近がクチバシからはみ出していた。そして、数秒でカワウの黒い首が魚の形に膨らんだ。カワウは獲物を口内の奥に送りこむ機能をもつ舌骨があることから、捕まえた魚は逃がすことは無いのだろう。
2024	6	20	信濃川左岸で動植物と景観の一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は26～29℃、南の風2m/s、陽射しは強く、日傘をさす。湿度は51%。ネジバナの花(紅紫色)、カワウ♂横顔、カワウ♀横顔、を撮影した。カワウは「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『雌雄同色。成鳥は全体に黒く、青紫の光沢がある。幼鳥は腹部が白っぽい。類似種との識別で、ウミウの口角は顔の白い部分にとがって入る。……』と書いてある。また、姿図が載っており、眼元クチバシの色は、婚姻色(♂)が灰色っぽく、婚姻色にならない成鳥は黄色で描かれている。撮影したカワウは婚姻色ではないが、眼元クチバシの色が、灰色(黒っぽい)♂と黄色の♀で、違いがはっきりしていて、わかりやすい。
2024	6	21	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は24～26℃、北の風3m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は75%。鳥屋野潟、鳥屋野潟、コフキトンボ♀未成熟横姿、ヤマトシジミチョウ♀、モンシロチョウ♂吸蜜、アジサイ(紫陽花)、コフキトンボ♀未成熟後姿、を撮影した。コフキトンボは、「日本のトンボ改訂版」に、『全国に広く分布するが、地域によつては減少している。平地～丘陵地の抽水植物の繁茂する開放的な池沼や河川の淀みに生息。卵期間1～2週間程度、幼虫期間3か月～1年程度(1年1～2世代)。幼虫で越冬する。シオカラトンボを一回り小さくしたような中型のトンボ。黄色の地に黒条があるが、♂は羽化後すぐに白粉を吹く。♀には白粉を吹く個体と、吹かない個体の2型がある。成虫が増えるのは6月～9月初旬の期間。』と書いてある。未成熟個体が、あちこちの抽水植物等の葉などにとまるっている。コシアキトンボよりも目立つようになった。

西暦	月	日	日誌
2024	6	22	ウオーキング途中の信濃川右岸でメナダとの一期一会。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は26～28℃、南南西の風3m/s、陽射しは強く、日傘をさす。湿度は69%。メナダの群れ(20尾程度)、を撮影した。信濃川下流河川事務所のホームページによると、メナダとボラが信濃川汽水域にすみ、海と川を行き来しているらしい。メナダとボラを見分ける方法は眼の色である、ボラの眼は白く、メナダの眼はオレンジ色である。撮影画像は体長20～30cmなので幼魚かも知れない。「日本魚類館」によると、標準体長は38cmである。
2024	6	24	長湊の田んぼで動植物との一期一会を楽しむ。曇天、長袖ワイシャツ、シューズで出かける。気温は24～26℃、西南西の風7m/s、陽射しは弱い、湿度は89%で蒸し暑い。長湊の田んぼで、キジ♂非繁殖期、チュウサギ夏羽クチバシの黒色が少ない後姿、同じく横顔、同じく横姿、支線排水路、田植えをした田んぼ、を撮影した。キジ♂は、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『繁殖期はつがい、または一夫多妻で生活し、非繁殖期は雌雄別々に小群で生活する。雄は紫色や緑色などの光沢がある羽衣で艶やか。非繁殖期の肉垂は小さい。』と書いてある。『肉垂』は『にくすい』と読むが、♂の顔の赤い部分である。撮影したキジ♂は、赤い部分が小さく、繁殖期の『紫色や緑色などの光沢がある羽衣で艶やか』な姿ではなかった。チュウサギ夏羽は、姿図では、目先までクチバシが真っ黒であるが、撮影したチュウサギは、上クチバシは半分くらい黄色(オレンジ色)である。下クチバシの底面も半分くらい黄色(オレンジ色)である。飾羽のない幼鳥～若鳥だからか？、クチバシの色は個体差があるのか？、…、…、理由は不明である。腹が減っている様子で、無心になって、ドジョウなどの小魚を捕食していた。1羽だけの単独行動で、付近に他のチュウサギやチュウダイサギはいなかった。
2024	6	27	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は24～26℃、北東の風1m/s、陽射しが強いので、日傘をさす。湿度は59%。鳥屋野潟、ウマノスズクサ、コスズメ蛾幼虫、カンムリカイツブリ夏羽横姿、鳥屋野潟、シオカラトンボ♂未成熟虫、ウチワヤンマ♂横姿、ウチワヤンマ♂後姿、ハンゲショウの花(花弁も萼も無い)、コムラサキ、コフキトンボ♀未成熟後姿、ハグロトンボ♀、コチドリ横姿、を撮影した。コムラサキは、「日本の昆虫生態図鑑」に、『北海道、本州、四国、九州に分布。出現期は6月～10月。オスの翅表は光線の方角によつて紫色に輝くがメスにはこれがない。一般的に褐色型が広く分布するが黒色型が関東以西に局地的に現れる。飛び方は軽快敏速に滑空し、ヤナギ類やコナラ・クヌギの樹液に集まる。』と書いてある。『飛び方は軽快敏速に滑空』するので、被写体として捉えることが難しい。2014年7月26日～今日まで5回しか撮影していない。
2024	6	28	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は24～25℃、東北東の風2m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は65%。鳥屋野潟、ヒメギス♀幼虫、ニホンカナヘビの横姿、ヤマシロオニグモ♀、コガネグモ♀営巣、ウチワヤンマ♂横姿、イエユウレイグモ、サキグロムシヒキ♀、アマガエル、を撮影した。サキグロムシヒキは、「昆虫探検図鑑1600」に、『体長は20～26mm。』と書いてある。初めて、撮影した。ハエ目ムシヒキアブ科ムシヒキアブ亜科は、トラフムシヒキ、マガリケムシヒキの2種を撮影していたが、ようやく3種目のサキグロムシヒキを撮影することができた。

西暦	月	日	日誌
2024	6	29	長潟の田んぼで動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は26～27℃、西の風1m/s、陽射しが強いので、日傘をさす。湿度は73%。支線排水路、小魚を飲み込んだアオサギ、アオサギが(良く見ようと)首を伸ばして歩く、溝畔に佇むアオサギ横姿、ケラの水死体、を撮影した。ケラは、『田んぼの生きもの図鑑』に、『体長30～35mm。出現期は1年中。日本全土に分布。体は茶褐色から暗褐色で、腹面は黄褐色。前あしは左右に動き、モグラの手のようにギザギザした形をしている。上ばねは短く、腹部が半分はみ出して見える。普段は田んぼや畑、草地の土中で穴を掘って生活している。夜、街灯や店の灯に飛んできくこともある。泳ぎもうまい。ケラの学名はGryllotalpaで、『Gryllo-』はコオロギ、『talpa』はモグラという意味で、まさにモグラコオロギ。ケラはまるで地中で鳴いているような地面に響ひびき渡わたる声で、ロー・ロー・ロー…と鳴きます。昔から農家の人は、これを「ミミズが鳴いている」と言っていたようです。しかしミミズは鳴かないので、その正体はケラなのです。』と書いてある。『泳ぎもうまい。』と書いてあるが、筆者がベンチフリューム用水路で撮影したケラは、水面に浮かんで動かなかった。上流の道路横断暗渠で水没して窒息したのか？水死体になった原因は明らかではない。
2024	7	1	ウオーキング途中の信濃川右岸でウミネコとスズメ幼鳥との一期一会。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は23～23℃、西に南西の風8m/s、陽射しは弱い風が強い。紫外線の熱を感じるたびに日傘をさした。湿度は94%。ウミネコ夏羽後姿、スズメ幼鳥、ウミネコ幼鳥第2回夏羽を撮影した。ウミネコ幼鳥は、『フィールド図鑑日本の野鳥』に、『幼鳥の第1回冬羽と第2回冬羽が姿図に描かれていた。また成鳥の冬羽と夏羽の違いは頭上から後頸にかけて褐色と白色の違いで描かれ、4年で成鳥になる。』と書いてあることから、撮影した幼鳥は不鮮明な画像であるが、第2回夏羽とした。頭上から後頸にかけて白っぽいこと、背、腰、尾の羽は第2回冬羽とほぼ同じ色であること、が主な理由である。
2024	7	2	長潟の田んぼで動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は24～26℃、南西の風4m/s、陽射しは弱いので、日傘は不要であった。湿度は80%。カワラヒワ♀見返り、支線排水路、サカマキガイ、モンシロチョウカップル交尾、アメリカザリガニ、を撮影した。カワラヒワは、『フィールド図鑑日本の野鳥』に、『雄の頭部は緑色がかった灰褐色で、背などは灰茶褐色。雌の頭部は淡い。姿図では雄の眼元が黒っぽく、雌は淡い。』と書いてあることから♀と同定。サカマキガイは殻が左巻きで触角が細長いことから同定。アメリカザリガニは、殻が鮮やかに赤く、ハサミが細長いことから同定。なお、日本にはウチダザリガニ、アメリカザリガニ、ニホンザリガニが生息している。
2024	7	4	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は25～27℃、西南西の風6m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は93%。時折強い風が吹く。工事の看板、シオカラトンボ♂未成熟虫、アカミガメが上陸して迷子？、ウチワヤンマ♂横姿、ウマノスズクサ、ガガブタの花(白)、ウチワヤンマ♂横姿、ニホンスッポン、ニホンスッポンの頭部、マガリケムシヒキ♂、鳥屋野潟、天気晴朗なれど波高し、を撮影した。ニホンスッポンは、『野外観察のための日本産爬虫類図鑑第3版』に、『甲長は15～40cm。自然分布は本州の関東、信越地方より西の本州、四国、九州、中国、台湾、朝鮮半島。日本では甲羅が丸い在来集団と細長い外来集団の生息が報告されている。背甲には亀甲がなく、薄い皮で覆われている。首が長く伸び、吻も長く先端に鼻孔を有し、水かきが発達している等独特な形態を持つ。主に魚や甲殻類、貝類を食べ、6～8月に8～50個の卵を産む。』と書いてある。初めて、撮影した。

西暦	月	日	日誌
2024	7	6	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は27～28℃、南南西の風4m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は79%。風はそれほど強くない。鳥屋野潟、サツマノミダマシ、ウマノスズクサ、ウチワヤンマの横姿、ガガブタの花(白)、風切り羽を損失したカワラヒワの後姿、アオサギ若鳥が(良く見ようと)首を伸ばして歩く(横姿)、を撮影した。サツマノミダマシは、『日本のクモ』に、『体長:♂7.5～9mm.♀8～11mm。出現期は6～8月。分布:本州、四国、九州、南西諸島。里山～山地に生息。樹林地の周辺、草原、林道などの樹間、草間に垂直の正常円網を張り中心に止まる。昼間は網の一端の枝や葉裏に潜んでいる。腹部は上面、下而ともに緑色で、前方から側面にかけて黄色の線がある。和名は京都府と福井県の一部で呼ばれているサツマの実(ハゼの実)に似ていることから付けられている。』書いてある。筆者に見つかったカワラヒワは右側の風切り羽が損失して飛べないので、地面をピョンピョン跳ねて草藪の中に逃げ込んだ。どういうわけで損失したのか?不明である。
2024	7	7	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は30～31℃、南西の風5m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は68%。風はそれほど強くない。ヒメスズメバチ、鳥屋野潟、コガネグモ♀餌捕獲、ガガブタの花(白)、アシナガグモ、を撮影した。ヒメスズメバチは、『日本の昆虫生態図鑑』に、『体長24～37mm。出現期は4～10月。分布:本州、四国、九州、沖縄。オオスズメバチに次いで大型、体形はややスマート。腹部は黄色と黒色の縞模様をしているが、本種のみが腹部先端が黒色なので他種とは容易に見分けられる。』と書いてある。
2024	7	10	ウォーキング途中の信濃川右岸でアオスジアゲハとウミネコに一期一会。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は25～24℃、南南西の風4m/s、陽射しは弱く、時々時雨雨で、雨傘をさした。湿度は94%。アオスジアゲハの吸水、ウミネコ夏羽横顔、ウミネコ夏羽横姿、を撮影した。アオスジアゲハは、『日本のチョウ増補版』に、『【食草】クスノキ、タブノキ、ヤブニツケイなど(クスノキ科)。【生息環境】森林・公園 平地～丘陵地の照葉樹林が本来の生息地。食草が生える社寺林、街路樹、公園などにも好む。【行動】日中、高所を敏速に飛翔し、ヒメジョオン、ヤブガラシなど各種の花を訪れる。♂は吸水性が強い。【生息状況・保全】食草が街路樹としてよく植栽され、都市部では普通に見られるチョウとなっている。』と書いてある。『♂は吸水性が強い』ことから、撮影したアオスジアゲハは♂と同定した。なお、ネット検索によると、『アゲハチョウの雄は集団で吸水行動することが知られています。吸水行動によってアンモニアを窒素源として摂取し筋肉や精子の生産に役立っている』らしい。
2024	7	11	ウォーキングの途中、新潟県スポーツ公園でトンボとの一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は23～25℃、北西の風4m/s、陽射しは弱く、時々時雨雨なので、雨傘をさす。湿度は92%。セスジイトトンボ♀(黄緑色)、セスジイトトンボ♂、アジアイトトンボカップル交尾、を撮影した。セスジイトトンボは、『日本のトンボ改訂版』に、『♂全長27～36mm。♀全長28～37mm。産卵期5月下旬～10月下旬。【生息環境】平地～丘陵地の、浮葉植物や沈水植物の繁茂する池沼や、流れの緩やかな河川中～下流域、用水路。【生活史】卵期間1～3週間程度、幼虫期間2か月～1年程度(1年で1～多世代)。幼虫で越冬する。【分類】国内の種では、オオイトトンボおよびムスジイトトンボと近縁。【備考】近年、各地で減少傾向にある。』と書いてある。形態が、近縁種に似ていること、個体差があることから、数枚の撮影画像だけでは、同定は難しい。
2024	7	12	ウォーキング途中の柳都大橋と信濃川左岸でウミネコとネムノキに一期一会。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は24～24℃、東北東の風1m/s、陽射しは弱く、帰り際に時雨、雨傘をさす。湿度は84%。ウミネコ夏羽横顔、ウミネコ夏羽横姿、ネムノキを撮影した。ネムノキは、『自分で採れる薬になる植物図鑑』に、『7～8月に咲く花。紅色の糸状のものは雄しべ。【使用法】関節炎、腰痛、利尿、むくみ、強壮に、乾燥させた樹皮10～15gを1日量とし、カップ3の水で半量になるまで煎じて3回に分けて服用する。関節炎や腰痛には、同様の煎じ液で患部を冷湿布してもよい。』と書いてある。

西暦	月	日	日誌
2024	7	13	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は24～26℃、北北東の風1m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は74%。風はほとんどない。ウミネコ夏羽後姿、岸辺に佇むアオサギ若鳥、鳥屋野潟、ニホンカナヘビ、セグロアシナガバチ、キタテハ♀、コガネグモ♀営巣、2羽のカンムリカイツブリ、鳥屋野潟、ウチワヤンマ♂横姿、ガガブタの花(白)、カルガモ幼鳥6羽、を撮影した。キタテハは、「日本のチョウ増補版」に、夏型の羽裏側の画像♂(淡色で濃いめ)と♀(淡色で薄め)が掲載されていたことから、♀と同定した。
2024	7	14	ウォーキング途中の柳都大橋と信濃川左岸でウミネコとアオサギに一期一会。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は25～26℃、北の風3m/s、陽射しは弱い、撮影以外は日傘をさす。湿度は81%。ウミネコ夏羽横顔、深水に佇むアオサギ後姿、アオサギ横顔、を撮影した。アオサギは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『生息環境:海岸、干潟、湖沼、河川、水田、湿地など。魚類など採食し、動物質なら何でも食べる。』と書いてある。信濃川河口付近の汽水域で餌を探しているアオサギを撮影したのは初めてである。
2024	7	16	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は26～30℃、南東の風3m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は78%。風はほとんどない。鳥屋野潟、ウマノスズクサ、鳥屋野潟、ウチワヤンマ♂横姿、ゴマダラカミキリ後姿、ゴマダラカミキリ前姿、ハグロトンボ♂、ガガブタの花(白)、キイトンボ♂、を撮影した。ゴマダラカミキリは、「日本の昆虫生態図鑑」に、『体長:25～35 mm。分布:北海道、本州、四国、九州、南西諸島。出現期は6月～9月。体色は黒色で光沢がある。上翅には白い小紋を5本の帯状に装う。ミカン類の果樹、街路樹、庭木などの根元に集まり加害する、大害虫として有名なカミキリ。』と書いてある。ちょうど、石碑に登っていたところを撮影した画像である。キイトンボは「日本のトンボ改訂版」に、『成虫の出現期は6月～10月初旬。【生息環境】平地～山地の抽水植物の繁茂する池沼や湿地。放棄水田や土砂採取跡地に生じた湿地でもみられる。【生活史】卵期間1～3週間程度、幼虫期間半年～1年程度(1年1～2世代)。幼虫で越冬する。【形態】♂♀とも全身が明るい黄色。♂は成熟すると胸部が緑色になる。♀は成熟すると腹部も緑色みの強くなる個体が見られる。♀はベニイトンボやリュウキュウベニイトンボにやや似るが、前胸の形が異なる。』と書いてある。今年になって、初めて撮影した。
2024	7	17	ウォーキング途中の白山公園の蓮池でハスやガマ、トンボと一期一会。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は25～28℃、南南東の風2m/s、陽射しは弱い、撮影以外は日傘をさす。湿度は95%。ハスの花、ハスの蕾、看板、ガマ、オオシオカラトンボ♂、ハスの果実、アキアカネ♂未成熟虫、を撮影した。アキアカネは、「日本のトンボ改訂版」に、『成虫の出現期6月下旬～12月上旬。【生息環境】平地～山地の水田、池沼、湿地など。【生活史】卵期間半年程度、幼虫期間3～6か月程度(1年1世代)。卵で越冬するが、飼育下では1か月ほどで孵化することもある。【形態】♂は成熟すると腹部が赤化する。♀は腹部が淡褐色の個体と背面が赤化する個体とがいる。同属種とは、胸部斑紋、頭部斑紋、脚の色で区別する。【分類】国内の種ではタイリクアキアカネとごく近縁で、ミトコンドリアDNAでは区別できない。種間雑種もしばしば記録され、雑種♀から、次世代の成虫が得られた例もある。【備考】「赤とんぼ」として知られ、日本人に最もなじみの深いトンボの一つだが、近年は全国各地で激減している。』と書いてある。ハスの花は、撮影画像の“看板”に【中尊寺 奇跡のハス】について『岩手県平泉町の世界遺産・中尊寺金色堂に安置されている藤原泰衡の供養の品のひとつとして発見されたハスの種子を平成10年(1998年)に甦らせたものです。』と書かれている。

西暦	月	日	日誌
2024	7	19	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は28～31℃、南の風2m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は83%。風はほとんどない。鳥屋野潟、ウマノスズクサ、鳥屋野潟、シオヤアブ♂後姿、ルリシジミ、カンムリカイツブリ夏羽前姿、鳥屋野潟、ウチワヤンマ♂横姿、シオヤアブ♀横姿、シオカラトンボカップル交尾、コカマキリ幼虫、ガガブタの花(白)、チョウトンボ、モンシロドクガ、を撮影した。モンシロドクガは、『蛾の生態標本図鑑』に、『開長:♂約28mm、♀約34mm。分布:北海道、本州、四国、九州。翅は純白で前翅の後縁部に黒褐色の紋が2つある。紋は個体変異がある。年2～3化、5～9月に出現。寄主植物はバラ科、クワ科、ブナ科、マメ科など広食性。』と書いてある。初めて撮影した。
2024	7	21	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は30～32℃、南の風2m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は74%。風はほとんどない。岸辺に佇むアオサギ、鳥屋野潟、ウチワヤンマ♂横姿、オオカマキリ、アカミガメ産卵、ショウジョウトンボ♂、チョウトンボ♂、アオダイショウ頭部、アオダイショウ、を撮影した。アオダイショウは、『野外観察のための日本産爬虫類図鑑第3版』に、『日本固有種。北海道、本州、四国、九州とその周辺の島々、国後島、奥尻島、佐渡島伊豆大島～神津島、隠岐、杣岐、対馬、五島列島、薩南諸島に分布する。平地や丘陵地等人の活動範囲に多く生息し、特に田んぼや畑、民家周辺で最も多く目撃されている。木登りが上手で、「クライミングキール」と呼ばれる腹板の両端にある鱗を引っ掛けるようにして樹木や垂直な壁等を登る。木登りは樹洞にすみつく哺乳類や鳥類の雛を狙ったりする目的で行う。農作業小屋の天井や養鶏場にすみついていることも多く、かつては民家に普通にみられ、穀物をかじるネズミを食べてくれると重宝(放置)されていた。』と書いてある。今年、初めて撮影した。非常におとなしく、傍に近づいても驚かず、人間慣れしているように見える。
2024	7	22	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は29～30℃、西南西の風7m/s、陽射しは弱い、時々突風で日傘が飛ばされそうになる。湿度は81%。カワセミ♀幼鳥横姿、ウスバカミキリ♀、ガガブタの花(白)、ショウジョウトンボ♂、鳥屋野潟に強風が吹く、を撮影した。ウスバカミキリは、『世界文化生物大図鑑 昆虫Ⅱ』に、『体長30～50mm。6月～8月に出現し、クヌギ、ハンノキなどの樹木の空洞内に多く、灯火にもよく飛来する。日本全土に分布。』と書いてある。ネット検索で、雌は産卵時に卵管が突出することから、「♀」と同定した。初めて撮影した。画像は、何かに衝突して道路に横たわっていた姿を撮影したものである。まだ、足をピクピクと動かしていたので、枯れ枝を使って道路わきに移動した。
2024	7	23	ウオーキング途中の白山公園の蓮池でハス、ヤンマに一期一会。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は32～33℃、南西の風3m/s、陽射しは強く、撮影以外は日傘をさす。湿度は68%。ハスの花、ギンヤンマ♂、を撮影した。ギンヤンマは、『日本のトンボ改訂版』に、『♂:全長67～83mm' ♀:全長65～84mm' 成虫の出現期6月～10月。【生息環境】平地～丘陵地の開放的な池沼・河川の淀みや人工池など。【生活史】卵期間1～3週間程度、幼虫期間3～8か月程度(1年1～多世代)。幼虫で越冬する。八重山諸島では1年中成虫がみられる。【形態】♂は腹部第2～3節に水色の斑紋をもつ。♀は斑紋が黄緑色の個体が多いが、♂のように水色の個体もみられる。各地でもっとも普通にみられるヤンマ科の一種。』と書いてある。今年、初めて撮影した。

西暦	月	日	日誌
2024	7	24	ウォーキング途中の柳都大橋と八千代橋でウミネコとコサギに一期一会。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は28～24℃、南西の風7m/s、陽射しは弱く、帰宅まで雨降らず、日傘をさす。湿度は78%。ウミネコ幼鳥第1回夏羽、ウミネコ夏羽横姿、コサギ夏羽の後姿、コサギ夏羽の後姿見返り、コサギ夏羽の横顔を撮影した。コサギは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『季節・分布：留鳥または夏鳥として、本州以南に生息する。南西諸島では主に冬鳥。環境：河川、池、湖沼、水田、湿地、干潟など。行動：他のサギ類に混じって、コロニーをつくって繁殖する。非繁殖期は群れで行動することが多く、カワウが追い出した魚を群れで横取りしたりする。1羽では足指を水中で震わせて、魚を物陰から追い出して捕らえたりする。形態：雌雄同色。嘴は周年黒い。鳴き声：「ガァー」などと鳴く。類似種との識別：足は足指だけが黄色いことで識別できる。』と書いてある。新潟県では準絶滅危惧(NT)に指定されている。筆者は30m位の距離を保って撮影したが、警戒心が強いのか？、数回のシャッターで、上流へ飛び去ってしまった。
2024	7	26	ウォーキング途中の白山公園の蓮池等でハス、メダカ、トンボと一期一会。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は29～32℃、南西の風4m/s、陽射しは弱い、撮影以外は日傘をさす。湿度は82%。ハスの花、キタノメダカ、ショウジョウトンボ♂、ショウジョウトンボ♀、を撮影した。キタノメダカは、「日本魚類館」に、『本種は遺伝的研究により定義された“北日本集団”と“ハイブリッド集団”に相当し、2012年に新種として記載されたもの。京都府の由良川水系ではミナメダカと同所的に生息し、生殖的な隔離の成立が確認されている。外観はミナメダカよりも日本海をはさんだ対岸に分布する韓国の東韓集団に類似する。体長は雄3.2cm、雌3.3cm。一般的な生態はミナメダカと同様と考えられる。青森県での繁殖期は5月初旬から8月。7～8月の間に前年生まれの個体は寿命を終える。日本固有種で、下北半島、奥入瀬川水系、福島県郡山、佐渡島、津軽半島から兵庫県円山川水系までの本州日本海側、兵庫県浜田(岸田川水系)に分布。。平野部の河川、池沼、水田、用水路、塩性湿地など、止水域あるいは秒速15cm以下の緩やかな流れで、水草が繁茂した場所に生息。』と書いてある。2012年以前は、種名は”メダカ”で、学名はOryzias latipes(オリジ阿斯・ラティペス)でした。Oryzias はイネの学名 Oryza sativa に由来し、latipes はラテン語で latus (幅広い) pes (足、つまり尻ビレ) という意味です。つまり『稲が生育する水田の魚』という解釈になります。なお、新潟県に生息するメダカは、全て『キタノメダカ』とは限りません。ミナメダカが人為的に持ち込まれている可能性があるからです。
2024	7	29	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は29～31℃、南西の風6m/s、陽射しは弱い、時々突風で日傘が飛ばされそうになる。湿度は86%。キヒゲアシブトハナアブ、アブラゼミ、鳥屋野潟に強風が吹く、アカミガメ幼体の甲羅干し3匹、ガガブタの花(白)、オオカマキリ若齢虫、を撮影した。キヒゲアシブトハナアブは、文献を持ち合わせていない。ネット検索で、似た様なハナアブがキヒゲアシブトハナアブであった。今までに、清五郎小公園と自然生態園で2021年に2画像撮影しているが、文献が無いことから、種名には自信がない。、
2024	7	30	ウォーキング途中の白山公園の蓮池でハス、メダカ、トンボに一期一会。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は28～29℃、西南西の風6m/s、陽射しは弱い、時々突風で日傘が飛ばされそうになる。湿度は84%。ハスの花、ハスの蕾、ハスの花托、キタノメダカ、ショウジョウトンボ♂、を撮影した。ハスは、「自分で採れる薬になる植物図鑑」に、『インド原産で日本へは古く、大陸から渡来したとされる多年草植物。根茎はレンコンとして愛用されている。薬としての効用は、①滋養、強壮(果実)、②下痢(根茎)、③扁桃炎、口内炎、歯周病(根茎)、④湿疹、かぶれ、あせも(根茎)。使用法は……。』と書いてある。ハスの蕾、花、花托、それぞれに独特な個性があり、心を奪われる。蕾は愛らしく、開花すると、その美しさを際立たせ、華やかである。ネット検索では、おもな花言葉は「清らかな心」「神聖」「休養」「沈着」らしい。

西暦	月	日	日誌
2024	7	31	柳都大橋と信濃川左岸で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は28～27℃、北北西の風4m/s、陽射しは弱く、帰り際に時雨、雨傘はさす。湿度は82%。ウミネコ夏羽横姿、信濃川左岸上流景観、信濃川左岸下流景観、アオサギ横姿、アオメアブを撮影した。アオメアブは、『昆虫探検図鑑1600』に、『体長:20～29mm。時期:5～10月。分布:北海道、本州、四国、九州、沖縄。黄褐色で、緑色の複眼が美しい。脚は黒色で、脛節が鮮やかな黄褐色。草原や林縁で見られ、甲虫やハエ、アブなど、他の昆虫を捕らえて体液を吸う。』と書いてある。雌雄の区別は尾部(形状)と体格(♀>♂)で見分けるらしいが、翅に隠れて尾部が見えないことから、性別不詳の画像である。
2024	8	1	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は27～29℃、南の風1m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は81%。不明の蛾、ニホンカナヘビ幼体、シオカラトンボ♂未成熟虫、口を開けるウミネコ、カンムリカイツブリ夏羽浮上横姿、コシアキトンボ♂後姿、カンムリカイツブリ夏羽浮上横姿、編まれたヨシの葉、ひまわりの大きな花、スイレンの花、鳥屋野潟、アブラゼミ横姿、を撮影した。編まれたヨシの葉は、ネット検索によると、「オオヨシキリが縄張りを主張する為のものだ。」と書いてあるが、本当だろうか？ オオヨシキリは、ヨシの葉や茎を、細長くちぎって巣を作るが、わざわざ巣の近辺にヨシの葉を数か所編んで『縄張りを主張』するのだろうか？、鳥屋野潟のヨシ原はオオヨシキリで超満員になることは無さそうで、『縄張りを主張』するのは「さえずり」だけで十分のようである。
2024	8	3	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は30～32℃、南西の風1m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は75%。チュウサギ幼鳥前姿、鳥屋野潟、ニイニイゼミの死体、鳥屋野潟、チョウトンボ♂、ハネナガイナゴ、オオシオカラトンボ♂、サルスベリの花紅紫色、を撮影した。ハネナガイナゴは、『日本の昆虫生態図鑑』に、『体長21～40mm。分布は本州、四国、九州、南西諸島。出現期8月～11月。体色は緑色から黄緑色で光沢がある。前翅は後膝を越え、翅端に向かって幅広くなる。メスの腹部第2節側面にはっきりとした刺がある。水田やその周辺、湿地性の草地に生息し、イネ科植物を食害し、よく飛ぶ。』と書いてある。『メスの腹部第2節側面にはっきりとした刺がある』らしいが、筆者が撮影した画像では確認できない。しかし、尾部の形状が♂に似ているようだ。
2024	8	4	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は31～32℃、東の風1m/s、陽射しが強いので、日傘をさす。湿度は74%。鳥屋野潟、セスジイトトンボ♀(黄緑色)、カンムリカイツブリ夏羽横姿、鳥屋野潟、ガガブタの花、チュウサギ幼鳥前姿、岸辺で餌を探すアオサギ横姿、を撮影した。チュウサギ幼鳥は、『フィールド図鑑日本の野鳥』に、幼鳥の姿図が描かれており、『嘴は黄色く先端は黒い。背と胸の飾り羽はない。』と書いてあることから、幼鳥と同定した。
2024	8	5	2016年の鳥類を更新訂正(キレンジャクまで)。
2024	8	6	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は28～28℃、北北東の風3m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は84%。ウミネコ夏羽前姿、カンムリカイツブリ夏羽横姿、岸辺に佇むチュウダイサギ若鳥横姿、岸辺に佇むアオサギ前姿、ウマノスズクサの花、鳥屋野潟、オスクロハエトリ(蜘蛛)♂、イチモンジセリ、チョウトンボ♂、ガガブタの花、を撮影した。チュウダイサギ若鳥は、『フィールド図鑑日本の野鳥』に、『形態:雌雄同色。嘴は夏羽では黒く、冬羽や若鳥では黄色。類似種との識別:チュウサギと似ているが、本種の口角は眼より後ろまで、チュウサギでは眼の下まで。』と書いてあることから、チュウダイサギ若鳥と同定した。
2024	8	7	2016年の鳥類を更新訂正(クロツグミまで)。

西暦	月	日	日誌
2024	8	8	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は27～29℃、北の風2m/s、陽射しが強く、日傘をさす。湿度は78%。鳥屋野潟が風で鏡の様な水面にわた雲が映る、ウンモンオオシロヒメシヤク、ササゴイ幼鳥見返り横姿、ササゴイ幼鳥横姿、ウmanoszukusaの花、鳥屋野潟、コフキトンボみ、ウチワヤンマみ横姿、チュウダイサギ若鳥の横顔、チュウダイサギ若鳥横姿、を撮影した。ウンモンオオシロヒメシヤクは、『蛾の生態標本図鑑』に、『開張：27～28mm。分布：北海道、本州、四国、九州、南西諸島。翅の地色は白色で、前後翅の黒色の横脈紋は明瞭。その他の斑紋は不明瞭となる。年2化、5～9月各地に普通。寄生植物はスイカズラ科のスイカズラなど。』と書いてある。初めて同定した。今までは不明の蛾として、1画像を登録していた。今日撮影したのは2画像目である。
2024	8	9	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は27～28℃、北東の風2m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は78%。鳥屋野潟、ウmanoszukusaの花、鳥屋野潟、カンムリカイツブリ夏羽浮上横姿、アマガエルが擬態する(ヨシの葉の上)、オオミズアオ、オオミズアオ頭部、を撮影した。オオミズアオは、『蛾の生態標本図鑑』に、『開張：♂80～110mm、♀85～120mm。分布：北海道、本州、四国、九州、南西諸島。大型の蛾で、翅の地色は青白色から黄色みを帯びた白色まで変異がある。夏型は黄色みが強くなり、大型で外横線が太く目立つ個体がでる。年1～2化、5～8月に平地から山地に出現する。北海道など寒冷地では年1化、春型のみとなる。寄主植物はバラ科、ブナ科、カバノキ科など多くの広葉樹で広食性。』と書いてある。ネット検索によると、翅には縦方向に内横線、中横線、外横線があり、外横線は『翅の外側寄りにある線。殆どの種がもつ線、同定の際に重要になることが多い。』と書いてある。筆者が撮影した画像の翅には、黄色い外横線がうっすらと見える。
2024	8	10	ウオーキング途中の八千代橋でコサギに一期一会。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は27～29℃、北東の風1m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は81%。コサギ夏羽の横姿、コサギ夏羽の前姿(エコトーンのある橋脚フーチング)、を撮影した。エコトーンとは、環境省のHPに、『陸地と水面の境界、森林と草原の境界のように、どちらとも違った特徴を持った移行帯は「エコトーン」と呼ばれる。』と書いてある。八千代橋の橋脚フーチングは上面が傾斜しており、コサギなどの水鳥が水際に近づき易い斜面形状になっている。この斜面上では、水域と陸域の境界の水際が風浪やうねりにより変動している。小魚等が波に乗って水際に打ち上げられ、コサギが容易に捕食できる餌場となっているのである。残念ながら、上流の昭和橋、下流の万代橋と柳都大橋の橋脚フーチングには、この様なエコトーンの餌場はない。
2024	8	11	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は29～31℃、南西の風3m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は78%。チュウサギ幼鳥の前姿、鳥屋野潟、ウチスズメ蛾の幼虫、ウチワヤンマみオベリスク姿勢(強い陽射しを避ける)、ウmanoszukusaの花、鳥屋野潟、ショウリョウバッタ♀保護色、カンムリカイツブリ夏羽横姿、を撮影した。ショウリョウバッタ♀は、『日本の昆虫生態図鑑』に、『体長：♂40～50mm、♀75～80mm。分布：本州、四国、九州、南西諸島。出現期：7月から10月。複眼の位置や大きさに3つの型がある。体色は褐色から緑色で、白い線や紋の入るものもある。オス、メスの大きさの差が著しい。オスは飛ぶときにキチキチ…と音を出す。明るい草原、河原などに生息する。』と書いてある。また、『田んぼの生きもの図鑑』に、『キリギリスやバッタの仲間は、草むらで身を守るために草によく似た色をしています。同じ種でも若葉色をしたものと枯葉色をしたものがあるので、種を見分けるときには注意が必要です。オンブバッタの様に体の色変わりがあるものと、トノサマバッタの様に頭や前胸、後あしのももなど体の一部だけに色変わりがあるものがある。ショウリョウバッタは、この両方がある。』と書いてある。保護色は、生きものが周囲の環境に適應するための驚くべき戦略で、ショウリョウバッタは強力な保護色の機能をもっている。
2024	8	12	2016年の鳥類を更新訂正(クロハラアジサシまで)。

西暦	月	日	日誌
2024	8	13	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は28～31℃、南南西の風2m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は86%。乱層雲（高さ2000メートル～7000メートル）、チュウサギ幼鳥の横姿、ウマノスズクサの花、鳥屋野潟、清五郎排水路、セリの花（白）、コショウハッカ淡紫色の花、新堀排水路、チョウトンボ、ニイニイゼミ、を撮影した。セリは、「自分で採れる薬になる植物図鑑」に、『春の七草のひとつとして古くから食用にされた多年草、水田のまわりの水路などの湿地に生育する。各地で食用に栽培もされる。7～8月、30 cmほどの花茎を伸ばし、先端の複散形花序に白い小花を多数咲かせる。リウマチ、肩こり、神経痛には、乾燥させた全草ひと握りを布袋に入れて浴湯料とすると痛みをやわらげる。便秘や食欲不振、利尿、解熱などには、新鮮な生のセリを食用にするのが手軽で有効な方法である。』と書いてある。さらに、『セリは、さまざまな健康効果が期待できる。セリの独特の香りは精油成分によるもので、食欲増進のほか保温、発汗効果がある。繊維質が多いので便通をよくする効果も。食用には、必要時に適宜採取する。香りと歯ざわりを生かすには軽く下ゆでして水にさらし、お浸しや胡麻和えに。また、肉の臭みを消すことから、すき焼きなどの鍋料理と相性がよい。とくに秋田のきりたんぼ鍋には欠かせない野菜として知られている。』と書いてある。筆者は、昔は村上市の山奥の現場で、小川に生えているセリを食べた事があった。最近では、セリを食べていない。今度、スーパーマーケットで探してみよう。
2024	8	14	ウォーキング途中の八千代橋でコサギに一期一会。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は27～28℃、北北西の風1m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は91%。コサギ夏羽の横姿、コサギ夏羽の横姿（エコトーンのある橋脚フーチング）、を撮影した。エコトーンとは、環境省のHPに、『陸地と水面の境界、森林と草原の境界のように、どちらとも違った特徴を持った移行帯は「エコトーン」と呼ばれる。』と書いてある。八千代橋の橋脚フーチングは上面が凸型斜面の形状をしており、コサギなどの水鳥が水際に近づき易い構造になっている。この斜面上では、水域と陸域の境界（水際）が風浪やうねりにより変動している。小魚等が波に乗って水際に打ち上げられ、コサギが容易に捕食できる餌場となっている。撮影したコサギは、信濃川のほぼ河心（流心線）位置の橋脚フーチング上流側上面で片足で立っていて、入念に羽繕いをしていた。腹いっぱい食べたのか？満足そうな表情であった。残念ながら、上流の昭和橋、下流の万代橋や柳都大橋の橋脚フーチングは、このような陸域と水域の境界にある変動する水際（水辺エコトーン）が形成される構造になっていない。
2024	8	15	ウォーキング途中の弁天橋でチュウサギに一期一会。晴天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は29～30℃、北北東の風2m/s、陽射しは強く、日傘をさす。湿度は77%。2羽のチュウサギ幼鳥前姿、を撮影した。チュウサギ幼鳥は、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『雌雄同色。嘴は夏羽では黒く、冬羽や若鳥は黄色。幼鳥には飾り羽がない。採食場は草地や農耕地などが多く、カエルやトカゲ、バッタなどをよく捕る。』と書いてある。撮影したチュウサギは、嘴が黄色く、飾り羽が無いことから、幼鳥と同定した。夏鳥で、インドや東南アジアから繁殖のために日本に渡来する。暑さに強いのだろうか？。ヨシ原で、強い陽射しを浴びながら長時間かけてカエル、バッタ等を捕食し、羽繕いをしている。日陰で休んでいる姿は見たことが無い。日射病や熱中症にならないのだろうか？

西暦	月	日	日誌
2024	8	16	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は30～31℃、北東の風4m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は75%。鳥屋野潟、カンムリカイツブリ夏羽がグルーミング、ウマノスズクサの花、鳥屋野潟、ガガブタの花(白)、コシアキトンボ♂羽損傷、アカボシゴマダラ、を撮影した。アカボシゴマダラは、「日本のチョウ増補版」に、『奄美諸島に分布する。本土のゴマダラチョウに似るが、通常、後翅に赤斑があり、後翅の肛角部に近い外縁が弱く凹む。♂♀の色彩・斑紋はほぼ同じだが、♀は大きく横長、全体的に丸みが強い。食草はクワノハエノキ(アサ科)。生息環境は森林・林縁、平地～低山地の樹林、低山地よりも平地・丘陵や人家周辺、墓地などを好む。行動は、日中、樹冠を滑空しながら飛翔し、高所の葉上に翅を開いて静止する。♂は山頂で占有行動をとる。腐果や樹液で吸汁し、ホルトノキへの訪花例や吸水例もある。個体数は本来あまり多くなかったが、開発などにより生息地が減少している。関東で広がっている中国原産の外来アカボシゴマダラとは交雑可能であり、今後、人為的に侵入しないよう注意が必要である。』と書いてある。国立環境研究所の侵入生物データベースには、『自然分布の範囲は、ベトナム北部～大陸中国南部～東部～朝鮮半島、および済州島など周辺島嶼。別亜種が奄美諸島(H. s. shirakii)と台湾(H. s. formosana)に分布。日本本土の在来種ゴマダラチョウ H. japonica は、後翅に赤い斑紋が無いこと、アカボシゴマダラ白化型より黒い部分が多いことで区別される。外来アカボシゴマダラは神奈川県、東京都区内、伊豆大島で記録されている。2010年以降は埼玉県、千葉県、茨城県、栃木県、群馬県へと関東全域に分布を拡大している。近年、静岡県、岐阜県、石川県、山梨県でも目撃情報がある。』と書いてある。筆者が撮影したアカボシゴマダラは外来種であろう。どうやら新潟県にも分布を広げているようである。
2024	8	17	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は31～31℃、西北西の風4m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は74%。鳥屋野潟、ウマノスズクサの花、稲の登熟期、稲穂(実った粃)、キジバト後姿見返り、を撮影した。キジバトは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『季節、分布：留鳥、または漂鳥。全国だが、寒冷地のものは冬期は暖地に移動する。生息環境：市街地から山地の開けた場所に生息し、あまり深い林内には入らない。行動：通年つがいで行動するものが多いが、若い個体などは非繁殖期は群れで行動している。形態：唯雄同色。全体には灰褐色で、背からの上面はキジの雌を思わせる模様。鳴き声：「デデポーデデポーポー」と鳴き、ときに「ブン」という声を出す。類似種との識別：本種に似た羽衣のドバトがいるので注意が必要。亜種キジバトは九州以北に生息する。亜種リュウキュウキジバトは屋久島から南西諸島に生息し、亜種キジバトより全体の羽衣の色が濃い傾向がある。』と書いてある。筆者が撮影したのは亜種キジバトである。一年中、見かける野鳥であるが、群れで見かける機会が少なくなった。
2024	8	18	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は27～30℃、北北東の風4m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は78%。ウマノスズクサの花、コフキトンボ♀横姿、チョウトンボ♂、コスズメ(蛾)幼虫、を撮影した。ウマノスズクサは、「野草・雑草観察図鑑」に、『花形に特徴がある有毒種物。多年草のつる性植物で本州～沖縄に分布。茎は細く、つる性で1～5m伸び、他のものからみつく。葉は三角状のタマゴ形で、長さ4～7cm。基部は心形で、両はしは耳形になり、質は厚い。葉のわきからきわめて特徴がある花を咲かせる。花の先をラッパを斜めに切ったような4～6cmの長さの花冠と、基部が球状にふくらんだ花後の果実は、ひもでつり下げられたような形状をしている。名前の由来は、果実の形が馬の首などにかける鈴に似ていることから。』と書いてある。また、「日本のチョウ増補版」に、『ジャコウアゲハの食草：ウマノスズクサ、オオバウマノスズクサ、リュウキュウウマノスズクサなど。』と書いてある。ジャコウアゲハは有毒植物のウマノスズクサを食べることで、天敵から捕食されないらしい。
2024	8	19	ウォーキング途中の鳥屋野潟公園周辺でアゲハチョウとハグロトンボに一期一会。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。アゲハチョウ♂吸蜜、ハグロトンボ♂、を撮影した。アゲハチョウは、「日本のチョウ増補版」に写真が掲載されており、『後翅表面に赤い斑紋があるのが夏型♀、夏型♂には無い』ことから、♂と同定した。

西暦	月	日	日誌
2024	8	20	柳都大橋と八千代橋でウミネコとコサギに一期一会。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は29～31℃、東北東の風1m/s、陽射しは強く、日傘をさす。湿度は81%。柳都大橋下流景観、ウミネコ幼鳥第3回冬羽に換羽中、コサギ夏羽の横姿、コサギ夏羽の前姿、を撮影した。コサギは、『フィールド図鑑日本の野鳥』に、『季節・分布：留鳥または夏鳥として、本州以南に生息する。南西諸島では主に冬鳥。環境：河川、池、湖沼、水田、湿地、干潟など。行動：他のサギ類に混じって、コロニーをつくって繁殖する。非繁殖期は群れで行動することが多く、カワウが追い出した魚を群れで横取りしたりする。1羽では足指を水中で震わせて、魚を物陰から追い出して捕らえたりする。形態：雌雄同色。嘴は周年黒い。鳴き声：「ガァー」などと鳴く。類似種との識別：足は足指だけが黄色いことで識別できる。』と書いてある。新潟県では準絶滅危惧(NT)に指定されている。黄色い足指は何本あるのだろうか？筆者が撮影した写真では、前姿で前趾3本、横姿で後趾1本が見える。ネット検索では、前趾3本、後趾1本の計4本である。
2024	8	21	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は28～30℃、北の風1m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は76%。鳥屋野潟が風で鏡の様な水面に層積雲が映る、コガタズメバチがヤブガラシで吸蜜、コムクドリ♂前姿、アオサギ若鳥横姿、オモダカ雌花、ウスバキトンボ♂、ショウジョウトンボ♂、を撮影した。ウスバキトンボは、『日本のトンボ改訂版』に、『出現期：成虫は5月～11月初旬。【生息環境】平地～山地の水田や開放的な湿地など。成虫は植生の乏しい水辺や芝生の上などでもよくみられる。【生活史】卵期間3日～1週間程度、幼虫期間1～2か月程度(1年多世代)。成虫は春～秋にかけて全国各地でみられ、一時的な発生を繰り返すが、ほとんどの地域では越冬できず死滅する。八重山諸島では幼虫での越冬が確認されている。【形態】♂♀とも薄い橙色をした中型のトンボ。♂は成熟すると腹部背面の赤みを増す。【備考】世界で最も広く分布するトンボで、成虫は移動性が強く、全国各地でみられる。』と書いてある。ウスバキトンボは、“ほとんどの地域で越冬できず死滅する”ことで、食物連鎖(喰う－喰われるの関係)のバランスを保っている種なのだろう。一方、地球環境に大きな影響を与えるほど増えてしまった人間は、地球上の食物連鎖や生態系から逸脱した種になり、地球環境の緩衝力を超えた人間社会活動のインパクトにより、異なる地球環境に変化する、いわゆる“カタストロフィックシフト”現象、特に気象変動が顕著になっている今日この頃である。
2024	8	22	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は29～32℃、南南東の風2m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は74%。チュウサギ幼鳥の前姿、チュウサギ幼鳥が足で首を掻き頭部の羽毛を逆立てる、鳥屋野潟、チュウサギ幼鳥横顔、アゲハチョウ♀、ウマノスズクサの花、鳥屋野潟、カワウ♀が口を開けて体温調節、カンムリカイツブリ夏羽浮上横姿、チュウダイサギ若鳥横姿、を撮影した。チュウサギ幼鳥は、『フィールド図鑑日本の野鳥』に、『幼鳥は嘴が黄色く先端は黒い。飾り羽はない。』と書いてあることから幼鳥と同定した。。チュウダイサギ若鳥は、『チュウサギと似ているが、本種の口角は眼より後ろまで、チュウサギでは眼の下まで。嘴は夏羽では黒く、冬羽や若鳥では黄色。』と書いてあることからチュウダイサギ若鳥と同定した。筆者が今まで目撃したチュウダイサギは単独行動が多い。群れは、2012年9月14日に南魚沼市泉盛寺のため池付近で撮影した画像だけである。一方、チュウサギは、5羽程度の群れで、2009年～2018年に長潟の田んぼ等で撮影した画像が13点ある。

西暦	月	日	日誌
2024	8	23	ウォーキング途中の燈の遊歩道でツマグロヒョウモンチョウ、八千代橋でコサギとササゴイに一期一会。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は32～35℃、南の風3m/s、陽射しが強いので、日傘をさす。湿度は68%。ツマグロヒョウモン♂、コサギ夏羽の横姿、コサギ夏羽の後姿(エコトーンのある橋脚フーチング)、ササゴイ横姿、を撮影した。ササゴイは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『夏鳥として九州以北から北海道南部にまで生息。温暖な地方では越冬する。雌雄同色。成鳥は青みのある黒色で、後頭に伸びるばさばさの冠羽がある。幼鳥は全体に褐色で白っぽい羽縁が密にある。』と書いてある。この文献では、コサギは留鳥なので、冬羽と夏羽の解説があるが、ササゴイは夏鳥なので、夏羽を前提にしており冬羽の解説は無い。撮影画像では、やすらぎ提護岸の日向にいるササゴイは、口を開けて体温調節をしているようだ。近くの八千代橋橋脚フーチングは日陰になっていて涼しそうだけど、コサギの縄張りになっている。ササゴイはコサギが立ち去るのを我慢強く待っているのだろう。
2024	8	24	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は32～33℃、南西の風2m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は72%。鳥屋野潟、カワウ♂が口を開けて体温調節、ウマノスズクサの花、ショウジョウトンボ♂、ムクゲの花(桃色)、カワセミ♂幼鳥前姿、を撮影した。カワセミ♂幼鳥は、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『留鳥、または漂鳥。ほぼ全国に分布。環境：海岸から低山の河川、湖沼、池など。行動：繁殖期はつがい、それ以外では1羽でなわばりを作って生活する。一定の休息場と採餌場があり、ある程度決まった時間で行動する。高い場所に止まったり、停空飛翔したりして水中に飛び込み、魚類や甲殻類などを捕る。形態：雌雄ほぼ同色。雄のほうが光沢は強く嘴はほぼ黒い。雌の下嘴は赤っぽい。幼鳥は全体に光沢はなく、胸部は黒っぽい。』と書いてあることから、カワセミ♂幼鳥と同定した。筆者が今まで撮影した画像は161点で、♀が65点、♂が78点、雌雄不明が18点である。久しぶりに遭遇して、近距離で撮影できた。いつもは逃げられてしまうのだが、お腹が空いて餌探しに夢中になり、空以外の周囲の警戒を怠ったのかも？ 筆者がその場から離れても、逃げなかった。
2024	8	25	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺と燈で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は30～30℃、南南東の風2m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は82%。鳥屋野潟、ヨツメエダシャク、センニンソウ、アオスジアゲハ、イヌタヌキモの黄色い花、ウマノスズクサの花、ショウジョウトンボ♂、ゴマダラチョウ、を撮影した。センニンソウは「世界文化生物大図鑑 植物 I 双子葉植物」に、『木化する落葉性のつる植物。暖帯から温帯の林縁、林下、田の畔などに生える。花は8～9月に咲き、集散花序となる。北海道南部、本州、四国、九州、沖縄、小笠原に分布。』と書いてある。また、「野草・雑草観察図鑑」には、『木質のつる植物。植物分類は多年草』と書いてある。また、「自分で採れる薬になる植物図鑑」は、『日当たりのよい林縁や道ばた、草原などでふつうに見られるつる性の多年草。茎の下部は木化して枯れずに冬を越す。』と書いてある。木本類と草本類の両方の性質を持つ植物がいるとは気づかなかった。
2024	8	26	ウォーキング途中の信濃川左岸下流周辺でウミネコに一期一会。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は28～31℃、南南東の風1m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は79%。信濃川左岸下流景観、ウミネコ夏羽9羽の群れ、ウミネコ幼鳥第3回冬羽に換羽中、を撮影した。ウミネコは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『留鳥または漂鳥。ほぼ全国に分布。雌雄同色。成鳥の尾羽に黒い帯があるカモメ類は日本では本種だけ。嘴は黄色く先端は赤と黒。4年で成鳥になる。』と書いてある。嘴の黄色や先端の赤と黒が不明瞭で後頭部に冬羽の斑点があることから幼鳥第3回冬羽に換羽中と推定した。なお、上記の文献には第2回夏羽から第3回冬羽に換羽中の姿図は掲載されていない。ウミネコは幼鳥から成鳥になるのに4年もかかることから、その期間の同定は困難である。

西暦	月	日	日誌
2024	8	27	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺とで動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は31～33℃、南南東の風4m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は58%。チュウサギ幼鳥の後姿見返り、チュウサギ幼鳥の横顔(獲物を狙う目つき)、鳥屋野潟、センニンソウ、ウチワヤンマの後姿(翅損傷)、ウマノスズクサの花、カンムリカイツブリ夏羽の威嚇ポーズ(横姿)、カンムリカイツブリ夏羽浮上前姿、鳥屋野潟、カワセミ♀幼鳥後姿(横顔)、を撮影した。チュウサギ幼鳥は「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『雌雄同色。嘴は夏羽では黒く、冬羽や若鳥は黄色。幼鳥には飾り羽がない。』と書いてあることから、幼鳥と同定した。カンムリカイツブリ夏羽は、『雌雄同色。夏羽では嘴は赤みのある黒色、冬羽の嘴はピンク色。また姿図には夏羽は襟状の飾り羽がある。』と書いてあることから、夏羽と同定したが、嘴はピンク色が目立ち、飾り羽も小さくなってきているので、冬羽に換羽し始めたようだ。カワセミ♀幼鳥は、『雌雄ほぼ同色。雄のほうが光沢は強く嘴はほぼ黒い。雌の下嘴は赤っぽい。また姿図には雌の下嘴は赤橙色だが多い少ないがある。幼鳥は全体に光沢はなく、胸部は黒っぽい。』と書いてあることから、♀幼鳥と同定した。
2024	8	28	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺とで動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は27～29℃、北西の風2m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は85%。鳥屋野潟が凧で鏡の様な水面に巻層雲(うす雲)が映る、ヒダリマキマイマイ、不明植物の葉、イチモンジセセリ、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中(横姿)、鳥屋野潟、黄金の稲穂、モンシロチョウ♀、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中(横姿)、を撮影した。ヒダリマキマイマイは「新潟県陸水動物図鑑」に、『県内の平地に最もふつうにみられる大型のカタツムリである。殻は左巻きで黄褐色をしている。殻の表面は少しなめらかで、殻をとりまく色帯は一定しておらず、さまざまである。1番目の色帯がないものも多く、3番目の色帯は流れている。6～7月の繁殖期になると、2本の大触角の間の頭部かふくらんで、こぶのようになる。交尾の後、10日間くらいで直径3ミリの球形で石灰質の殻を持つ卵を、1回に15～20個産む。地上性で木に登ることは少なく、主に落ち葉などを食べて生活する。飼育はかんたんで、餌にキャベツ、キュウリ、ニンジンを与えるとよく食べる。カタツムリの仲間は、1匹のからだの中に♂と♀の両方の生殖器を持っている雌雄同体であるが、2匹でおたがいに交尾し合い、それぞれが卵を産む。』と書いてある。『雌雄同体で交尾をして、それぞれが卵を産む』とは、実に面白い。“男女平等である!!!”。
2024	8	30	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺とで動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は29～33℃、南東の風5m/s、陽射しは弱く風がやや強い、日傘をさす。湿度は69%。チュウサギ幼鳥の横顔(獲物を狙う目つき)、チュウサギ幼鳥の横顔(獲物を捕獲)、チュウサギ幼鳥の横姿、鳥屋野潟、ギンブナが油膜が漂う水面で口をパクパクする、ウマノスズクサの花、鳥屋野潟、ウチワヤンマの横姿、チャコウラナメクジ、カワセミ♂幼鳥、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中(後姿)羽繕い、を撮影した。ギンブナは、「日本魚類館」に、『フナ属は、日本には下記の7つのフナ類が知られているが、各地での無秩序な放流に加え、同定の難しさから、各種・亜種の正確な自然分布域が不明瞭。上唇に口ひげがない。ギンブナは、雌性発生による単為生殖を行う。ただし、少数であるが、有性生殖を行う個体も存在する。雑食性。4～6月、大雨の後、浅所の水草などに強い粘着卵を産む。正確な自然分布は不明。』と書いてある。『雌性発生による単為生殖を行う』ことから、ギンブナのほとんどが雌である。メスの卵(雌性配偶子)は精子(雄性配偶子)を必要とせずに単独で発生するので、まさに、江戸城大奥の世界なのか？

西暦	月	日	日誌
2024	9	1	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は28～30℃、静穏0m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は83%。鳥屋野潟が凧で鏡の様な水面にわた雲が映る、ジョロウグモ♀、ハゼノキ紅葉、ウマノスズクサの蕾、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中(威嚇ポーズ)、ガガブタの花(白)、チュウサギ幼鳥の前姿、チュウサギ幼鳥の横顔、を撮影した。ギンブナは、『日本のクモ』に、『体長：♀20～30mm.、♂6～10mm.。出現期：9月～11月。分布：本州、四国、九州、南西諸島。都市部の人家の庭から山地の林道、溪流まで広く生息する一般種。樹間、草間に目の細かい円網を張る。網は主網と、その前後に糸を引き回したバリアーと呼ばれる網とで三重構造になっている。主網は幼体期は円網であるが、成長に伴い下部が大きくなり、全体的には馬の蹄のように見えることから、蹄形円網と呼ばれる。』と書いてある。日本全土で、現在1400種が記録されているが、そのうちの565種を掲載した文献である。筆者が撮影したクモは、現在16種だけである。
2024	9	2	2016年の鳥類を更新訂正(ゴイサギまで)。
2024	9	4	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は27～29℃、東南東の風2m/s、陽射しが強いので、日傘をさす。湿度は61%。鳥屋野潟が凧で鏡の様な水面、センニンソウ、ウマノスズクサの花、アオダイショウの横顔(オリーブ色の目)、カンムリカイツブリ浮上横姿(冬羽に換羽中)、鳥屋野潟、コシアキトンボ♂横姿、カルガモ♀横姿、カルガモ♂横姿、アオダイショウの横顔(オリーブ色の目)、アオダイショウ樹上、を撮影した。アオダイショウは、『野外観察のための日本産爬虫類図鑑第3版』に、『日本固有種。北海道、本州、四国、九州とその周辺の島々、国後島、奥尻島、佐渡島、伊豆大島～神津島、隠岐、杣岐、対馬、五島列島、薩南諸島に分布する。平地や丘陵地等人の活動範囲に多く生息し、特に田んぼや畑、民家周辺で最も多く目撃されている。木登りが上手で、「クライミングキール」と呼ばれる腹板の両端にある鱗を引っ掛けるようにして樹木や垂直な壁等を登る。なお、木登りは樹洞にすみつく哺乳類や鳥類の雛を狙ったりする目的で行う。農作業小屋の天井や養鶏場にすみついていることも多く、かつては民家に普通にみられ、穀物をかじるネズミを食べてくれると重宝(放置)されていた。しかし、最近はこのような話を聞かない上、数年前に比べて格段にヘビをみる機会が減っている。地色は褐色で青や緑色がかっていて、オリーブ色に近い個体が多い。全身が青っぽくみえることから名付けられた名前にも納得できる。うっすらとした縦条が4本入ることが多いが、まれに全く縦条がみられない個体も存在する。顔つきは角張った印象があり、眼はオリーブ色がかった褐色をしている。5～8月に交尾を行い、7～8月に4～17個産卵する。主に幼体は鳥の雛やネズミの子ども、時にはトカゲも食べるが、大きくなるにつれて得意技の「絞め殺し」と「丸呑み」を使って、小鳥や鶏卵、小型哺乳類を食べる。』と書いてある。筆者の写真は、小鳥か小型哺乳類等を丸呑みして、消化されるまで、樹上で休んでいた時の撮影画像である。邪魔が入らない限り、数時間は同じ場所でじっとしているようだ。満腹で満足した表情である。人間慣れしているのか、数メートルの距離でも驚かない。性格がとてもおとなしく、筆者が一番好きなヘビである。

西暦	月	日	日誌
2024	9	5	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は28～31℃、南南東の風4m/s、陽射しが強いので、日傘をさす。湿度は62%。チュウサギ若鳥が足で首を掻き、頭部の羽毛を逆立てる、チュウサギ若鳥横姿、頭から頸の羽毛を逆立てるチュウダイサギ若鳥横姿、鳥屋野潟、チュウサギ若鳥の横姿、鳥屋野潟、コバネイナゴ、ウマノスズクサの花、を撮影した。チュウダイサギ若鳥は、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『亜種チュウダイサギは夏鳥として中部地方以南で繁殖する。それよりも一回り大きい亜種ダイサギが、冬鳥としてほぼ全国に渡来する。雌雄同色。嘴は夏羽では黒く冬羽や若鳥では黄色。亜種ダイサギ冬羽は、脛節から跗蹠(フシヨク)の上部までは白っぽいものからピンクや黄色っぽいものまでいる。』と書いてある。残念ながら『脛節から跗蹠(フシヨク)の上部』が水面下で見えないこと、9月初旬なのでダイサギは渡来していないと推測されること、飾り羽が目立たないことからチュウダサギ若鳥とした。チュウサギ若鳥も胸に中途半端で目立たない飾り羽があることから、幼鳥ではなく若鳥とした。
2024	9	6	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は28～27℃、南西の風5m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は65%。ツマグロヒョウモン♂、鳥屋野潟の湖面が波立つ、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中が羽を広げる(前姿)、カンムリカイツブリ浮上横姿(冬羽に換羽中)、黄金色の稲穂、アカミガメ幼体の甲羅干し(2匹)、を撮影した。アカミガメは、「野外観察のための日本産爬虫類図鑑第3版」に、『国内では北海道、本州、四国、九州、ほとんどの有人島に定着している。原産地は北アメリカの五大湖南岸からメキシコ湾岸で、東アジアや東南アジア各地にも移入。川の中・下流、池沼、神社の池等に多くみられる。汚れた水でもすみわたることができるため分布を拡大している。1950年代から「ミドリガメ」の名前で大量に輸入されたが、大型化による飼育放棄や個体の逃亡等により野外で確認されるようになった。子ガメは甲羅がきれいな緑色で、ペットとして人気が高く安価で売られる。成長に伴って緑色は消え、背甲には緑色、黄色、褐色の模様がある。名前の由来となった眼の後方にある赤い模様から単にアカミガメと呼ばれることが多い。オスは爪が長くなり、メスをみつけると顔の前に回り込み、前肢を伸ばし、その爪を小刻みに震わせ求愛する。オスは成長に伴い頭部を中心に全身が黒化してくる。日光浴を好み、四肢をピンと伸びをしているような状態で行うことがある。雑食性で、主にアメリカザリガニや死んだ魚、水生昆虫等を食べる。成長すると水生植物をよく食べるようになり、ハス、レンコンに被害が出ている。5～8月に一度に2～25個程度の卵を産む。』と書いてある。鳥屋野潟公園で一番多いカメである。性格はおとなしく、人が近づくと、逃げるか、その場で頭、足を甲羅の中にひっこめてしまう。日本には天敵がいないので、餌賦存量が多い環境では増え続け、インガメなどの在来種の生息環境を脅かす存在となっている。
2024	9	7	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は27～26℃、東南東の風1m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は75%。鳥屋野潟、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中前姿、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中がしわがれた声でガガガと鳴く(前姿)、同じく(後姿)、カンムリカイツブリ浮上横姿(冬羽に換羽中)、鳥屋野潟、シモフリスズメガ、を撮影した。シモフリスズメガは、「くらべてわかる蛾1704種」に、『前翅の長さ:50～60mm。分布:本州～九州、南西諸島。出現期:5～10月。生息環境:平地や低山～山地。食草、食樹:シソ科、モクセイ科など。』と書いてある。成虫を撮影したのは初めてで、2023年9月30日に幼虫を撮影したのが最初である。文献の解説は、アバウトな生活史しか書いていない。同じ鱗翅目のチョウは文献が多いが、蛾の文献は少なく、生活史等の調査も進んでいないようだ。ネット検索では、『日本には鱗翅目の昆虫が6000種程度知られているが、「チョウ」と呼ばれるものは250種類にすぎず、他はすべて「ガ」である。世界全体で見ると、ガの種類数はチョウの20～30倍ともいわれている。』と書いてある。

西暦	月	日	日誌
2024	9	9	ウォーキング途中の長潟の田んぼでマルバルコウ、ニゴイに一期一会。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は27～28℃、北東の風3m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は79%。マルバルコウ、ニゴイ、ニゴイの頭部、を撮影した。ニゴイは、「日本魚類館」に、『吻が長くキツネ顔。幼魚は体側中央に晴色斑が並ぶが、成長とともに消失。産卵期は4～7月、雄は黒くなり、吻や胸鰭、腹鰭に細かい点星が現れる。比較的大きな河川の中～下流域や湖沼で、流れの緩やかな砂底の低層部に生息。底生動物のほか、小魚も食べる。琵琶湖以東の本州と九州北部に不連続分布。日本固有種。』と書いてある。マルバルコウは、「植調 雑草大鑑」に、『19世紀に観賞用で移入した。野生化して道ばたや空き地に広がり、畑地や樹園地の強害草となっている。分布は本州以南。花期は6月～10月。つる性の一年生(夏生)。』と書いてある。強害草とは、作物の生育を著しく妨げる雑草のことである。つる性で、他の植物に絡みつく。
2024	9	10	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は31～34℃、南南東の風3m/s、陽射しが強いので、日傘をさす。湿度は61%。チュウサギ若鳥の横姿、鳥屋野潟、カンムリカイツブリ浮上横姿(冬羽に換羽中)、鳥屋野潟公園ビオトープため池、黄金色の稲穂、チョウトンボ♂翅損傷、ガガブタの群生地に佇むアオサギ(後姿)、コカマキリ、を撮影した。コカマキリは、「田んぼの生きもの図鑑」に、『体長:45～65mm。出現期:8～11月。分布:本州・四国・九州。体全体が褐色から茶褐色で、前あしの内側の付け根に黒い帯、すねの中ほどに黒い帯と、淡い色の斑紋が2か所ある。ごくまれに体全体が緑色のものもある。丈の低い草地に生息し、昆虫を待ちぶせ、捕らえて食べる。卵鞘は長さ1.5cmほどで細長く、石や板切れなどに産みつけられる。』と書いてある。どういうわけか、建物裏口の廊下に居た。筆者の撮影が終わると同時に、草むらの方へ飛んで行った。前足の黒い帯は確認できたが、淡い色の斑紋は確認できなかった。しかし、体長はオオカマキリ等より小さく、ハラビロカマキリとは体の形状が違うことから、コカマキリと同定した。
2024	9		ウォーキング途中の長潟の田んぼでコイ、ギンブナ、モツゴに一期一会。曇天から雨天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は29～28℃、南南西の風3m/s、陽射しは弱く時々時雨、日傘をさす。湿度は78%。黄金色の稲穂、コイとギンブナとモツゴの群れが酸欠状態、ギンブナが酸欠状態、モツゴが酸欠状態、を撮影した。モツゴは、「日本魚類館」に、『モツゴ属は、口は吻端で小さく、上向き。日ひげがない。産卵期に雄は真っ黒になり、なわばりをつくり、卵を保護。小型で体長10cmまで。止水域に生息。東アジアに5種、日本に3種。モツゴの側線は完全(稀に不完全)。普通吻端から尾鰭基底に至る1本の黒い縦帯をもつ(稀に途中まで)。河川中～下流域、湖や池沼、農業水路、溜め池など多様な環境に生息し、富栄養化にも強い。産卵期は4～7月。関東以西の本州、四国、九州、朝鮮半島全域、台湾、アムール川～中国南部の珠江水系に分布。フナなどの放流に混じって日本全国に拡散。国外ではヨーロッパ、北アフリカなどに中国産コイやソウギョなどの養殖・放流に混入して拡散し、現地では深刻な問題となっている。』と書いてある。モツゴは国立環境研究所の侵入生物データベースに載っている。新潟県は本来、シナイモツゴの自然分布地域であったが、オオクチバスなどの外来種による食害や、侵入種モツゴ雄による雌の独占、平地開発、圃場整備、里山の荒廃により激減した。シナイモツゴは、県:絶滅危惧Ⅱ類、国:絶滅危惧ⅠA類に指定される絶滅危惧種となっている。

西暦	月	日	日誌
2024	9	12	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は26～29℃、東北東の風1m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は95%。チュウサギ若鳥の横姿、鳥屋野潟、チュウサギ若鳥の後姿、ガガブタ群生地に佇むアオサギ後姿、チョウトンボ♂羽損傷、コガモ♀横姿、アジアイトトンボカップル交尾、コガモ♂エクリプス横姿、鳥屋野潟公園水路～無風で鏡の様な水面、を撮影した。コガモは、『フィールド図鑑日本の野鳥』に、『冬鳥。全国的に渡来し、北海道では多くが旅鳥。本州と北海道で繁殖記録がある。環境：広々とした水面ではなく、木で覆われた水面やアシ原がある池、湖沼、河川など。行動：夕方に行動しはじめ、水田地帯や河川敷などに移動して落ち穂や青草、植物の種子などを食べる。形態：雄の下尾筒の両脇はクリーム色で目立つ。雌は嘴の両脇が黄色っぽい。鳴き声：「ピリッピリッ」と鳴く。類似種との識別：小型カモ類の雌の中で、嘴が黒く黄色みがあるのは本種だけ。エクリプスの脇羽は丸みがあり、雌や幼鳥ではとがり気味。』と書いてある。筆者が撮影したエクリプスは、羽の一部が不連続に換羽し始めている。脇羽は脇の下にあり、羽を閉じた時は見えない。鳥屋野潟の冬鳥で、最も早く渡ってくる鳥がコガモである。
2024	9	14	ウオーキング途中の鐙の遊歩道周辺でツマグロヒョウモン蝶に一期一会。晴天、Tシャツ、シューズで出かける。ツマグロヒョウモン♀、ツマグロヒョウモン♂、を撮影した。ツマグロヒョウモンは、『日本のチョウ増補版』に、『【食草】パンジーやニオイスマレなどのスミレ科の栽培種を好み、在来種ではタチツボスミレ、スミレなどを利用する。【生息環境】林縁・草原・農地・公園・人家・河川 主に平地～丘陵地の明るい草地、人家周辺、都市公園、農地などに見られ、特にパンジーの植栽に伴って都市部で多い。【行動】日中、低い場所を比較的緩やかに飛翔し、各種の花を訪れる。♂は見晴らしのよい場所で占有行動をとる。【生息状況・保全】分布が北方に拡大しており、東京付近では2000年代に入り普通に見られるようになった(新潟県も北限となっている)。山頂部にも飛来するなど、山地にも進出してきている。成虫の見られる期間は、4月中旬から10月中旬で、一世代の期間は約1か月である。』と書いてある。
2024	9	16	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は27～27℃、北の風3m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は74%。鳥屋野潟が凧で鏡の様な水面に層積雲が映る、クズの花(赤紫色)、コガタスズメバチがヤブガラシで吸蜜、キタキチョウ吸蜜、ヤマトシジミ♀吸蜜、ガガブタ群生地に佇むアオサギ後姿、コガモ♂エクリプス横姿、カワウ♀若齢が羽乾かす、ムクゲの花(桃色)、を撮影した。コガモは、羽の一部が不連続に換羽し始めていることから♂エクリプスとした。カワウ♀若齢は、『フィールド図鑑日本の野鳥』に、『成鳥は全体に黒く、青紫の光沢がある。幼鳥は全体に茶色っぽく、腹部が白っぽい。』と書いてある。撮影画像は、頭部から首のあたりまで茶色っぽさが残っていることから、幼鳥ではなく若齢とした。なお、眼元から上クチバシが黄色いことから♀とした。キタキチョウは、翅の裏側の模様が分からないので性別なし。ヤマトシジミは『日本のチョウ増補版』に、『♂の翅の表面は細い黒帯が走る外縁を除いて、淡青色～紫青色が広がる。♀の翅の表面は青色部が♂よりも狭い(つまり黒っぽい)。』と書いてあることから、♀とした。
2024	9	17	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は29～28℃、南西の風1m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は71%。鳥屋野潟が凧で鏡の様な水面、チュウダイサギ若鳥がコウホネ群生地で餌を探す、カンムリカイツブリ浮上横姿(冬羽に換羽中)、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中(浮上後姿見返り)、鳥屋野潟、カワウ幼鳥が口を開けて体温調節、を撮影した。カワウ幼鳥は、『フィールド図鑑日本の野鳥』に、『成鳥は全体に黒く、青紫の光沢がある。幼鳥は全体に茶色っぽく、腹部が白っぽい。』と書いてあることから同定した。チュウダイサギ若鳥は、『雌雄同色。嘴は夏羽では黒く、冬羽や若鳥では黄色。』と書いてある。9月中旬なので、冬羽に換羽中か、若鳥かは判断がつかないが、飾り羽が無いことから若鳥とした。

西暦	月	日	日誌
2024	9	18	ウォーキング途中の信濃川下流周辺でウミネコ、アオサギ、コサギに一期一会。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は28～27℃、南西の風3m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は74%。ウミネコ夏羽が川のブイに乗る(横姿)、アオサギ若鳥が小魚を銜える(横姿)、コサギ後姿見返り、を撮影した。アオサギは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『雌雄同色。1年中、成鳥の体上面は青みのある灰色で、若鳥には褐色みがある。』と書いてある。さらに、冠羽が目立たない(短い)ことから、若鳥と同定。銜えた小魚の種名は不明である。コサギは八千代橋から撮影したので画像が不鮮明であるが、脛が黒く足が黄色いことからコサギと同定した。しかし、下嘴が黒いか？、冠羽や飾り羽はあるのか？分からないことから成鳥の夏羽か冬羽か、それとも幼鳥か同定できない。
2024	9	19	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は24～25℃、東の風1m/s、陽射しは弱い、日傘をさす。湿度は90%。片足で休むコサギ(冬羽に移行中)、鳥屋野潟、稲を刈った田んぼ、飾り羽が目立つアオサギ横姿、アオダイショウの抜け殻(樹上)、ムクゲの花(桃色)、ヒメジャノメ♀羽損傷、を撮影した。ヒメジャノメは、「日本のチョウ増補版」に、『♂は黄色味を帯びる。♂は後翅表の前縁基部近くに毛束があり、裏の中央部が太く盛り上がる。』と書いてあることから、♀とした。さらに、『食草：イネ、チヂミザサ、チガヤ、ススキ、アズマネザサ(イネ科)、カササゲ、ヒメスゲ(カヤツリグサ科)など。生息環境：林縁。農地、公園、河川。平地～低山地の明るい草地。農地、河川堤防、雑木林周辺などの開放的な環境を好む。行動：早朝や夕方によく活動し、草地上を跳ねるように飛び、葉上によく止まる。樹液に集まるほか、腐った果実や獣糞から吸汁も行う。訪花は稀。生息状況と保全：全国的には減少傾向は見られないが、都市部では環境の改変によって減少している。』と書いてある。前回撮影したのは2022年8月27日、2020年9月8日、2018年6月14日、8月20日、8月22日の3回、2017年は3回、2015年は6回、と遭遇回数は年を追うごとに減ってきている。
2024	9		ウォーキング途中の信濃川下流八千代橋でアオサギ、コサギに一期一会。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は27～24℃、南西の風5m/s、陽射しは弱く真っ黒い雲が近づく、帰りは土砂降りで雨傘をさす。湿度は80%。アオサギがエコトンのある橋脚フーチングに佇む(前姿)、を撮影した。アオサギは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『雌雄同色。1年中、成鳥の体上面は青みのある灰色で、若鳥には褐色みがある。』と書いてある。しかし、冠羽が見えず、褐色か泥だらけなのか分からないので、成鳥か若鳥かは不明。コサギは八千代橋から撮影したが、大粒の雨が振って来たので撮影を断念。雨粒をフォーカスしたのか？画像が不鮮明でピンボケなので掲示せず。
2024	9	23	2016年の鳥類を更新訂正(コサギまで)。

西暦	月	日	日誌
2024	9	24	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、ジャンパー、シューズで出かける。気温は22～25℃、南東の風5m/s、陽射しが強いので、日傘をさす。湿度は56%。鳥屋野潟、ハシブトガラス前姿(横顔)、下弦の月、カワウ羽乾かす(後姿)、ヒガンバナ、鳥屋野潟、アキアカネ♂横姿、コガモ♀横姿、チュウサギ若鳥の横姿、を撮影した。ヒガンバナは、「自分で採れる薬になる植物図鑑」に、『別名:マンジュシヤゲ、テンガイバナ、シビトバナ。分布:東北～沖縄。薬効:むくみ、肩こり、乳腺炎、乳房炎。生育環境等:土手や道ばたなどによく見られる多年草。地下の鱗茎はラッキョウに似た球状で外皮は黒褐色。9～10月に鱗茎から30cm内外の花茎を伸ばし、茎頂に鮮紅色の6弁花を輪状に咲かせる。花弁は細く外側にそり返り、中心から長い雄しべ6本と雌しべ1本が出る。花後に細長い根出葉を叢生する。翌年春には地上部は枯れる。種子はできず、鱗茎の分球により繁殖する。成分:鱗茎のアルカロイド(リコリン、リコレニン、コラミン、タゼチンなど)。採取と保存:5～6月に鱗茎を掘り上げて日干しにしたものを石蒜(せきさん)と言っている。使用法:石蒜は去痰薬などの製剤に使われていたが、現在は外用のみ。むくみ、肩こりには、生の鱗茎をすりおろして布に包み、両足の土踏まずに貼っておく。乳腺炎、乳房炎にもすり下ろしを患部に冷湿布する。注記:全草、とくに鱗茎には作用の強いアルカロイドを含むので、飲食してはならない。誤って飲食すると吐き気などの中毒症状を起こす。』と書いてある。ヒガンバナの花言葉は、ネット検索では、「情熱」「悲しい思い出」「あきらめ」「追想」「再会」「また会う日を楽しみに」「思うはあなたひとり」「陽気」「元気」「妖艶」などと、この花は、さまざまな象徴に用いられているようだ。
2024	9	25	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。晴天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は23～27℃、南東の風6m/s、陽射しが強いので、日傘をさす。湿度は60%。ハシビロガモの群れ5羽、アオサギが飛び立つ、アオサギ幼鳥、鳥屋野潟、ヒガンバナ、鳥屋野潟、鳥屋野潟公園ビオトープため池、を撮影した。ハシビロガモは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『季節・分布::冬鳥で全国的に生息。北海道では稀に繁殖。環境:河川、池、湖沼、海岸、内湾など。行動:1～数羽で、円を描くように水面をまわり、その渦の中心で集めたプランクトンなどを食べるが、扁平な嘴にある歯ブラシ状のものでろ過した水を吐き出すという独特な方法。形態:雄の成鳥羽になるまでや若鳥は換羽が複雑で、個体によって様々な羽衣がある。鳴き声:「クスッ」などと鼻に抜けるように鳴く。類似種との識別:雌雄ともマガモに似るが、嘴は扁平なことと識別できる。』と書いてある。今秋渡来したハシビロガモを初めて撮影。♀は嘴がオレンジ色(黄色)で、♂は生殖羽になると嘴が黒。渡来直後の♂はエクリプスなので、オレンジ色から黒に移行中のものが多い。2023年は9月30日、2022年は10月20日、2020年は10月6日に渡来を確認している。
2024	9	26	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、Tシャツ、シューズで出かける。気温は25～26℃、南南東の風2m/s、陽射しが強いので、日傘をさす。湿度は71%。アキアカネ♀横姿、クロバネツリアブ、マガモ♂エクリプス横姿、を撮影した。マガモは、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『季節・分布::主に冬鳥。全国的に生息するが、本州以北では繁殖する個体が増加している。環境:河川、池、湖沼、海岸、内湾など。行動:日中は休息して夕方から行動し始め、水田地帯などへ行って落ち穂や青草、イネ科植物の種子などを食べる。形態:雄の頭部は黒く、光の当り方で緑色や青紫色などに見える。中央尾羽の数枚は上にカールする。鳴き声:「ゲッグェツ」などと鳴く。類似種との識別:雌はオカヨシガモ雌と似るが、翼鏡の色の違いで識別できる。』と書いてある。今秋渡来したマガモを初めて撮影。♀は嘴がオレンジ色(上嘴が黒っぽい)。♂は嘴が黄色であることから、エクリプスと同定。アキアカネが大量発生している。ノシメトンボは木陰で見かけるが数は少ない。筆者のコンデジカメラは光学ズーム60倍であるが、ズームでフォーカスしてシャッターを切ると、画像が発光して撮影ができなくなった。しかし、ズーム以外は正常に撮影できる。ネット検索では、2014年生産で寿命は10年と言われている。そろそろ買い替え時かもしれない。

西暦	月	日	日誌
2024	9	27	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ポロシャツ、シューズで出かける。気温は25～26℃、北北東の風3m/s、陽射しが強いので、日傘をさす。湿度は71%。鳥屋野潟、チュウダイサギ冬羽が深水を歩く(横姿)、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中(横姿)、3羽のマガモ♂エクリプス、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中(横姿)、エンマコオロギ♀、鳥屋野潟、片足で立つコガモ♀後姿見返り、を撮影した。チュウダイサギ冬羽は、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『雌雄同色。嘴は夏羽では黒く、冬羽や若鳥では黄色。冬羽の亜種ダイサギの脛節から跗蹠にかけては白かピンク色っぽく、亜種チュウダイサギは全体に黒っぽい。』と書いてあることを根拠としている。エンマコオロギは、「日本の昆虫生態図鑑」に、『体長:26～40mm。分布:北海道、本州、四国、九州、対馬。出現期:7月～11月。頭部は球形に近く、顔は前方に突き出すことなく垂直。前脛節の聴器は内・外両側から認められる。全体にほぼ黒褐色で眉状斑は白色で複眼の後方でせばまる。草原、畑、土手や荒地に生息し、コロコロリーと鳴く。』と書いてある。エンマコオロギの撮影は久しぶりである。今までに、撮影した画像は2011年11月10日、2016年9月2日、2018年10月10日の3点だけである。昨日、ヨドバシカメラで、光学ズーム83倍のNIKON COOLPIX P950を購入した。83倍光学ズームは、すごい!!ただ画像の色合いが前のカメラと違う。全体的に、ちょっと暗い感じがする。
2024	9	28	柳都大橋と八千代橋で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ポロシャツ、シューズで出かける。気温は25～25℃、北の風4m/s、陽射しは強く、日傘をさす。湿度は74%。ウミネコ冬羽(前姿)、柳都大橋下流景観、ウミネコ幼鳥第1回冬羽、信濃川左岸下流景観、ツマグロヒョウモン♀、チュウダイサギ冬羽が水の中を歩く(横姿)、岸辺に佇むアオサギ(後姿)、チュウダイサギとカルガモが岸辺を歩く、八千代橋下流景観、を撮影した。ウミネコ幼鳥第1回冬羽は、「フィールド図鑑日本の野鳥」に、『第1回冬羽の姿図』により同定した。チュウダイサギ冬羽は昨日は鳥屋野潟で遭遇した。同じ個体かどうかは不明。同じ種で雌雄同色で成体(生殖が可能となった生物体)であると、数枚の写真だけで個体を識別するのは困難である。
2024	9	29	鳥屋野潟公園と弁天橋周辺で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ポロシャツ、シューズで出かける。気温は24～26℃、北北東の風2m/s、陽射しが強いので、日傘をさす。湿度は71%。チュウサギ若鳥が歩く(横姿)、チュウサギ若鳥が歩く(前姿)、鳥屋野潟、コガモ♂エクリプスと♀、鳥屋野潟、3羽のマガモ♂エクリプス、イヌタデの花(紅色)、ガガブタ群生地に佇むアオサギ(横姿)、ヒガンバナ木漏れ日で光る花、カンムリカイツブリ冬羽に換羽中(横姿)、を撮影した。コガモ♂エクリプスと♀は、「フィールド図鑑日本の野鳥」の姿図に、『エクリプスの脇羽は丸みがあり、雌や幼鳥ではとがり気味』と書いてあることを根拠として同定した。弁天橋から望む鳥屋野潟岸辺付近のヨシ原に、夏鳥のチュウサギ4羽が散在して餌を探していた。もうすぐ10月なので、南帰行を始めるために集まっているのかも知れない。
2024	9	30	西海岸公園で動植物との一期一会を楽しむ。曇天、ポロシャツ、シューズで出かける。気温は25～27℃、南東の風4m/s、陽射しが強いので、日傘をさす。湿度は61%。西海岸公園の日本海景観、ショウリョウバッタ♂、釣り船と海の蟹気楼、海の蟹気楼、ジョロウグモ♀、西海岸公園松林遊歩道、ウミネコ冬羽(前姿)、セグロカモメ幼鳥飛翔、西海岸公園の日本海景観、を撮影した。セグロカモメ幼鳥飛翔は、「フィールド図鑑日本の野鳥」の姿図に嘴が黒っぽい幼鳥が描かれていること、ウミネコ幼鳥の嘴はピンク色で先端だけ黒いことから判断した。セグロカモメは冬鳥で、9月中旬から10月下旬にかけて渡来する。海の蟹気楼を撮影したのは初めてである。蟹気楼の正体は、海上保安庁の船PL-51の船体だと思われる。